

---

# バカとテストと優等生

鳳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと優等生

### 【Nコード】

N1225X

### 【作者名】

鳳

### 【あらすじ】

バカテスの中でも需要が低そうな吉井明久×木下優子ssです。内容は原作6・5巻の『アタシと愚弟とクラス交換』の続きぐらい。「もし、あの後優子が明久を意識していたら？」というifストーリーです。完全に自己満足で書いているので原作と設定が違うなど多少の誤差が出るかもしれませんが。原作にない異型のカップリングが無理だと思っただけなら戻るを強く推奨します。更新も完全未定

## 第1話（前書き）

「あ、いらっしやい。今日は随分遅かったんだね」

「ごめん。授業の課題が中々難しくってね。     アンタこそきちんと宿題やってるんでしようね？」

「……………モチロンだよ……………」

「勿論、やってないのね……。 ……まったく、勉強サボって何見てたの？」

「アルバムだよ。さっきまで休憩がてらに掃除してた時にどこに置こうか考えてただけけど、つい開いたらそのまま見入っちゃって、最初は何にも入れてなかったのに、気がついたら随分沢山写真撮ってたんだね」

「へえー、     うわっ     こんなまでとってあったの！？     恥ずかしいから捨ててよ……」

「駄目だよ。これだって僕と”優子さん”の大事な思い出の一つなんだから」

「なっ！？     もう…バカ」

「誰にも見せないから大丈夫だよ」

「そういう問題じゃない！！     それと、そろそろその『優子さん』っていうのやめてくれない？     聞いててむず痒くなってくるんだけど」

「じゃあ何て呼べばいいの？」

「普通に呼び捨てでいいじゃない」

「そんなの僕が恥ずかしいよ！！」

「人の恥ずかしい写真見ておいて自分がそれか！！     アタシだってそうしてるんだし早く慣れなさいよ」

「…善処します。あ、あった。     僕達が呼び方変えたのって丁度この頃だったよね。そんな日も経ってないのにもう懐かしく感じるよ」

「そうそう。…………あれ？」あの写真”は？」

「うん？ ああ それなら僕のサイフの中に入れてるよ。あれがあれば優子さんと秀吉の相乗効果で僕の幸せ指数が何倍にも って痛たたたた！！ 何故ここで関節技があ！？」

「アタシというものがありながらまだ秀吉に未練があるのかアタタはあー！！」

「ごめんなさいごめんなさい！！ ほんの出来心だったんです！！」

僕は心はいつでも優子さん一筋ですうー！！」

「…………ふん、いいわ。 考えてみれば、その写真がそもそもの発端だったんだし、 これのおかげでアタシと”明久”が付き合うことになったと言っても過言じゃないわよね」

「ははは、そうだね。…あの時は ……」

## 第1話

とある男子トイシ。

その一番奥の個室の中で、僕は誰にも知られてはいけない秘密の取引を行っていた。

「……………1枚五百円」

「ぐ…、うとう、せめてあと百円負けてよっ！！」

「……………わかった。じゃあ四百円で」

「買った！！ありがとうムツツリーニ！！」

「……………毎度あり」

今、この僕、吉井明久の手元にはある10枚の写真が握られている。同じ文月学園の最低ランクのFクラスに所属する絶世の美女、木下秀吉の隠し撮り写真だ。

撮ったの勿論もう1人の親友である土屋康太ことムツツリーニ。

4

つい先日、『木下秀吉の胸が成長している』と噂されムツツリーニが輸血パック片手に（文字通り）命を賭けて撮影した希少な一品なんだ。

そしてムツツリーニは、そんな写真を親友である僕”だけ”に特別に売ってくれた。やっぱり持つべきものは友達だよね。

「うとうむ、さすがムツツリーニ、完璧なアングルだ」

どうやって撮影したのかもわからないほど完璧な正面からのローアングル

こんなこと僕では絶対（美波と姫路さんがいるから）真似できない。ムツツリーニ様々だ。

でも、おかげで僕のお小遣いはすっからん。当分ゲーム買えないよ…。  
いやいや!! 後悔するな吉井明久! 貴重な秀吉の写真を買うのになんの躊躇ためらいがあるんだ。

「やっぱり秀吉は可愛いなー。…どうして秀吉は自分が男だと言い張るんだろっ」

何かにかけて秀吉は『ワシは男じゃ!』と言ってくる。

そりゃあ戸籍だと男ってことになってるらしいけど、秀吉は歴とした女の子だと思っただ。

きつと木下家の教育の一環なんじゃないかな。高校卒業まで男として過ごさなきゃいけないとか、昨日見たドラマにそんなのあったし。

「きゃあっ!」

「え? おおっ!」

ゴソっ!!と鈍器を叩きつけたような音をしながら僕は何かと激突した。

痛たた…、しまった!!秀吉の写真の夢中で前を見てなかった。

「ご…ごめん!大丈夫? ってあれ?」

「あ痛たた…、なんなのよ…。 吉井君?」

「木下…さん」

目の前で尻餅をついていたのは僕の手にある秀吉の写真と瓜二つの顔。

文月学園で最高ランクのAクラス。そして秀吉の双子の姉でもある木下優子さんだった。

アタシ、木下優子は優秀な生徒である。

学力、運動能力共に学年上位であり、社交性にも優れるまさに模範的に生徒だった。

その評価故、先日にも文月学園のプロモーションビデオにも選ばれたこともある（もつとも、出たのはアタシじゃないけど）

そんな聞いたら誰もが羨ましがするような評価も……昔の話かもしれない…。

今のアタシは、

『同性愛趣味』

『スカートの中は常にノーパン』

『気になる異性は12歳以下の美少年』

という、女の子好きなシヨタコンノーパン主義の、紛うこと無き変人扱いだった。

「うっ…、思った以上に堪えるわね」

廊下でいたアタシは気疲れしてしまって手を窓に押し当てながら弱弱しく溜息を吐いた。

この前のプロモーションビデオ撮影の際、アタシは弱点である『音痴』を隠すべく愚弟の秀吉にお互いの姿と役割を交換した。

考えてみればこの時点で間違っていたのかもしれない。

多少顔にくまが出来ようと夜通しで発声練習でもなんでもやればよかった。

Dクラスの女子に『あの、木下さんって男子より女子のほうが好みなんですよね!!』と言われた時はもう返す言葉が見つからなかったわ。

違うのよ。私はちゃんと同世代の男子が好きなんだから、だからそんな羨望と期待の眼差しで見ないで欲しい…。

Aクラスでも妙に囁かれ噂されるわでもう散々。アタシの築き上げた優等生像を返して。

ああ、…なんか段々ムカついてきた。家に帰ったらもう一回秀吉を絞めてやる。何もかもあいつが悪いんだから!!

気を取り直し今度は如何にして秀吉を痛めつけようかと考えながら歩いてみると、

いきなり、真横から何かがぶつかってきた。

「きゃあつ!!」

「え? おおおつ!？」

痛ったあー…。勢いで尻餅ついた所為でお尻が痛い。つたく、一体何処誰よ。

「1!…ごめん!!大丈夫? ってあれ?」

えっ?

「あ痛たた…、なんなのよ…。 吉井君?」

「木下…さん」

アタシの前で心配そうに手を伸ばしたのは学年最低Fクラス。さらにバカの中のバカと言われる『観察処分者』にも任命されている。吉井明久君だ。

「ごめんね。僕がよそ見してたら。木下さん怪我とかない？」

「だ、大丈夫よ。アタシもちよつと考え事してたからお互い様。吉井君こそ。何してたの？」

「えっ!?!」

なんでそんなに狼狽えるのよ。

「えつとお…。そう!?!観察処分者の雑用をちよつとね!?!いやもうほんと参っちゃうよ。はははははっ…………!?!」

そう言つて高笑いする吉井君は何故か必死に右手を自分の背中に隠している。

…またFクラスは何か問題を起こそうとしてるのかしら。

「じゃあそういうわけで、もうすぐ授業始まるから、またね木下さん!?!」

「あつ!?!ちよつと吉井君!?!」

有無を言わせない勢いで吉井君はFクラスのある旧校舎へ向かって走っていった。

と、さつきまで吉井君がいた場所に紙みたいな物がヒラヒラと中を舞って落ちた。

「あれ?何か落ちてる。…吉井君の落とし物かな?そつだ。…せつかくだしFクラスの偵察も兼ねて持つていつて」

木下秀吉のローアングル写真（超近距離&へソちら）

「何よこれーっ!?!?」

何なのこれ!!なんで吉井君がこの写真を大事そうに持つてるの!!  
いやいやそれより!!

「これ、写ってるのアタシじゃない。…いつ撮られたの?」

家族すら見間違っただアタシと弟は容姿が似ている。

きっと吉井君はこれが本物の秀吉だと思っているのだろう。  
でも違う。いくら似てようと毎朝鏡で見ている自分の顔を間違えた  
りしない。

これは、アタシだ。

きっとプロモーションビデオを撮った日に秀吉の姿をしたアタシ。  
それ以外考えられない。いつのまに……?

「ど、どうしようこれ…。返さないといけないのかな…?」

自分が写っている写真を両手に持ってプルプル震えるアタシ。

自分自身が写ってる写真を男性に渡す<sup>かえす</sup>なんて、一体なんの罰ゲーム  
なのよ!!

いくらなんでも恥ずかしすぎる!!

いや、待てよ…。確かに写ってるはアタシ、木下優子だけどその姿  
は誰が見ても愚弟の秀吉。

「そうよ。写真だけ見れば秀吉にしか見えないんだから、焦らずに

堂々と返してあげればいいのよ。『吉井君、さっきこれ落としたわよ』とか大雑把に、…でもFクラスには秀吉もいるのよね」

アタシが自分の姿形を見間違えないのと同様で秀吉だってこれを見れば一発で自分じゃないって気付くじゃない。

あいつ演劇部にいるし、些細な特徴一つですぐにアタシだと看破されるだろう。

そうしたら吉井君にも当然伝わるから…、

キーンコーンカーンコーン！

「やば、チャイムだ」

ええい、この件は後回し！！とりあえず今日帰ったら秀吉の関節を全部逆にしてやる！！

「ふう、危なかったー」

Fクラスの教室についた僕はようやく安堵の溜息を吐くことが出来た。

それにしてもまさかあんな場所で木下さんに会うことになるとは…。ついうっかり『秀吉』って呼んじゃうところだったよ。

ズボンのポケットには秀吉の写真もある。木下さんに見られなくてよかった。

秀吉のお姉さんである木下さんに秀吉の”あの”写真を見せるのはいろんな意味で酷だろうしね。

チャイムはもう鳴ったのに鉄人がいないけど、何かあったのかな？

「アキ。こんなギリギリまでどこ行ってたの？」

自分の卓袱台に戻った瞬間、美波が尋ねてきた。

「た…ただのトイレだよ」

「それにしても妙にズボンの右ポケットを気にしてるようだが？そこには何か入ってるのか？」

おのれ雄二！！余計なことを…っ

「明久君」

「アキ…。ポケットに何が入ってるの？」

「えっ…、ちよつと美波！！姫路さん！！ホントに怪しい物なんか僕の腕がもげるうー…！！」

「さあ！！ポケットに何が入ってるか見せなさい！！」  
「往生際が悪いですよ明久君！！」

「明久も大変じゃのう」

「……………（コクコク）」

「そう思うなら助けてよーっ！！」

ああっ 僕の大事な秀吉の写真があ…。

「何これ！？全部木下の写真じゃない！！まさかアキってば本当に木下のことを」

「そんな…、酷いです。明久君はなんだかんだ言っても女の子が好きだと思っていたのに…、明久君は木下君のどこがよかつたんです

か…?」

「ワシの写真じゃったのか!？」

「へえ…、さすがムツツリーニ。綺麗に撮れてるじゃねえか」

「……………これぐらい、朝飯前」

「とにかく!これは没収ですからね!」

「そんな殺生な〜!!ああ〜みんなして僕のコレクションを回し見しないでえーっ!!」

くっ!!いくら美波や姫路さんでも今月のお小遣いをすべて使ったこの写真を没収されるわけにはいかない!!

今僕の写真を持っているのは、雄二が1枚で美波が3枚。姫路さんが4枚で秀吉が1枚か…。

…あれ?おかしいな、9枚しかない?

まさかまだポケットの中に…、やっぱりない。…あれ?

「ちょっと待ってみんな!!落ち着いて今持つてる写真を全部床に置くんだ!!」

「なんじゃいきなり…、恥ずかしいからあまりワシの写真を大っぴらに見せないでほしいのじゃが」

「まだ懲りないの!？」

「わああっ!?!暴力反対!?!…お願いだから言うとおりにしてよ。もしかしたら大変なことになってしまったかもしれないんだから」

「はあ?なんだそりゃ」

「…仕方ないですね」

渋々と言った感じにみんなが持つてる秀吉の写真を自分の目の前に置いた。

うん。やっぱり数は間違ってる。僕のポケットは裏返しにしても出てこないし、

みんなが1枚だけ隠してるとも考えにくい…。じゃあ一体どこにい

つたの!?

「……………ない。ない! ないよ!! 僕の一番のお気に入りのお写真が!!」

おかしい!! ちよつと前までちゃんと手に持っていたのに!!

「明久のやつどうしたんだ? なんか今日は一段と変だぞ」

「アキが変なのはいつものことじゃない」

「美波ちゃん、…それはちよつと言いつぎじゃないでしょうか…」

「どうやら、写真を1枚落としてしまったようじゃな。明久がここまで慌てるのは、ムツツリー二よ。一体明久にどんな写真を買ったのじゃ?」

「……………まさか…。明久」

「ムツツリー二…」

「すまない。学校の催しの準備で遅くなってしまった。それでは授業をはじめろ!!」

鉄人!! なんてタイミングの悪い!!

今はこれ以上探すことはできない。だが次は昼休みだ。チャンスは残ってる。思い出せ吉井明久…、僕はどこで写真を落とした!!

## 第2話

「それでは、これで授業を終了します。各自しっかりと予習復習を怠らないようにしてください」

授業が終わりお昼休みになった。

普段は静かなAクラスだけど、この時間だけは少し賑わいを見せる。そんな雰囲気の中、アタシは少しだけ気落ちしていた。

結局、アタシは秀吉の格好をした自分の写真に関する処遇をまったく決められなかった。

返すべきか、捨てるべきか…、

「はあ、なんでこんなことで悩んでるだろ。アタシ…」

いつものアタシなら迷わず捨ててたと思う。

秀吉の姿をしてるとはいえ、本人の許可なく勝手に撮影され挙句、それを男子が懐に忍ばせてるなんて気持ち悪いだけじゃない。一言で切って捨てる。

なのに、不思議と今回はそんな気持ちにならなかった。一体どうして？

「優子。ご飯食べようよ」

うんうん悩んでると優子が声をかけてきた。

「うん。すぐ行くね」

「…なんか悩んでたみたいだけど、何かあったの？」

こういう時、優子の感は日々鋭い。

かといつて、正直に話してもなんだかからかわれてしまいそうだし今は黙っておきましょう。

「ううん。ちよつとさっきの授業で分からない箇所があっただけ。大した事じゃないわ。すぐ行くから代表の所で待ってて」

「そつか。…優子がそういうなら、先に行ってるね」

そのまま愛子は踵を返し代表の元へ歩いていく。それを横目で見ながらアタシは小さく嘆息した。

もう割り切つてしまおう。これは秀吉の写真なんだ。アタシとは一切合財関係ないんだから

だから吉井君にだつて後ろめたい気持ちなんか無い。あるわけ無い。あつていい訳がない。そうだ。

これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…これは秀吉の写真…秀吉コロス。よしっ！！

尊い犠牲のおかげで少し気が楽になったアタシは惣菜パンをもって代表にいるテーブルに向かった。

が…、

「…あれ？ 代表も愛子もいない。ここで合ってる筈んだけど」  
いつもの場所にいるはずの2人の姿がない。

その代わり、テーブルの上に畳んで置いてある便箋があった。置手紙かしら？

この模様は代表が使ってるヤツだ。裏を捲ると『優子へ』とごく丁寧に名指しまでしてある。

アタシはその場で封を切って中身を見た。

『優子へ、ごめんなさい。至急雄二を肅清しなければいけなくなつたのでお昼ご飯は食べられそうにありません。愛子もいるので用事があったらFクラスまで来て下さい』

…坂本君に一体何が合ったの？

「でも、Fクラスならある意味都合ね」

ちょうどアタシもFクラスに用事がある。

1人で食べるのも味気ないしアタシもFクラスに行こう。

あくまで愛子と代表と一緒にご飯を食べる為にね。

秀吉（中身はアタシ）の写真を落とし主に届けるのはそのついでなんだから

ムツツリーニ曰く、僕が落としてしまった写真に写っていたのは秀吉ではないらしい。

屋上でお弁当を食べながらその言葉を聞いた僕は、驚きのあまり思わずお箸を落としてしまいそうになった。

「秀吉じゃないってどういうことムツツリーニ？ 僕ずっとあれ見て歩いてたけどどうみても秀吉にしか見えなかったよ？」

「……………あの写真を撮影してる途中、微かに背中からブラ線が見えた」

「そりゃ当然だよ。秀吉は女の子なんだから」  
「待て！？ どちら辺が当然なのかワシにはさっぱり分からんのだ  
やが」

今ここにいるのは僕とムツツリー二と秀吉の3人だ。

雄二はついて来なかった。学園祭の時と同じでアイツは興味の無い  
ことにはとことん無頓着だ。

美波と姫路さんもない。

きっと今頃3人、Fクラスでお弁当を食べているだろう。

……、ピッピッピ

「明久よ。何をしておるのじゃ？」

「霧島さんにメール。今Fクラスで雄二が女子2人と仲良くお弁当  
食べてるよって」

「悪魔かお主は……」

さつき僕を貶めた仕返しだ！！

「……話を戻す。きつとあれは秀吉に変装した木下優子だ……」

「ええっ!?!」

秀吉とお姉さんが入れ替わってたなんて僕、初耳だよ！！

「そつなの秀吉!! いつのまにお姉さんと入れ替わってたの!?!」

「あ、あー…、いろいろあってのう。一時的に姉上と容姿を入れ替  
えたことがあったのじゃが、その時の写真じゃったか……」

「……………(コクン)… 木下優子の写真はあれ1枚のみ、そのほか  
9枚はすべて本物の秀吉だ」

「」

「どうしたのじゃ明久。そんなに全身汗まみれになりおつて」

「やばい、やばいよ僕……。じゃあ僕はお姉さんがいる前でお姉さんの写真を眺めてニヤニヤしてた変態ってことじゃないか。」

「そんなことがもしお姉さんにばれたら……、まずは美波と姫路さんに知れ渡ってしまい僕は美波に全身の関節を外されて姫路さんの手料理を口に押し込まれる……！」

「そして何故か姉さんにまで知られてしまい罰として姉弟の甘い口付け……！」

「駄目だ……！ 本当にそんなことになってしまったら僕は肉体的にも精神的にも社会的にも死んでしまう……！」

「くっ……！？ 確かに前の試召戦争では秀吉がお姉さんに変装したことがあつたけど、まさかその逆パターンがあるうとは……、」

「じゃあ、例の『秀吉の胸が成長している』噂の正体ってひょっとしてお姉さんだったのか……！」

「……………恐らく」

「できれば早く忘れてほしいのじゃ……！」

「秀吉が分かりやすく落ち込んでいた。」

「大丈夫だよ。胸なんか無くたって僕にとっては秀吉が美少女であることに変わりはないからね。」

「あつ……!?」

「僕、ムツツリー二と取引した後、教室に戻る途中でお姉さんとぶつかっちゃったんだけど、もしかしたらその時に落とされたのかも……！」  
「なるほどのつ」

「……………だがそうになると、あの写真は現在、木下優子が所有していることになる……！」





「……（ビリビリ）」

教室の中心で何故か全身亀甲縛り。黒い布で目隠しをされ天井に吊り下げられている坂本君と、その傍でスタンガンを持って悠然と佇む代表がいた。

坂本くんは全身に力をなくしたように宙ぶらりんの体勢のまま微動だにしていけないけど、あれはまだ生きてるのかしら？

「あれ。…木下さんですか？」

呆然としてみると、横から突然声掛けられた。

「姫路さん。ええ…。代表と愛子を追いかけて来たんだけど、…一体どういう状況なのこれ…」

「えっと、…ちょっと前に突然翔子ちゃんがすごい形相で教室に入ってきて、坂本君を一瞬で気絶させた後、携帯のアドレス張をチエックして鞆の中身と衣服のポケットをすべて点検した後に目を覚ました坂本君をスタンガン片手に尋問していたんです」

「一体坂本君はどんだけスケールの大きい浮気をしたんだらう…。、2人は付き合ってるって話だけど、彼は代表にきちんと人間扱いされているのだろうか。」

「…干物になった坂本君と彼を抱きしめている代表は一先ず置いておいて、アタシは姫路さん達がお弁当を食べている卓袱台の元に向かった。」

「あつ！ 優子。優子も来たんだね」

「木下さん？…へえ、Fクラスに来るなんて珍しいわね」

「あんな置手紙されちゃ気になって当然じゃない。こんにちは島田さん。相席させてもらってもいい？」

「勿論よ。どうぞ座って」

島田さんから綿が半分くらいしか入ってなさそうな座布団をもらってアタシはようやく腰を下ろした。

そしてさり気なく教室を見回すと、あれ？ 吉井君いないじゃない

…。秀吉と土屋君の姿も見えない。  
どこ行っちゃったんだろう…？

「吉井君達はいないの…？」

「明久君なら、前の休み時間の最中に大事な写真を1枚落としてしまったみたいで、授業が終わった途端に土屋君と木下君を連れて何処かに飛んでいってしまいました」

「えっ！！」

…まさか…、

「まったく、アキもアキよねー。なんでそんなに木下の写真が大事なんだか…、もう100枚以上もってるんじゃないの？」

「そりゃあ、木下君は可愛いからねー」

やっぱりいいーっ!?!?

吉井君はこの写真を探してるんだ!! でも幸いまだ中身がアタシだとはバレてない様ね…。

どうやらアタシ達は入れ違いになってしまったらしい。はあ…今日とはことんツイてない…。どうしてこうなるんだか、

なんだかこのもやもやした思いを金属バットに乗せて吉井君に叩きつけたくなってきたわ。

考えてみればなんでアタシってば、自分が写ってる写真なのにそれを吉井君に返したがつてるかな…。

捨てることだつて考えたけど、どうしても実行に移すことはできなかった。

吉井君なんて別になんとも思っていないはずなのに、でも何故か心の奥ではそれは違つと否定してしまう。

吉井君がこの写真を秀吉だと勘違いしてるなら、その間にアタシだとバレないようさつさと渡してしまおうと思つたのに、Fクラスに来た途端、そんな考えなんてもう頭の隅っこにすらなかった。

あのプロモーションビデオを撮影した日以来、アタシの中で、吉井君の存在が少しでだけ大きくなっている気がした。

アタシは…、

《優子がパン持ったまま硬直してるよ…》

《…なんか木下さんの様子変じゃない？ 心ここにあらずというか…》

《でも今の木下さんはすごく可愛いです。勿論いつも可愛いんですけど、今はなんだか恋する乙女の顔みたいで》

《恋かあ…、優子つて学校では妙に堅物でプライド高いからそういう話はあんまりなかったんだよね…。…そういえば優子つてここに何しに来たんだろう？》

《2人を追いかけてきたんじゃないの？》

《でもさつき明久君はいないのとか……》

《…まさか……》

「…何をヒソヒソ話してるの？」

「…うひゃあっ!？」

「えっ!？」

代表と3人の大声でアタシは思考を強制的にシャットアウトした。危なかった…、これ以上考えてたらアタシの中の吉井君像が物凄い

ことになっていたかもしれない。

「……翔子ちゃん!! 坂本君はどうしたんですか!?!」

「? ……雄二ならあそこ」

代表が指を指した先には、卓袱台の上にだらんと両手を投げ出し顔を突っ伏した坂本君がいた。

彼の顔はアタシ達の方とは反対方向に向いていて、ここからだとながみのように逆上がった髪しか見えない、見ようによっては寝てるようにもとれるけど違う意味で意識はないんじゃないかな…。

「そつえばそろそろお昼休みが終わりだね。ボク達もAクラスに戻ろっか」

「……もうそんな時間」

携帯を開いて時間を見るともう次の授業が始まるまで10分もない。えー…、まだアタシパン食べてないのに…、

残念だけど時間切れね。結局昼休みは吉井君には会えなかった。

もしかしたら今日はもう吉井君には会えないかもしれないわね…。

アタシたちはFクラスを後にしAクラスに戻った。

……廊下でも会わなかったけど、ホントに吉井君どこいったの？

「ん? ……なにこれ…?」

自分の机に戻ると、『木下優子さんへ』と大きな文字で書かれている便箋が置いてあった。

なんだろう…、最近はずし紙が流行ってんかしら…?

まだ授業開始まで少しだけ時間があるのでアタシはその場で手紙の封を切る。

中の手紙には筆圧の強い文字でこう書いてあった。

『木下優子さんへ、ずっと貴方のことを想っていました。直接会って伝えたいことがあるのでよろしければ今日の放課後、体育倉庫まで来てください。とある男子より』

「これって……っ」

まさか……、ラブレターっ!？

ふと、一つの考えが僕の脳裏をよぎった。

どうしてFクラスに向かっていたはずの僕たちが今補習室にいるんだろう……？

と、

そうだ。僕たちはFクラスへ向かう途中で鉄人に会ったんだ。

その時鉄人は大きな段ボール箱を持っていた。

話を聞くと、どうやら僕たちから没収した品がロッカーに入りきらなくなつて保管場所を移動されているらしい。

忙しそうに僕らを通り抜けようとする鉄人を見て、僕はある考えが浮かんだ。

今鉄人をぶちのめせば没収された品を取り戻せるんじゃないか？と、

幸い鉄人はダンボール箱で両手が塞がっている。奇襲にはもってこいの状況だ。

ムツツリー二と秀吉にアイコンタクトをする。すると2人は小さく頷いた。どうやら考えは同じのようだ。

僕たちは慎重に襲うタイミングを窺った、そして鉄人が僕らに背を向け歩き出した瞬間っ!？

「お前達は少しぐらい学習するという考えはないのか？」

見事、返り討ちにあっただんだ…

「俺がなんの警戒もなしにお前達から預かった物を持ち歩くわけが無いだろう」

「いくらなんでもエロ本やゲームが大量に入ったダンボール箱で直接ぶん殴ってくるなんて思いませんよっ!！」

「……………計算外……」

「あれにはワシも度肝を抜かれてしもうた……」

あんなの並の鈍器より数倍殺傷能力があるぞ!!

「この卑怯者めっ!！」

「まだ減らず口が叩く元気があるようだな。いいだろう、もう1つ問題集を追加してやる。授業の出席は布施先生に俺から連絡しているから安心しろ。今日は放課後まで思う存分相手になってやるからな!！」

「「うぎいいいい!！」」

「明久!!お主また余計なことをっ!！」

「吉井っ!! お前は放課後に雑用も頼むつもりだから覚悟してお

「けっ!!！」

「そんなぁーっ!!？」

僕はただ写真1枚取り戻したいただけなのにどうしてこうなったっ  
のーっ!!？

その後、僕らは放課後までみっちり絞られた…。

### 第3話

今日最後の授業が終わり、アタシはそのままの足で体育倉庫に向かっていた。

…手にはお昼休みにもらった一通の手紙が握られている。

文面から察するに十中八九ラブレターだと思うんだけど、…正直言  
ってあまり気は進まなかった。

別に嬉しくないわけじゃないのよ？

朝から吉井君　　っていうかアタシの写真の件で悶々としていたか  
ら精神的に疲れちゃって今はちよっと気力がなくなっちゃっただけ。

「あれ？なんで体育館に召喚フィールドなんて張ってるの？」

今から向かう体育倉庫を含むほぼ運動場全体に召喚獣を出す為の召  
喚フィールドが展開されていた。

試召戦争でもないのに、誰か召喚獣の戦いでもやってるのかしら？  
今勝つてもメリットはないし、負けたら問答無用で補習室送りにな  
っちゃうのに、物好きなヤツのいるのね。

ま、今のアタシには何の関係もないけど、

下駄箱で靴を履き替えた後、アタシは少し憂鬱な気分ですり体育倉庫に  
足を運んだ。

「お待ちしていました…」

中に入ると大人しそうな女の子が、ゆっくりとこっちに振り向いて、

「えっ？」

.....女の子？

「まさかあの手紙を書いたのって...？」  
「はい。私です...。それが何か？」

あれ？ちょっと待って！？ いろいろとおかしくない？

「でも差出人には男の子って書いてあるんだけどっ！？」  
「.....？」

「なんでそこで不思議そうに首を傾げるの！？ お昼にもらった手紙にはちゃんと『とある男子より』って

「はい。ですから、私は男子ですよ？」

「

え？.....どういうことなの？

おかしい...、この子?...との会話がまったく噛みあっていない...。  
見た目160程度の身長で腰まである長い黒髪。おでこにはヘアバンドを着けていて制服は女子。  
でも本人は男子という。

駄目だ...。状況がまったく理解できない...、何故アタシは女装した男子に告白されようとしているの？

「待って、順を追って説明してくれないかしら？」

「はい。木下さんのことを意識し始めたのは

「違う違うっ!? アタシに惚れた経緯じゃなくてどうして貴方が女装することになったかってことよ!?!」

ああもっつ!! なんで今日はこんなにアタシを混乱させることばかり起きるのよっ!?!

厄日かちくしょー!!

「それは勿論。木下さんの好みに合わせようと思って」

「待って、お願いだからちよつと待って、どうしてアタシの好みに合わせようとしてそれが女装になるの?」

「えっ?...私聞きましたよ。木下優子さんは女の子の格好をした小さい男子が好みだって...」

「はい?」

...今、アタシはなんて言われたの?

木下優子の好みは女装した小さい男の子?

「あの、どうかしましたか?」

「あ、いや、うん。ちよつとね。心の整理がつかなくて、ごめんね。もう少しだけ待って」

「はい」

待て待て、一体どういうことなの?

いつからアタシは女装男子が好みの変態になった? 今回は別に何かしなことなんてしてないはず、.....ん? 何もしてない?

なんだろう?...? なんか引つかかるわね。

女装...女の子。小さい男子.....子供.....シヨタ。

.....もしかして...、

『同性愛者』 + 『好みは12歳以下の小さい男の子』 || 女装した小さい男子？

「はは、はははははは…」

「ど、どうしたんですか！？ なんだかこの世に生きるのが疲れたような表情をしていますよ！？」

うん。それ強ち間違っていないわよ。

ひ・で・よ・しの奴ーっ！！！！？？？

アンタが変なこと言った所為で余計な尾ひれまで出てきてるじゃないのーっ！！？

ふふふ、アタシ。人に対してこんなに殺意を覚えたのは生まれて初めてよ。

あの大バカ野郎…、家に帰ったら今度こそ殺してやる！！

「ごめんなさい。あなたの気持ちにはお答えできません」

「ええーっ！？ まだ何も言っていないのに！！」

「あとアタシは”決して！！”女の子好きでもシヨタ好きでも女装男子好きでもないから、なんか、ごめんね」

「は、…はい」

あれ？この子なんて名前なんだろう？

…ま、いつか。

どうしよう、と僕は小声で呟いた。  
今、僕の目の前で大人しそうな女の子がモジモジと立ち尽くしている。

誤解の無いように言うておくと決して僕は覗きとかそんなんじゃない。

地獄のような補習が終わった後、僕はそのまま鉄人の命令で放課後に体育倉庫の整理片付けをしていた、そして、いろいろ合って精神的にも肉体的にも疲れていた僕はついぼーっとしてバスケットボールを入れた籠を倒してしまった。

慌てて直そうとしたんだけど、その途中で突然、例のあの子がここに来たんだ。

びっくりしてつい隠れちゃったけど、今の僕って結構やばいんじゃないの？

ボール籠の背後に身を隠していた僕はばれないようにひっそりを顔を出す。

幸いボールが壁になって僕の姿は見えないはずだけど、あの子は一体何しに来たんだろう。

それから数分。なにも変化なし

…今更だけど、別に僕には今回後ろめたいことなんてないんだから、このまま堂々と出て行ってもいいんじゃないか？と思えてきた。

そうだよ。これ以上ここにいて余計な誤解ができるぐらいなら、今さっさとここを出たほうが良いに決まってる。

心を決めて立ち上がるうとした瞬間、突然僕でもあの子でもない別の足音が聞こえてきた。

「お待ちしていました…」

ん？誰だろう？

「…まさかあの手紙を書いたのって…？」

あれ？この声、聞き覚えがあるような。

気になって少しだけ顔を覗かせた瞬間、僕はその場でずっこけそうになった。

(なして、木下さんがここにっ！?)

吹き出さなかったただけでもよく我慢できたと思う。

今朝、僕はムツツリー二から秀吉だと思って買ったお姉さんの写真を落とした。

彼女はその拾い主の筆頭候補だ。

お昼休みにずっと探したけどいかなかったのに、どうして今ここにいるのっ！？

どうしよう…。これじゃ出るに出られないよ。

よし。ひとまず様子見だ。

「女の子？…まさかあの手紙を書いたのって？」

「はい。私です…。それが何か？」

なんだろう…。一体2人は何の話をしているんだ…？

お姉さんは僕が探してる間にあの子に手紙をもらったみたい

「で、でも差出人には男の子って書いてあるんだけどっ！？」

「……？」

「なんでそこで不思議そうに首を傾げるの！？ お昼にもらった手紙にはちゃんと『とある男子より』って」

「はい。ですから、私は男子ですよ？」

「」

えっ！？

（あの子男だったのおおおお　っ！？）

思わず自分の目を擦ってしまった。

お姉さんと対面してるのはどうみても女子だ。女子用の制服だった着てるし！！

状況がわからない。何だ？何が起こってる！？　どうしてお姉さんは女装した男子に手紙をもらえるの！？

僕はひよっとしてとんでもない状況の下に落とされたんじゃないのか。

「待つて、順を追って説明してくれないかしら？」

見ればお姉さんも絶句していた。まあ当然だろう。

「はい。木下さんのことを意識し始めたのは」

「違う違うっ！？　アタシに惚れた経緯じゃなくてどうして貴方が女装することになったかってことよ！？」

惚れた？…まさかこれは告白だったの？

女装して好きな人に告るなんて、あの子は度胸がありすぎる。

僕では絶対無理だ。

「それは勿論。木下さんの好みに合わせようと思って」  
「待って、お願いだからちょっと待って、どうしてアタシの好みに合わせようとしてそれが女装になるの？」

「えっ？…私聞きましたよ。木下優子さんは女の子の格好をした小さい男子が好みだって…」

「はい？」

へっ？

今なんと申した…？

「あの、どうかしましたか？」

「あ、いや、うん。ちょっとね。心の整理がつかなくて、ごめんね。もう少しだけ待って」

「…はい」

僕も心の中でお姉さんに同意した。

まずい。ついていけない…。

前に噂で、木下優子は男より女の子が好きなのシヨタコンノーパン主義と聞いたことがあるけど、まだ続きがあつたなんて、…そりゃあ趣味趣向は人それぞれだけど、僕…だんだんお姉さんのことがわからなくなってきたよ…。

その後、思案していたお姉さんはふと、頭を上げ、同時になんだか複雑な表情で笑っていた。その笑みの中にドス黒い殺意が見え隠れしてる気がするんだけど、きつと僕の見間違いだ。うん。

お姉さんはそのまま相手に何かを言う機会を与えず一瞬で相手の子を振った。

…あの子、ちゃんとした告白もしてなかったのに、少し可哀想にな

ってきたな。

.....

「ホント、なんで今日はこんなに疲れるのよ...」

相手の子が去った後、お姉さんが重い溜息を吐く。

僕はまだ出て行けなかった。というかこの状況で堂々と出てこれるわけが無い。

…早くお姉さんも外に出てくれないかなー？と思っていると、

ピピピピピピピピピピっ！！ 明久の携帯の着信音

(ノオオオオオオオオオオオオウウウウウウ　っ！？)

マナーモードにするの忘れてたあ　っ！？

「　っ！？　何の音っ！？」

やばい！！　お姉さんがこっちに来る！！

僕は一瞬で左右を見て退路をさがす。駄目だ。こんな狭い倉庫でこれ以上隠れられる場所なんてない。もう腹をくくろっ。正直に全部話すんだ！！

そっすればきつとお姉さんだって笑って許してくれるよ！！

僕は覚悟を決めた。

「ば、ばあー.....」

「……………」  
「……、驚いた？」  
「……ええ、すつごく驚いた。吉井君。ここで何してたの？（ニコニコ）」  
「え、それは、…」  
「それは？（ニコニコ）」  
「観察処分者の雑用を頼まれて、ここの整理をしてただけなんだけど」  
「へえ、そうなんだあ（ニコニコ）」

お、なんだか良い感じ。

「つてえ、同じ言い訳が二度も通じるわけないでしょうがあああああああああ　っ!？」  
「あああああああ　っ!？　嘘じゃない!!　本当に雑用してただけで木下さんと女装した男子の告白現場を見てしまったのはただの偶然なんですうう　っ!!!」  
「なら、今すぐ全部忘れろおお　っ!？」  
「おおあああ、駄目だよ!!　僕の脊髄はそっちには曲がらないのにい　っ!？　どうしてこうなるのおおお!!!」

## 第4話

吉井君に関節技をお見舞いした後、アタシたちは帰路に向かって歩いていった。

「まったく、どうして吉井君はこういう時ばかり出てるのよ」

「全面的にごめんなさい。つい出来心だったんです…。僕もお姉さんに女装男子好きがあつたなんて知ら」

「へえ、何？ もう一回忘れたいのかしら？（拳）」

「はいっ！！ 僕は何も見てません聞いてません！！」

土下座するような勢いで謝る吉井君。

その姿が、妙に手慣れている感じがするのはなんでかしら？

「ふんっ。それでいいのよ。あと、アタシは同性愛者でもシヨタコンでも女装男子好きでもないからね。アタシの好みは」

「好みは…何？」

……っ！？

「な、なんでもないのっ！！ この話はなし！」

「??？」

危ない危ない。つい勢いで『アタシの好みは吉井君みたいな普通の男子なのよ』と言ってしまっそうになった。

その吉井君はアタシの隣で気だるそうに歩いている。

……なんか気に入らないわね。

アタシだっで一応女の子なんだから、もう少し緊張とかしないのか

なこいつは？

秀吉にはあんなにデレデレしてるのに、

その時、アタシのお腹の虫が小さな音を上げた。

「なんかお腹すいたなー、そういえばアタシお昼食べてないんだっ  
たわ」

「へっ？ そうなの？…そこまでして僕の命を…」  
「は？」

「いやいやいやっ！！ なんでもないよ。それならどこかで、あつ  
ちようどいいベンチがあるよ！！ あそこで休憩する？」

「なんでこんな時間に吉井君と休憩しなくちゃいけないのよ…。ど  
うせ帰ったら晩御飯だし、これはもう諦めるわ」

『賞味期限』が今日の惣菜パンを鞆から取り出す。

アタシはもう食べないだろうし、家に帰ったら関節全部外した秀吉  
の口にも放り込んで、

「あの、木下さん」

「何？」

「……………」

妙に血走った目でアタシの手、というより手に持ったパンを凝視す  
る吉井君。

なんだろう…、今の吉井君からは肉を前にした肉食獣のような気迫  
がある。

「食べないんですしたら、できればそのパンを僕に恵んでくれませ  
んか？」

「…なんで吉井君にアタシがパンをあげなくちゃいけないのよ。そ

れにこれの期限は今日までよ?」

「大丈夫っ!! 僕に掛かれば賞味期限一月経った後のパンでも食べられるからっ!!」

「常識的に考えてそんなもの食べちゃ駄目でしょ!!」

真顔でとんでもないことを言う吉井君。思わず突っ込んだじゃったじやない。

彼の普通の食生活がかなり心配になる発言だった。

そういえば前に、秀吉が『明久のお昼は64分の1カップメンじゃったからのっ』とか言ってたっけ。

一体普段からなにを食べての生きてるのかしら彼は。

「ははは、最近は姉さんもいるから前よりは大分贅沢なご飯が食べられるんだけど、やっぱり貧乏にが違くないわけで… 木下さんがいらぬなら僕の明日のお昼にと思っただけど」

「痛んだ食べ物食べる癖は早めに直しなさい。ん?…吉井君ってお姉さんいるの?」

「うん。…夜中にひっそり僕のベットに忍び込んで僕にスカート穿かせようとしてたり、罰と証していやらしいキスを迫ってきたり、化学薬品を調味料に使った料理を僕に試食させようとするお茶目な姉さんだけど」

「それをお茶目の一言で済ます吉井君のほうがすごいわっ!?!」

なんなのっ!?! 吉井家の人間はみんなどこかの頭のネジが飛んでるのっ!?!

「もういい。吉井君の話聞いてたら余計疲れてくるから…」

はあ、とアタシは今日何度目かわからない溜息を吐いた。姉弟って一言で言ってもいろいろいな形があるのね。

アタシにも看過できない問題があるのに、吉井君を見てるとなんだか全部バカらしくなってくるのは何でだろう…。

今のアタシの目下の悩みは二つある。

一つは、ついさっき知ってしまった『木下優子は女装男子が大好きな人』という極めてまずいレッテルを貼られていること。

噂に尾ひれがついて勝手に曲解された誤認情報なんだけど、だからと言って放っておくわけにはいかない。

ただでさえ秀吉の所為で『女の子好きなシヨタコンノーパン女』なんて不名誉極まりない噂が流れているのに、これ以上余計な事になったら、こんどこそアタシの優等生像は崩壊する。

もう一つは、今横にいるこの吉井君。

まだ、アタシはあの写真を返していない。

いろいろ込み合った所為で結局写真の件は有耶無耶になってしまった。

でも、ずっと持ってるのも居た堪れない。

何か、吉井君に写真を返せる都合ができる。そんな都合のいいことが起きないかしら…。

「あつ、バカなお兄ちゃーん つ!!!」

そんなことを考えながら歩いていると、小学生ぐらいの小さな女の子がそんなことを言いながらこっちに近づいてきた。

「葉月ちゃん。こんばんは。こんな時間に何やってるの?」

「吉井君。知り合いなの?」

「あ、うん、この子は」

「お姉ちゃんもいるですつ。こんばんはです!!!」

「へっ?」

会ったことがないはずなのに知り合いみたいな挨拶をされた。

…アタシ達初対面のはずだけど、  
ひよっとして秀吉と間違えたのかな？

「葉月ちゃん違うよ。この人は木下優子さんって言って秀吉の双子のお姉さんなんだ」

「そうなんですか。はじめまして、島田葉月小学5年生です!!  
優子お姉ちゃん。秀吉お姉ちゃんとすごく似ていて葉月びっくりです!!」

…秀吉が子供にお姉ちゃん呼ばわりされてる件については今日帰ったらあいつの関節を抱きしめながらゆっくり追及してやろう。ふふふ、どうしよう…。アタシ今日から1人っ子になっちゃうかもしれないわ。

「うん。よろしく葉月ちゃん。…あれ？島田？ ひよっとして島田さんの妹？」

「はいっ!! 美波お姉ちゃんとお知り合いですか？」

「勿論。島田さんとは友達よ」

「わあっ そうだったんですか。これからお姉ちゃんをよろしくです!!」

邪気は一切ない無垢な笑顔で答える葉月ちゃん。

いいな。こんな可愛い子が妹なんて、島田さんが羨ましいわ。家の秀吉と交換してくれないかしら？

アタシ一度でいいからこんな可愛い妹に『優子お姉ちゃん』なんて言われてみたかったのよ。

「葉月ちゃん。こんなところで何してたの？」

アタシが軽くトリップしてる間。吉井君が葉月ちゃんに尋ねた。

「あつ、そうだ。バカなお兄ちゃんっ」

今更だけど、吉井君のバカって学校外にまで知れ渡ってるんだ…。

「大変なんですっ　すぐに来て下さい！！」

「どうしたのっ？」

さつきとは全然違う思い詰めた表情で吉井君の服を引っ張る葉月ちゃん。

この焦り方どうみてもただ事という感じじゃない。

アタシも吉井君も表情が険しくなる。

「とにかく、こっちですーっ！！」

「わかった。案内してっ！！」

「あつ、ちよつと待って。アタシも行くっ」

吉井君が葉月ちゃんに手を引かれどこかに連れて行かれる。

アタシもすぐその後を追った。

「あれなんです」

公園まで来た葉月ちゃんは遙か上を指差した。

「上?...ああ、なるほど、風船が引っ掛かっちゃったのか」

ああ、これで焦っていたのね。

吉井君と同様に上を見上げると、何かの動物を模した風船が木に引っ掛かっていた。

「うん。葉月がぼーっとしてる間に手からノイちゃんの風船が離れちゃったの。バカなお兄ちゃん。どうしようーっ!？」

「そうだねえ…」

「妥当な線でいけば近所からハシゴを借りてくるとかなんだけど」「でも、それだと間に合わないかもしれないよ」

確かに、吉井君の言葉は正しい、  
かろうじて枝から伸びた大量の葉っぱが小さな屋根になって風船の進行を防いでいるけど、  
あんなの一度風が吹けば、すぐ飛んで行ってしまふ。

葉月ちゃんが涙目で木の上に引っ掛かる風船を見上げている。  
それを見て、アタシは少しだけ心が痛んだ。  
この子のためにも、できれば取ってあげたいけど、今のアタシでは正直厳しい…。

その時、目の前で吉井君が一步前へ出た。

「僕が行ってくるよ」

「えっ? 行くつてどこに?」

「僕が木に直接登ってあの風船を取ってくる」

…なっ!?

「正気っ!?! いくらなんでも無理よ!! 風船は木の天辺にあるのに、万が一足場が折れたりしたら、もっと違う方法を」

パツと見の目測でもこの木は10メートル以上ある。実際もつと高いだろう。

そこから中で明かりが見えてきている一軒家より遙かに高い。

落ちたら骨が折れるかもしれないし、当たり所によっては死ぬ可能性もある。

いくら普段からバカバカつて言われてもそれぐらいは分かるはずなのに…、

「議論してる時間はないよ。それに僕は、なんでもやる前から諦めたくないんだ」

「吉井君…」

「バカなお兄ちゃん」

「待っててね葉月ちゃん。お兄ちゃんがすぐに取ってきてあげるから」

そう言つて、葉月ちゃんの頭を軽く撫でた吉井君はその足で一步、近くの枝葉へ飛んだ。

アタシと葉月ちゃんはその光景を固唾を呑んで見ていた。

駄目だ。彼は何と言おうと進むだろう。

もう吉井君を止める事はできない。なら、せめて、何も起きないよう祈っているしかない。

吉井君は着々と上へと上がっていく。

偶にペキペキとヒビが入ったような嫌な音が聞こえるけど、それでもかまわず進んで行った。

「あつ、バカなお兄ちゃん。大丈夫？」

「大丈夫よ。きっと、吉井君はバカだから、こんなことで怪我なんかしないわ」

葉月ちゃんに言った言葉は、まんま自分へ向けた言葉でもある。なまじ頭が回る所為で、嫌な想像ばかりついてしまう。

小学生がするような木登り程度ならいいけど、これはいくらなんでも高すぎる。

ちよつと足を滑らせただけで地面まで急降下、そしたら待っているのは悲惨な光景だけ、そんなのは嫌っ！！

どうか、彼に何も起こりませんように、

暗がり＋大量の木の葉の所為でどんどん吉井君の姿が小さくなって肉眼で捕らえにくくなってくる。

『よっ…、はっ、…うわっ…くそ』

それでもめげず少しずつ登っていく姿を見て、とある考えがアタシの脳裏をよぎった。

アタシが今までのただのバカと思っていた吉井君の認識は少しだけ間違っていたんじゃないか？

別に吉井君がバカじゃないわけじゃない。でも、彼らFクラスがいつも問題を起こすように、Aクラスのアタシでは考えもつかないようなことをやってしまう点ではある意味彼は天才だ。

アタシは絶対こんなことしない。できないではなく、しない。

どうみてもリスクと結果がつりあっていないから。普通ならもう一つ同じ風船を買ってあげるなりすればいい。

それなら無くした物は返ってこないけど、その喪失を埋められる程度の足しにはなる。

でも、吉井君は直接その足で登っていく。自分ではない誰かの大切

な物をその手で掴む為に、

…確かに、吉井君はバカだ。

それも、すごくバカですごく一直線ですごく諦めない人間。

もつと違う道があるのに、わざわざ目の前の険しい方へ自ら赴く直情的短絡思考バカ。

学校からも認められるほど優等生としての仮面を被り続けたアタシとは正反対の位置にいる学校唯一の観察処分者である大バカ野郎。

けど、吉井君の行動は、真似したいなんて思わないけど、決して笑っていいものでもない。

やってることは確かにバカだけど、今はそれでもいいんじゃないかって思えてきた。彼みたいなバカな人がこの世に1人ぐらい居たっていい。

アタシはそんな自分ではできない真っ直ぐさが、愛しいって思うから、

きっと、…アタシは、そんな吉井君に惹かれてたんだ。

人間誰しも自分のやりたいことを一生懸命やってる時の顔は自然と魅力的に見える。

秀吉にあつて、今の吉井君にもあつて、アタシにはないもの。

多分、アタシは無様でもなんでもひたすら努力する人間が好きなんだ。

そして、吉井君も、

以前、プロモーションビデオの撮影の時、秀吉が成り切ったアタシを見て、吉井君はすごく綺麗だと言ってくれた。

自惚れかもしれないけど、あれは容姿だけのことを言ったんじゃない



「のあっ!?!」

バキっ!!という音が吉井君の足元からして、そのまま木の枝は真っ二つに折れた。

「吉井君っ!?!」

「バカなお兄ちゃんっ!?!」

「うわあああああああああああっ!?!」

驚きすぎて心臓が止まりそうになる。

助けてあげたいのにつ。どうしてこういついときに限って体が言うことを聞いてくれないのっ!?!

このままじゃ吉井君が怪我しちゃっ!?!?

時間が止まったように感じるほどゆっくりとした動きで吉井君は地面に落下していく。

駄目っ 間に合わないっ!?!

「吉井君      っ!?!」

そのまま、アタシの悲鳴も無視して、吉井君は頭から地面に叩き付けられた。



## 第4話（後書き）

多分次で最後です

## 第5話

葉月ちゃんがなくなった如月グランドパークのマスケットであるノイチちゃんの風船を持って、僕はゆっくりと大地に降りていく。

ぜんぶ順調…、と思った瞬間。突然足場が崩れ重力に従った僕の体が斜めを向いてバランスを崩す、

一瞬で頭が真っ白になる。

落ちる…。そう感じるのに3秒くらいかかった。

下で葉月ちゃんと木下さんが叫ぶような声で僕を呼ぶのが耳に届く。それで、僕はなんとか平常心を取り戻した。

…大丈夫だよ二人共。僕はこれくらい慣れていくからね。

常日頃から雄二と無茶やって美波に関節を外されて姫路さんと姉さんの手料理をお見舞いされた僕の体はそう易々とは傷つかないんだ。これぐらいなんてことないはず。ほら、もうすぐ地面だ。

でも大丈夫、僕は頑丈だけが取り得なんだ。

今更木の一本や2本…。

ゴツンっ!?

「ぐおおおっ!?! やっぱり痛いよー！ー！ーっ!?!」

やっぱり訂正。痛いものは痛い。

我慢なんかできるかっ。

「吉井君っ」

血相を変えて僕に駆け寄る木下さん。

彼女が慌ててる姿なんて滅多にないんじゃないかならうか。

「バカなお兄ちゃんっ 大丈夫ですっ!?!」

「あ痛たた…、なんとか、あちこちがヒリヒリする…」

「もう…、心配させないでよね」

「あはは、ごめんね。木下さん。葉月ちゃん」

心配掛けさせちゃったみたい。

僕の知る限り葉月ちゃんと木下さんは（少し怪しいけど）一応常識人に入る部類だ。

Fクラスの感覚で無茶したら心配されるのも当然だった。

これからは少し気をつけよう。

「はい。葉月ちゃん」

僕は割れないように必死に守ったノイちゃんの風船を葉月ちゃんに手渡す。

「ありがとうございます。バカなお兄ちゃんはやっぱりすごいですっ!!

葉月の自慢のお婿さんですっ」

「お、お婿さんっ!?!」

「わわわわっ、葉月ちゃんっ」

慌てて葉月ちゃんの口を手で塞ぐ。

が、時すでに遅し。

「吉井君？ 一体どういうことなのかしら?」

殺のオーラを纏った木下さんがそこにいた。

うわっ 木下さん怒ってる…。口は笑ってるけど目が笑ってないよ。

なんだか美波と姫路さんを足して2で割ったような怒り方だ。思っただけど、笑いながら殺意向けるのってすごい高等テクな気がするのは僕だけ？

「なな、なんでもないよっ それより葉月ちゃん！！ 早く帰らないと美波が心配するよっ」

慌てて話題を変更する僕。

このままでは僕までロリコンの汚名を着せられてしまうっ。

「そうでした。葉月もそろそろ帰らなきゃ」

「うんうん。送っていいこうか？」

「大丈夫っ！！ まだ完全に日は落ちてないから1人で帰れるですっ！！」

それから、葉月ちゃんは僕たちの返事を待たず「またね。バカなお兄ちゃんっ 優子お姉ちゃんっ」と言っつて脱兎のごとく勢いでいなくなつた。

確かに、あれなら大丈夫そうだ。

そろそろ僕達も帰ろう。姉さんも家で待ってるし。

そして木下さんの方を向いた時、

っんっ

「んっ？」

頬と手の甲にピリっと、一瞬痛みを感じた。

「痛っ、なんだ？」

「吉井君。血が出てるじゃない。さっきので切ったんじゃない？」

「あ、本当だ。落ちた時に切ったのかも。風船を守るのに夢中で全然気が付かなかったよ」

ポタポタ、と皮膚を伝って血が下に落ちていく。

：人間の神経って不思議で、認識していなければ怪我しても一定時間は脳が痛みをシャットアウトしてくれるらしい。

足切られても気付かない時もあるって話だから、人間の体って便利だよな。

「…ちよつと待ってなさい。今拭いてあげるから」

そう言つて、木下さんは公園にある蛇口でハンカチを濡らしに行った。

「はい、顎上げて」

「い、いいよっ!？ こんなの別に大した怪我じゃないしっ!!

それに血なんか拭いたら木下さんのハンカチが汚れちゃよっ!？」

「そんなことアンタが気にしなくていいの。バイ菌入ったら大変だし、ほら」

急接近してくる木下さんに思わず緊張して言葉がドモル。

そして有無を言わせない勢いで、僕の手と頬を撫でるような丁寧さ拭いていく。

「……………」

やばい、顔が近い。

こうして見ると、やっぱり木下さんってすごい綺麗だ。

秀吉と似てる…。っていうのはやっぱり失礼だよな。

すごく澄んだ瞳で柔らかそうな唇。僕、今心臓すごいバクバクして

るっ!？

「き…木下…さん？」

「…はい。これでいいわ。このハンカチ持ってなさい。また血が出たら大変だから」

「そ、そこまでしなくとも」

…ついそのままハンカチを受け取ってしまった。

ちよつと血がついててあれだけど、なんかいい匂いがする。

どうしようっ!! 僕いけない性癖に目覚めてしまいそうだよ!!

「…匂いなんか嗅ぐんじゃないわよ？」

「はいっ!! 天上天下に誓って匂いなんて嗅ぎません!!」

「そこまで力強く否定しなくても…、まったく」

そう言った木下さんはまたツンとしたいいつもの表情に戻る。

「それにしてちよつと以外だったよ」

「…? 何が？」

「いや、木下さんまじめだから、僕絶対怒られるだろうなって思ったんだ」

「怒ったじゃない。アタシは怪我人に追い打ち掛けるような趣味はないわよ」

「そ、そうなんだ」

木下さん的には心配=怒るらしい。

なんか美波とも姫路さんとも違う反応で調子が狂っちゃうな。

「それに、吉井君はそれでいいんじゃないかって思ったし」

「へ?」

「その…、いつもバカやってるけど、それでこそ吉井君って感じだし、そうでないと吉井君らしくないじゃない。だからってやること全部許すどうかは別問題だけどね」

アタシには絶対真似できないし、と言って木下さんは頬を少し赤く染めながら小さく微笑んだ。

「そ、そうなん…だ。ありがとう」

鼻血が出そうになるのを必死に堪える。

まずい。顔に血が上りすぎてどうにかなっちゃいそうだ。

どうして今日に限って木下さんがこんなに可愛く見えてしまうんだろう。

いけない気持ちがあつくと湧き上がってくる。

話題だ。こんな時は話題を変えようっ！！

「や、やっぱり木下さんてすごいよねっ!?!」

「はあ?…いきなりどうしたの?」

「えっと…、そうだった。こういう細かい気配りとか上手だし、勉強できるし、運動神経もいいし、まさに優等生!!!って感じがするよ  
!?!」

「……………」

あ、あれ? なんか静かになっちゃったよ。

僕、何か墓穴掘った?

木下さんは、そんな僕を面倒くさそうな顔をしながら振り向いた。

「本当にそうなら良かったのに、今は変な誤解でアタシの評価もボ  
「ボ」よ…」

「……あ」

木下優子はシヨタでノーパンで同姓愛者。  
この頃よく噂されていたことだ。

「元の噂だけなら勝手に無くなってしまっただけでしょうけど、人の噂も75日って言うし、でも」

「……でも？」

「どうしてそれに加えてアタシが女装した男子好みの変態になっただけのよっ！……」

「ああ……」

……そんなこと、あつたね。ついさっきに。

「これだけは放置できないわ。めぐりめぐって今度はどんな風に曲解されるかわかったもんじゃない。ああ、どうしてこうなっちゃうんだろう……」

その場で頭を抱えながら落ち込む木下さん。

うーん、なんとかしてやれないものか。

ことが噂なんだから、何かもつとすごいことでも起これば木下さんの噂も飛んでっちゃうよね。

何か、もつとインパクトのある……、

あっ……！！

「木下さん。その噂。僕に任せてくれないかな？」

「えっ？」

素っ頓狂な声を上げる木下さん。

「吉井君が、…今度は何の悪巧みするつもり？」  
「や、やだなー木下さん。まるで僕がいつも問題起こしてるみたい  
な言い方で…」  
「まるで、じゃなくてその通りだと思うけど？ 学園祭とか覗きと  
か肝試しとか」  
「はっはっは、…ごめんなさい…」

後、最初と最後のは僕じゃなくてあの学園長ババアの所為だと思う  
よ？

「で、次は何するつもり？ アタシが言うのも変だけど、人の噂を  
消すなんて簡単にはできないわよ？」

「それは、…多分大丈夫。僕に考えがあるから」

「……ふーん……」

値踏みするような目で僕を見る木下さん。

「いいわ。やってみても」

「ほんとうー!!」

「ただしっ!! もっと悪い噂が流れたりしたら、…生かさないわ  
よ？」

「イ、イエッサー!! 勿論ですサー!!」

益々失敗できない!! 僕の命が天秤に掛けられてるんだから!!  
時々木下さんは優等生の仮面を剥がすけど、それは僕を信頼してく  
れてるのかな？

…いや、自惚れるな吉井明久。美波とキスした時を思い出すんだ…。  
あの後僕がFFF団や清水さんにどれだけのせめ闘ぐを味合わされたか

…。

こんなところで『ねえ、少しの間。目を瞑って?』なんてドキドキイベントなんか期待しちゃ駄目だっ。

「ねえ、吉井君…」

「な、何かな?」

「少しの間。目を瞑って?」

僕の全心が泣いた。

「ど、どうしてっ!?!?」

「いいから、ほら、早く…。早くしないと」

何を早くしないといけないんだろうっ!?!?

うおおおっ、彼女は僕の心臓を爆破するつもりなのかつ!?!

さっきからバクバクと五月蠅くてしかたないよっ!?! 正常な思考が保てないっ。

顔なんかもうお茶の間にお見せできないほど赤くなってるよっ!?!

テンパる僕を余所にどんどん近づいてくる木下さん。

見れば、彼女の顔も真っ赤だ。

どうしよう…。僕、自惚れなくていいのかな?

お互いの距離が数センチにまで近づいた時、僕は反射的に目を瞑った。

覚悟を決めた。

…秀吉。明日から、僕のこと、お兄さんって呼んでいいからね…。

……………、

……、

……、

(…あれ?)

…何も起きない?

心臓の鼓動ばかりが五月蠅くて外界の音が聞こえなくなっているのか…?

トンっ!

「痛っ…えっ?」

急に頭に軽い衝撃を感じた。

緊張しながらも目をゆっくりと上げると、

何故か木下さんは僕の頭を手刀で小突くように叩いていた。

「まったく、何茹蛸みたいに赤くなってるのよ。…キスするだけでも思っただの?」

「え…、あははー、そ…そんな、わけないじゃないか? 僕にだってそれぐらいの判断はつくよー…」

ごめんなさい。正直、全力で期待しました。

トホホ、現実なんてこんなもんだよね…。

やっぱり僕はバカなのか…。

「じゃあ、アタシも帰るわ。そのハンカチは明日返してくれればいい

いから、明日。しくじったら承知しないからね  
「うん…、またね…」

風のように去っていく木下さん。

去り際に何か言ったような気がするけど、よく聞こえなかった…。  
なんだろう。僕、今ちよつとがっかりしてるかも…。  
はあ、まあいいや。いつものことだし、それより姉さんに連絡を…、

「…ん？」

なんだ？制服のポケットに上手く手が入らない…。  
何か入れてたっけな…？

さっ (木下秀吉<sup>優子</sup>の超ローアングル&へそちら写真)

「何いいいいいつ!?!?!?!?!?」

驚きすぎてもはや悲鳴のような声をあげて叫ぶ僕。  
いつのまにっ!! いや、なんで僕のポケットに入ってるの!!  
お昼の時はちゃんと全部調べたはずなのに!!

「まさか、木下さんが…?」

今はそれ以外考えられない。  
どうして、いつ?

「ひょっとして…、さっきのあれか…」

目を瞑ってって、こついうことだったのか…。

でも、あの時顔真っ赤にしてたし、絶対自分が写ってるって気付いてるよね？

…なのに、どうして返してくれたんだろっ…。

「……………これは、益々失敗できないね」

木下さんの本意はさっぱりだけど、僕のやる気はつなぎ上りだった。  
…明日の作戦。絶対成功させてやる…！

「うあああっ!?!? アタシなにしてるのよおー…っ!?!?!?」  
「?」

叫ばずにいられない。

だって、あんなの、吉井君じゃないけど、本当にキスするみたいで…、

いやいやっ、ただ写真を返しただけなんだからっ!?!

他意はないのよっ!?! 絶対っ!?! 必ずっ! きっっっ

……………多分。

「今日は、ほんとにおかしい日だわ…。アタシがこんなに取り乱すなんて…」

まだ顔は赤いままだ。

このまま家に帰ったら絶対変な誤解される。  
それは駄目。木下優子のプライドが許さないっ!!

「どこか寄り道してから帰ろう…」

なんだか、優等生のプライドを守るために、優等生の自分を壊して  
るような自己矛盾を感じるわ…。

…吉井君、顔赤くしてたわね…。

目も瞑ってきたし、

普段から姫路さんや島田さんに囲まれてるから、どうなることかと  
思ったけど…、

まだ、アタシでも脈ありなのかな？

…明日、どうなるかアタシは全然わからない。

そもそも吉井君がなにをするのかも教えてくれなかった。  
でも、せっかくだし、

「お昼ご飯ぐらい、一緒に食べてもいいよね？」

アタシは、その足でさっそく近場のスーパーへ向かった。

料理なんて滅多にしないから不安だけど、絶対ウンと言わせてやる。

覚悟しなさいよ。吉井君!!

秀吉の死刑執行まで、あと1時間30分。



## 第5話（後書き）

これで終わりだと思ったけどそんなことはなかったぜ！！  
でも連続投稿するから許して欲しいんだぜ！！

## 最終話

翌日。

「なるほどなあ」

早速僕はクラスメイトの雄二とムツツリー二に相談を持ちかけた。秀吉は休みだったけど、風邪でも引いたのかな？あとでお姉さんに聞いてみよう。

「うん。木下さんの悪い噂を消すにはもってこいなんだと思うんだけど、どうかな雄二？」

「確かに、噂はより大きい噂に上書きされたりはするが、それぐらいになると相当なインパクトが必要だな」

「……………威力絶大」

「ああ。学校中が叫ぶぐらいのヤツならなんとかなるだろう」

僕が考えたのは、噂の上書き。

木下さんのシヨタコンノーパン同性愛主義で女装男子好みの悪評を消すには、それをまとめて流してしまおうような。

津波のごとく強力な物が必要だ。

…お姉さんの趣味がチンケな物に感じるぐらいのやつが。

「それにしても、朝から急に『木下さんを助けるのに力を貸して』なんて言われてびっくりしたぞ。どういう心変わりなんだ明久？秀吉はもういいのか？」

肩に手を回しながら尋ねる雄二。失礼な。そんなつもりはないよ。

「よくない。秀吉は大切な人だよ。でも、それとこれとは話が違う」  
「……………正直意外。明久が昨日とは別人みたいになった」  
「昨日は秀吉の写真1枚で大慌てだったからな。それが一体どうして姉の木下優子とつながるのやら…」  
「ま、まあ、いろいろね」

美波と姫路さんがいなくて良かったと思うのはどうしてだろう？

「で、引き受けてくれるの？」  
「そうだな。…普段の俺なら明久の幸せなんて寧ろ壊してから腹抱えて笑ってやりたいが…」  
「放してムツツリーニ！！ この大バカ野郎に天罰を下すんだ！！」

人の幸せを壊したがるなんて…なんて最低なやつなんだっ！！  
今度携帯をパクって霧島さんに『ちゃんとしたプロポーズがしたい』  
って用件のメールを送ってやる！！

「いいだろう。手伝ってやるよ明久。久々に面白いことになりそう  
だ」

「……………付き合っ」  
「本当っ！！ ありがとう2人とも、やっぱり持つべきものは友達  
だよねっ！！」

「…お前が言うつと妙に胡散臭くなるのはなんでだろうな…？」  
そんなことはない。

「……………まずは放送室を奪取する」  
「ああ。すべてはそこからだ。行くぞ。明久。ムツツリーニ」  
「おうー！！」

「な、なんですか君達はっ!?!」

「悪いいな。ちよつと使わせてもらっぜ。ムツツリーニ!」

「……………動けないように拘束する」

「な、なあああっ!?!」

放送室に強襲を掛け、中にいた放送部員をムツツリーニが抑える。  
その間に僕は放送機材のチェックをっ!!

「どう、いけそう雄二?」

「そうだな。やりすぎると町内にまで響ちまうから、ある程度調整してから、よし。オツケーだ」

「おっしゃー。じゃあさっそく」

「待て明久。お前、一体何を言っつもりなんだ?」

マイクを調整しながら雄二が聞いてくる。

そっいえば、雄二たちには何も言ってなかった。

僕はその場で雄二とムツツリーニに耳打ちした。

「……………ぶっ」

「……………(ふるふる)」

「…明久。てめえ。勇者だな」

ふっ、それほどでも。

「行くよ。雄二」

「あくまで機材の故障を装うんだ。俺達はただ世間話をしてるだけ、ただ『偶然』それが外に漏れるだけだからな」

「……………抜かりは無い」

「僕もオツケーだよ」

「よしっ。じゃあ。お前ら歯を喰いしばれ!!」

ズ、ズズ、ズズズ…

ザーツ

ポ、ポポポ…

『…んだ……………けどね……………じ』

『わか……………か。明…』

『……………感無量……………』

良し良し。いい感じだ。

『それにしても驚いたよねー』

『ああ。あれには俺も思わず度肝を抜かれたぜ』

『……………なんという、嫌な偶然…っ!!』

『まさか、学園長が実は男で髪の毛はカツラでしかも、あの西村先生と付き合ってるなんてさー!!!!』

その時、学校中が悲鳴を上げた。

調子はいいぞ!!

でも、まだ終わらないよ。

『……………俺は見てしまった。西村先生と学園長が階段の踊り場でキスしてた所。あまりの威力に気を失うところだった』

『うひょー!? それすげえっ!』

やばい。それはきついよムツツリーニっ!?!?!?  
慌てて口元を押さえる。

僕も雄二も笑いを堪えるのに必死だ!!  
こんなところで脱落するわけにはいかない!!

『もしかして西村先生ってあんなガタイしてっけど、実は女だったりするんじゃないの?』

うおおおっ、やめる雄二!?!?!?

これ以上は僕が笑い死にしようっ!!

室内からでもけたたましいレベルで廊下の驚きや絶叫が聞こえてくる。

やっぱり効果抜群だっ!!

『いやいや、そもそもさあ、西村先生って家では女口調で喋ってるって噂だよ。』きゃー。あなたただいまー!!』てさあー!!』

(明久てめーっ!?!?!?)

(……………なんという、精神攻撃…っ!?)

(へっ、こんなもんじゃないよ。僕の力は!!)

『もっとすごいやつがあるよ…。それは…』



今ババアは必死にさっきの放送の内容を撤回しようと奔走している。だが無駄だ。

こういうのは本人が否定すればするほど信憑性が増すんだから。ババアがやってるのは、自分の目に針を突き刺してやるようなもんさ。雄二も同じ気分なのか補習を受けたのに機嫌が良いみたいだった。

「……………いい気持ちだった」

「アンタ達、一体何やってんのよ」

呆れ顔の美波が尋ねてくる。

後ろには姫路さんもいた。

「突然すごい放送が流れてきてびっくりしました。2年生みんなもびっくりして叫んでましたよ」

「うん。そうするようにしたんだからね」

「今更アキにこんなこと言ってもしょうがないけど、ちょっとは自重しなさいよ？」

「ははは、島田。姫路。今日は明久はなあ、なんとあのきの」

「わー！？わー！？なに言ってるの雄二！！こんなのもイタズラじゃないかあ！！」

「なーに言ってるんだコイツ！！ぶっ飛ばすぞ！！」

「……………！！！！（ガンのくれ合い）」

「……………そろそろお昼を食べないと、昼休みが終わってしまう」

「そうですね。美波ちゃん。準備しましょう」

「あつ…僕はちよつとご飯買ってくるよ。今日お弁当ないからさ」

「そうなんだ。早く帰って来なさいよ」

うん。と美波に返事を返しながら僕は廊下に出るためFクラスの扉を開ける。

…と、思ったら。僕が手を掛ける前に、勝手に扉の方から開いた。

「ほんと、なんかやるなーとは思ったけど、ここまでの騒ぎを起すのは想定外だったわ。吉井君」

「木下さんっ!？」

扉を挟んだ向こう側に、手に巾着を持った木下さんが立っていた。どうしてFクラスに来たんだろう。ハンカチ返してもらっためかな？

「どうしたの？ 何か用事？」

「…用事っていうか。その…、吉井君。もうお昼食べた？」

「お昼？ まだだよ。これからパンでも買ってこようかって思ってた所だから」

「…よかった」

はて、何がよかったんだろう？

その後、妙にモジモジだし、あっちこっちに目を向けた後、急に巾着を持った手を僕に向けてきた。

な、なんだろう。ひよつとして昨日言ってたことを実行する気!？

その中に入ってるのは爆弾なの!？

嫌だっ!! 僕はまだ死にたくない!？

ちゃんと噂は消したはずなのに、まさかまだ駄目だったのっ？

「お昼。吉井君の分も作ってきたから、よかったら、…あの、えっと、アタシと一緒にご飯食べないっ？」

「……………へ？」

えっ!?

……………今、僕は何て言われたの?

お弁当? 作ってきた? 僕に? 一緒に食べない?

「ほ、ほんとっ!?!」

嘘嘘っ!?! 本当なの!?! いや…、まだ判断するには早計だぞ。確認ためにもう一度聞きなおす。

すると、木下さんは今度は頬を少し赤くしてから、ゆっくりと頷いた。

うおおおおおおおっ!?!……………!!

嘘!?! マジで!?! これ現実だよね!?! うっひゃー……………  
ーっ!?!?!!?!!?!!?!!?

「勿論っ!?! 頂きます!?!」

「本当っ!?! 良かった…!」

今、僕は泣いている。やったね僕。  
人生の勝ち組街道まっしぐらだ!!

「これより、吉井明久に異端審問会を開く!?! とりあえず。今すぐ死刑!?!」

「「「おおおおおおおおっ!?!……………」」

「アキー? 一体どういうことなのかしらー?」

「明久君? 冗談も大概にしないと、命が持たないですよ?」

「吉井を殺せー!?!っ!?!? 血一滴残さず存在を消去するんだあ

「！！！！」

やばいつ！！ モテない奴らが襲ってきたっ！！

「きゃあっ！？ この人達前にいた！！」

「木下さんこつち、とりあえず屋上へ行こう！！」

「ちょ、吉井君！？」

木下さんの手を引いて一目散にFクラスを後にする。

美波と姫路さんには後でいろいろ事情を…説明して駄目だろうなあ

…。

ええい！！ そんなの今は考えなくていい！！

今は一刻も早く、木下さんとゆっくりご飯を食べられる場所を探す

んだ！！

この日以来、僕と木下さんの距離はグッと縮まった気がした。

## 最終話（後書き）

これで1章は終わりです

完結にはしませんが、続きを書くかは正直まだ未定です。

するとしても、シナリオをある程度考えた後で投稿するので今みたいなペースでは更新できません

## 第1話

授業が終わり放課後の一時。

そのまま帰るのは味気なく思った僕は、いつものFクラスのメンバーと一緒に得に何をするのもなく、だらーんと教室でのんびりしていた。

「なんかお腹すいたなー…」

お腹を摩りながら呟く。

最後の授業が体育だったから余計そう感じるのかもしれない。

「そついや俺も少し小腹が空いたな。せつかくだし、どっか食べに行くか明久？」

僕の悪友である坂本雄二が話に乗ってきた。

「うーん…。外食も魅力的なんだけど、今はちょっとサイフが寂しいんだよね。」

具体的な理由は伏せるけど、

「ワシも相伴させてもらっていいかのう？今日は部活もないから一日暇なのじゃ」

「……………（コクン）」

Fクラス屈指の美少女で僕の友達の木下秀吉と土屋康太ことムツリーニが会話に入ってきた。

「僕今お金ないから、外食はちょっとね…。ほかに何かないかな？できればお金がかからないヤツで」

「ただのご飯なんてあるわけ無いでしょう」

「ふふふ、でもこんな時間に間食なんてしたら太っちゃいますよ？」

さつきまでずっと勉強していた美波と姫路さんもきた。

男はあんまり太るとか気にしてないからそれは無用な心配だよ姫路さん。

そもそもつい最近まで砂糖と油で生きていた僕に太る要素はみつからない。

やっぱり家に帰ってから自分で作ろうかな…、ああ、でも姉さんが冷蔵庫の中身全部使ってるかもしれないし、

一回家に帰ってからもう一回出るのもちよっと億劫だ。

「んじゃどうすんだ？ やっぱりやめるか？」

「うーん…、何かお腹に入りたいんだよね」

「こんな時、Aクラスだったら困らないからいいですよね。お菓子も飲み物を全部完備されてますし」

「…それだつ！！！！」

「えっ！？ なんですかっ！？」

飛び上がる勢いで僕と雄二とムツツリー二の言葉が重なる。

ここ、文月学園は学力至上主義の進学校だ。

クラスもAからFまでランク分けされ当然順位が上がればそれだけ教室の設備もいい。

逆に言うと僕らFクラスの教室は、机は卓袱台、床は腐った畳。綿が全然入ってない座布団など、およそ勉強できるような環境じゃないぐらいひどい。

その分、Aクラスは個人用冷蔵庫、エアコン、リクライニングシート、システムデスクなど支給され部屋の調度もどこぞの高級ホテル並とまさに特権階級の待遇を得ている。

転校初日に僕がAクラスを見たときはさも当然のように紅茶を飲んだりお菓子を食べる人がいた。

さすが姫路さん!! やっぱり僕らとは頭の出来が違うよ。

「僕達が今からAクラスに行ってお菓子とかジュースを分けてもらえばいいんだよ!!」

「別クラスに入るなんて決まりはないからな。俺達は何度かAクラスに足を運んだ事もある」

「……………お茶菓子強だ…………、頂いてくる」

ムツツリーニ。その言い直しはどうかと思うよ？

「おおつ 妙案じゃな」

「そんなにうまく行くからしら？ 第一手で持って帰るの？」

「……………(さっ)」

「さすがムツツリーニっ 泥棒と言えば渦巻き模様の風呂敷だよねっ」

「すでに泥棒と自覚してるんじゃない」

「大丈夫でしょうか？ Aクラスの人がそんな簡単に支給品を分けしてくれるとは思えませんけど…………」

「万が一の時は明久が久保に頼めばいい。それで万時解決だ」

「えっ？ どうして僕が久保君にお願いすればお菓子くれることになるの？」

「……………」

どうしてみんな僕から目を逸らすんだろっ…………。

「とにかく決まったのなら行くぞ。時間は待ってくれねえんだ。時間かけてると教室が閉っちゃう」

雄二の言葉で僕、秀吉、ムッツリーニが立ち上がる。  
やっぱりこういうのは男の仕事だよ。秀吉は例外だけど。

目指すはお菓子！！ ジュース！！ 今夜はFクラスでお菓子パ  
ティだ！！

Fクラスの扉をガラツと開き、僕たち4人は悠然とした面持ちでA  
クラスへ向かった。

「許可できません」

「どうしてっ!？」

いきなり却下されたよ!？

「Aクラスの設備はこれまで苦勞して勉強に励んだ特待生への学校  
からの支援です。間違っても自墮落な生徒への給付物ではありません  
ん」

メガネを吊り上げて語る学年主任の高橋先生。

まさかまだ教室にいたとはっ

予想外の伏兵に雄二が苦い顔をしている。

こんなにいっぱいあるんだからちよつとぐらい恵んでくれてもいい  
じゃないかっ

「Aクラスの生真面目な連中はほとんど手を付けてないだろ。なら

俺達にほんの少し贈与してくれても文句はないんじゃないか…?」

「何か勘違いをしているようですが、この菓子類で残った物はすべて支援募金や環境保護として国に寄付しています。この教室に無駄な設備は一切ありません」

「ちよつとぐらいおすそ分けしてはくれんのかのう…?」

「そうだよ。これだけあればちよつとくれても罰は当たらないと思いますよっ?」

「そう言つて今貴方達の狼藉を許してしまえば、ほかのクラスに面目が貯めてなくなります。最悪全クラスがAクラスに入り浸る自体にはなりえますから到底容認できません、それに、貴方達はこの一回で済ますとも思えませんし」

それは否定できない…。

僕たちがAクラスからお菓子を強奪し、それがほかのクラスメイトに知れたら、大挙してAクラスに攻め込むだろうなあ。

「それではほかのクラスに不平等になってしまいます」

「この学校つて平等つて言葉から一番縁遠い場所だと思っんですけどっ…!」

平等を遵守するなら今すぐ教室設備を統一すべきだ!!

「どつしても駄目か?」

「駄目です。この品が欲しければ次の振り分け試験でAクラスになればよいではないですか。まあ、なればの話ですが」

「……………うっ それはきつい…」

ムツツリーニは保健体育はAクラストップレベルだけどほか壊滅的だ。

いくらなんでも僕たち全員がAクラス入りなんて無理がある。

そもそもそんな時間はない。僕達は今食べたいんだからっ！！

「分かったなら早く自分のクラスへ戻りなさい。貴方達がいると周りの生徒の邪魔になってしまいます」

きっぱりと告げ高橋先生は僕達に背を向けて去っていく。

何もあんな言い方しなくていいんじゃないかなっ！！

「……………どうする？ 今なら盗むこともできる」

「今はやめたほうがいい。先生の目も光ってるし、万が一バレたら最悪停学だ」

「停学はまずいのう。ワシらは一度覗き騒ぎで停学になっておる。これ以上学校側に目をつけられると、退学という自体に発展しかねぬぞ」

「退学はやばいよぉ！！ はぁ…。諦めるしかないのか…。目の前に欲しいものがあるのに手が届かないなんて…」

「……………まさにタンタロス」

うだうだしててもしょうがない。これ以上ここにいたらまた何か言われそうだし。

一度Fクラスへ戻って対策を考えよう。

僕たちは踵を返しAクラスの扉を開けた。

そして、4人で廊下に出ると、すぐにそこに見慣れた人達がやってきた。

「あれー？ 君達何やってるのカナ？」

「……………工藤愛子…っ!？」

「工藤さんっ」

「やっほー。ムッツリー二君。みんなも。Aクラスに何か御用？」

手に数枚のプリントを持った工藤さんが気さくに声をかけてきた。後ろに霧島さん。木下さんもいる。みんな工藤さんと同じ問題集を持っていた。

「ああ、少し野暮用でな」

「ちょっとAクラスのお菓子を拝借しようと思って突貫したんだけど高橋先生に返り討ちに」

「バカっ!!! しょうじきに話すんじゃねえ!!!」

しまった!!! 霧島さん達だってAクラスじゃないか。

「……お菓子？」

「明久が腹が減ったと言って外食に行こうかと思ったのじゃが生憎持ち合わせがなくてのう、それでAクラスの菓子類を少し分けてもらおう思ったのじゃ」

「何やってのよまったく」

「……吉井。お金がないなら少し借りる？」

「ありがとう霧島さん。でも遠慮しておくよ。なるべく学生でいる間に借金は抱えたくないからね……」

貧乏ならまだいいけど借金まで行くと僕の社会的ステータスが著しく崩壊する……。

僕は生きてる間はなるべくお金の貸し借りはしないようにしたいよね。

ぐ……。

「お腹空いたなー……」

お腹を摩りながら小さく溜息を吐く。  
ついに体まで空腹を訴え始めたよ。

「何なら、ボク達がもらってきてあげようか？」  
「本当かつ？」

工藤さんの奇策に僕達は一気に元気を取り戻す。  
なんと、すばらしい思いつきじゃないか!!  
僕達が行って門前払いされるなら、同じAクラスのみんなに手伝ってもらえばいいんだ。

それなら衝突はさけられるし何も問題はないよね!!

「いいの工藤さんっ？　じゃあさっそく」

「駄目よ」

「…え？」

急に木下さんが僕の言葉に割り込んできた。

「Aクラスの設備は学校側がアタシたちを思って用意してくれたものよ。それを横領みたいな真似して良いわけではないでしょ。そんなことしたらアタシ達は先生の信頼を裏切ることになるわ。お腹が空いたのなら別の方法にしてよ」

「えー、どうしても、駄目？」

「駄目なものは駄目。何度も言わせないで、アタシたちは忙しいんだから、今Fクラスに構ってる暇なんてないわ」

一刀両断された…。

木下さん。最近はお弁当作ってくれたりしてちよつと交流が深まったけど、本質的に彼女は『優等生』なんだよね。

言ってることが間違いないだけに僕達は反論の言葉が出てこな

い。

そのまま彼女は返事をまたずAクラスへ行ってしまった。

重たい空気が新校舎の廊下を覆っておく。

「そういうことみたいだから、やっぱりさっきのなしで。ごめんねみんな」

「いや、元はと言えば俺達が我侭言ったんだ。こっちこそ、悪事の片棒を担がせようとしてスマンかった」

「……じゃあ、私達は勉強するから」

「またの」

工藤さんと霧島さんも後に続いていった。

「……一度Fクラスへ戻ろう。作戦および方法を考え直すべき」

「ムツツリーニの言うとおりじゃな。何もタダで食べるのはここだけではなからうて、…改めてみると何故ワシらはここまでタダ飯に固執するのじゃろうか…?」

「ここまで来たらもう意地だ。Fクラスは諦めの悪さでは校内一だからな」

「そうだね。でもとりあえず今はFクラスに引き返そう」

学食は開いてないにしても何か手段はあるはずだ。

僕達はまだ見ぬ希望を胸に、自陣のFクラスへ舞い戻った。

「結局駄目だったと、アキってばホントいつも考え無しで動くんだから……」

「今回は、何も言い返せない……」

卓袱台の1つにみんなが腰を下ろす。

さっきから僕のお腹は空腹のサインをばんばん鳴らしている。

…もう水道水でもいいから何かお腹に入れてしまいたい。

卓袱台に突っ伏した僕を見て、須川君が声をかけてきた。

「何だ吉井。お腹空いたのか？」

「うん…、でもお金がないんだよ…。これからどうしようかになってみんなで思案中」

「ふむ……」

「何かあるのか？」

須川君が顎に手を当てた思案顔をする。

「実は今朝、俺の家のポストにこんなものが届いたんだ」

鞆からA3サイズの紙を出して僕達に見せてくれた。

何これ？デザート店のポスター？

「へえ、デザートかあ。なんか美味しそうねえ」

「確かに、美味しそうな飾りつけですね」

「それで、これがどうかしたのか？」

「うむ。ここを見てくれ」

そう言って指でポスターの左端を指す。

そこには、

『超特盛ジャンボパフェDX!! 50分以内に食べれたら無料!』

と書いてあった。へえ…

……、

って何iiiiiiiiiiii!!!

僕はポスターの一部分を射殺すぐらい穴が開く勢いで凝視する  
広告文の下には見るだけお腹一杯になりそうなパフェの絵が載って  
いる。

これを食べるのか!?

「これ本当須川君!？」

「ああ。だがここも見てくれ」

「えー何々…、『ただしカップル、ないし男女限定になります。ま  
た、制限時間以内に食べること出来なかった場合。2000円を  
請求することになりますのでご了承ください』と書いておるぞ。2  
000円はちよつときついのう…」

「「カップルですつて!？」」

「……………命がけでやればなんとかなる」

おお、周りにはやる気ムードが漂ってきた。

さっきまで消極的だった姫路さんと美波までやる気なんて、女の子  
はやっぱりデザートに弱いんだなあ。

ムツリーニは常日頃命すり減らして生きてるんだからこれぐらい  
なんてことないのかしれない。さすが僕の友達だ。

「俺はこれを見て今日一日いろいろな女性に掛け合ってみたが全員に拒否された…。…やっぱり男はみんなロンリーなんじゃあっ!?!?」  
「女の子とパフェを食べようとするなど言語同断!?! 奴はすでに我々FFF団の会長ではない!?! ただのフラレマンだ!?!」

「…「須川を殺せーっ!?!」」

「ま、待てみんな。俺はまだ女子にOKされてはいない!?!」

「女子と仲良くパフェを食べようとした未遂。有罪!?!よって死刑」

「うああっ!?!? 須川君がFFF団につ!?!? いろいろご愁傷様っ

!?!」

畳を剥がした床で血まみれになって叩きつけられる須川君に同情せずにはいられない…。

この前、木下さんお手製お弁当を作ってもらった後に僕自身が味わったんだから尚更ね。文字通り他人事じゃないんだ。

けど、叩きつけ+美波からの関節技があった分、須川君はまだマシなほうなんだよ?

そして、そんな須川君を完全無視して話を進めていく雄二。

「でもこれはいい手かもしれないぞ?」

「本気か雄二よ?」

「マジもマジだ。これだけあれば十分すぎるぐらい腹だつて満たされる。まさに一石二鳥だ」

おおっ 雄二もなんだか活気が出てきた。いいねいいね。

これは俄然、受けないわけにはいかないよね。

まさに目の前に鳥が食べ物を啜えて持つてきてくれた感じだ。

「僕もオツケーだよ。超特盛ジャンボパフェDX。受けて立とうじやないか!?!」



## 第1話（後書き）

なんだかんだで早く投稿できてしまいました…

## 第2話

超巨大ジャンボパフェDX制限時間に完食すれば無料!!

ルール説明。

『原則として男女のペアで挑むこと、カップルが望ましいが是非は問わない』

『タイマーは店員が挑戦者の前に立ちストップウォッチで測る』

『途中退席は認めるが、それにそつた時間延長は認めない。また、不正な行為と見なされた場合、失格となる』

『挑戦者以外の者が手をつけても即失格とする。また、バランスが崩れパフェが倒れた場合も同様とする』

『スプーンは原則として、当店のものを使用すること』

「こんなところか…」

雄二が須川君（故）からもらったデザート店のポスターに書かれてあるルールをノートに書き写して考え込んでいた。

「雄二、何考えてるの？」

「この早食いのルールをまとめてたんだ。つまらないミスで失格なんて笑えないからな」

「へえ、まじめに考えてるんだね」

「こういうのは真正面から直接ぶつかっていくしか方法がないからな…。まあ、不安要素はそれだけじゃないんだが…、出るのはまず俺、明久。ムッツリー二だな」

雄二がノートに横書きで『男子：雄二・明久・ムッツリー二』と1行ずつ書き込む。

そこからそれぞれの名前の後に一本の横線を引いた。なるほど、この線の先が女子ってことだね。

「秀吉は出ないの？」

「ワシは遠慮する。あまりこういうものは得意ではないのでな。それに食べきれなくなった挙句支払いができんとなってはまずいじゃろ」

「そっか、一応そっちも考慮しなくちゃいけないよね」

食べ切れなくてさらにお金足りなくてその場で皿洗いのタダ働き。なんてマンガ展開は正直笑えない。

「……………2人1組だから1人1000円。…明久」

ムッツリー二が視線で僕に問いかける。

「今の手持ちは1013円…。払えないことは無いけど、もし食べきれなくなったらこの先の送りまで何もできない…。そんなことになったら絶対に姉さんに折檻されちゃうよ…」

「そうならない為に、今から腹を空かせとけ。……よし。とりあえずこんな感じか…」

超巨大ジャンボパフェDX早食い。  
メンバーリスト

男子

女子

雄二

明久

ムッツリーニ

予備・秀吉

男子枠はすでに埋まった。

ムツツリー二はあだ名のままでいいの？

これでお店の人に『女子　と男子ムツツリー二が参加します』なんて言ったらどこかのエロ外人と思われそうだね。

「後は女子だね…」

「ここにいる女子は姫路と島田だけなのじゃが、…後1人はどうするのじゃ？」

「……………まだ2人とは決まっていない」

「なんで？…あつ　そっか」

「あの2人はまだ参加するとは言っていないからな、俺達の判断で勝手に決め付けるのは駄目だ」

そっか。美波はともかく姫路さんにはちょっとハードだね。

でもそうなると圧倒的に女子が足りない。どうすればいいんだろう…？

「じゃあどうするの？」

「うーん…、翔子は今勉強してるしなあ」

「霧島なら、雄二が一声掛ければすぐにすっ飛んでくると思っぞ？」

「そんなこと死んでもやりたくねえ！！」

「……………Aクラスには後、木下優子。工藤愛子がいる」

「工藤さんはともかく、木下さんがこういうのに参加してくれるかなあ？」

「姉上はワシにもわからん。じゃが恐らく無理じゃろうな。さっきの態度ではFクラスに対する感心はまったくゼロじゃったし」

「木下姉は除外か…」

うーん、これはちょっと厳しいなあ…。

後は候補と言えば、Dクラスの清水さんだけど、あんまり食べるの得意そうには見えないよね…。

Cクラス代表の小山さんはまず無理だ。

Eクラス代表の中林さんは…、今学校にいるのかすら疑わしい。第一交流がほとんどないし、協力は絶望的だ。

誰かいないかな…？と思い4人でノートを見ながら考えていると、

「アキ、ちよつといい？」

「明久君。聞きたいことがあるんですが」

「ん。何？」

妙にソワソワした美波と姫路さんが歩み寄ってきた。一体なんだろう？

そうだ。せつかくだし聞いておこうか。

「2人とも早食いには参加するの？」

「えっ！？ そ、それは、アキ次第よ……」

「え、なんで僕？」

「その……（明久君が参加するなら……）」

「……？」

さつきから口元がもごもごして何を言ってるかうまく聞き取れない。

かろうじて2人ともやる気だけあるようだ。

「アキ、アキは一体誰と組むつもり……？」

「誰って……」

「明久君は私と美波ちゃんのどちらとパフェを突付きあうですか？」

美波と姫路さんがやけに詰め寄って聞いてくる。

何？どういうことなの？さつきは弱腰っぱかったのに、

2人の急な変わり身につい腰が引いてしまう。

「え？ ちょ、…どうしたの2人共そんな切羽詰まったみたいに…、まだ僕は決めてないけど」

「…そうですか…（溜息）」

「じゃあ今決めなさい。アキはウチと瑞希のどっちとパフエを食べるの？」

「え、えええーっ!？」

指をパキポキと鳴らさながら近づいてくる美波。それって明らかに聞く時にすることじゃないよね!？」

もう僕が殴られるの決定なのっ!？ ていつか2人共予想以上にやる気満々じゃないか!!

何故ここまで必死になるのか僕にはさっぱり理解できない。

そんなにこのパフエを食べたいのかな？

冷や汗を掻きながら窓際に向かって後退る僕にどんどん詰め寄ってくる美波と姫路さん。

絶体絶命という言葉はこういう時に使うものだろう。

「さあ、ウチと」

「私と」

「どっちとパフエを食べるの（んですか）っ!!」「」

「ちょっ…、ちょっと待ってよ!？ そんな急に言われても!？」

こういうのはまずほかの2人と相談しないと 「

助けを求めて2人のいる方に視線を送る。

「…雄二とパフエを食べるのは私」

「翔子っ!？ お前いつのまに!!」

「…雄二に呼ばれた気がしたから」

「テレパシーでもあんのかお前はっ!？ Aクラスで問題集やって

たんじゃねえのかよ!？」

「……あれはただの復習。対して時間は掛からない。愛子ももつすぐここに来る」

「それはいい知らせだが、待てっ!？ 勝手に俺の隣に名前を書き込むな!！」

「……邪魔はさせない(ビリビリ)」

「ぎゃあああっ!！ 全身が痺れる!——っ!？」

「……(がくがく)」

駄目だ!！ あの馬鹿はいつも使えない。

そして何故血の海に沈んでるんだムツツリーニ。君に一体何があったの!？

「……パンチラ写真…、ゲット(ボタンっ)」

「ムツツリーニ ツ!？」

大変だ!！ 早く助けに行かないと、写真を見せてもらつたために!！

「アーキー?」

「明久君…?」

「何処行こうしてるのかしら…?」

「まだ私達の話は終わっていませんよ…?」

僕に行く手を阻むように立ちはだかる美波と姫路さん。  
しまった。ここにも伏兵がっ!？

「い、嫌だな。僕はただムツツリーニを救助しに行くのに腕の関節の方が痛い!——っ!?!?!?!?!?!」

「毎度毎度誤魔化してっ!！ 早く言いなさい!——っ!！」

「明久君は私とパフェを食べてくれるんですよね!！」

「アキはウチと一緒にパフェを食べるのよね！！ はっきり言いなさい！！」

「待って待ってっ！？ そういっのはまずこの関節技を解いてから《ゴキ、ゴキン》今関節外されてまたハメられたぁ！！」

「何をやっておるのじゃまったく…」

各人がそれぞれ窮地に陥ってる中で唯一無事な秀吉が冷静に突っ込みを入れた。

「話を戻そう…」

制服がボロ雑巾みたいになった雄二を筆頭にみんなが卓袱台に集まる。

「なんだか早食いの前に再起不能になるような気がするの僕だけかな？」

「幸先が不安で仕方ない。」

「とりあえずメンバーだが、その前に俺の隣に勝手に書かれた翔子の名前を」

「……（さっ）」

「…そのままにしておこう」

スタンガンを雄二の前でちらつかせる霧島さん。

それはさながら犯人に脅迫され家族に身代金要求の電話をさせられ

る哀れな被害者のようだった。

「霧島が参加してくれるなら後の2人は姫路と島田のどちらかでないのではないかと。さっきの態度からすると2人とも参加の意志はあるのじやろう？」

「ウチは…、（アキと一緒にパフェを食べたいのに…）」

「私も、あの…、（明久君と仲良くパフェを食べあいっこしたいのに…）」

「…どうして2人共僕を睨むの…？」

「…まあ、ともかくこれでメンバーだけは大体決定だ。後は、そうだな…」

チーム分けか。と言った途端。

ガラッとFクラスの扉が開き誰かが入ってきた。

「ごめんねー。聞き分けの悪い子を説得してたら遅れちゃったー」

「ちよつと愛子っ。アタシは別に…」

にははー、といった感じで僕らのもとにやってくる工藤さん。

そして少し不機嫌な木下さん。

工藤さんとはかく木下さんまで来るとは意外だった。

説得に苦労って言うってけど、何の説得なんだろう？

「姉上まで来るとは意外じゃったのう」

僕の疑問を代わりに口にしてくれる秀吉。

「愛子に強引に連れてこられたのよ。仕方ないでしょ。それで、これは一体なんの集まりなの？」

「これからみんなで早食いパフェを食べに行くんだよ」

「早食い！？ いいね。楽しそうだね」

「ちなみにこれがその広告な。メンバーはこんな感じだ」

雄二が例のポスターとメンバー表を2人に回す。

「超巨大ジャンボパフェDXって、なんてセンスのないネーミング。直訳でとても大きな大きなパフェ。そのままじゃない……」

そこは突っ込んだじゃいけないと思うんだ。

「ベタなネーミングの分。どれくらいのパフェが出るかわからないって利もあるけどな」

「思いつきり写真が載ってるけど」

「これほど縮小化されたデザインでは実際どれくらいの大きさか判断がつかぬ。これはこれで向こう側の作戦なのかもしれぬぞ？」

「一理ありますね」

「……まず私と雄二が出る」

「へえー。なんだか面白そうだね。：代表がいるならボクも参加していいカナ？」

「……………何っ!？」

「構わないが。結構きついかもしれないぞ？ ミスツた場合金も取られるし」

「これでも水泳部だからね。結構な量はお腹に入れられるよ？ ボクはお金の心配なら問題ないしね ムッツリーニ君の隣はまだ空席だけど、ボクここに入っていい？」

「ということだが、いいか？ムッツリーニ？」

「……………俺はかまわない」

「じゃあ決まりだ」

「やったっ！！ よろしくねムッツリーニ君」

おお、工藤さんも参加してくれた！！  
最初はただ小腹を満たしたいだけだったのに結構大規模になってきたよ。  
ある意味僕らしいけど。  
雄二がムツツリーニの隣に工藤さんの名前を書く。これでかなり表が埋まったね。

超巨大ジャンボパフェDX早食い。  
メンバーリスト

男子

女子

雄二

翔子

明久

ムツツリーニ

愛子

予備・秀吉

それにしても雄二は霧島さん。ムツツリー二は工藤さんのからの直々のご指名があつたのに僕と食べたいっていう人は1人もなし…。寂しくなんか…。寂しくなんかないんだからね！！

「何をすすり泣いておるのじゃ明久」

「人生の不条理に打ちのめされているんだ…」

いいもんいいもん！！ 僕には秀吉がいるんだから！！

「最後は明久粹だな。候補は姫路と島田。どっちと食べたい明久？」

「どっちって言われても…」

「当然ウチよね！！」

「私と一緒に食べたいですよね明久君！！」

「だからどうして2人共そんなに必死なの！？」

綺麗な女の子2人から言い寄られて嬉しいはずなのに何故かこの場からすぐに逃げ出したいと思ってしまうのはどうしてなんだろう？僕は再び助けを求めようと横目で周りを観察すると、工藤さんと木下さんがなにやらひそひそ話をしていた。

《ほーら。優子いいの？ 早くしないと吉井君が取られちゃうよ？》

《取らっ…！？ 何言ってるのよ優子！！ アタシは別に》

《もー。意地っ張りぱりだなあ。ボクみたいにささっと掠め取るぐ

らい勢いでないと吉井君は捕まえられないよ？ 彼倍率高いからね。男女問わずに《

《…最後の言葉が気になるけど、大体ね。アタシは吉井君に興味なんか》

《お弁当まで作ってあげて興味がないなんてことはないよね？》  
《……………》

《もう一度言うけど。このままでいいの優子？》

《そんなの……………良いわけじゃない…。でもどうしろっていうのよ？ あの2人の邪魔なんてできないし…》

《もー、変なところで優等生になっちゃうんだからー》

《変って何よ！！》

《恋愛は奪ってなんぼでしょ。理屈じゃないんだからさ。それに、この広告のここ見てよ》

《何よ？》

《瑞希ちゃんも美波ちゃんも吉井君と一緒にパフェを食べることに夢中になってるけど、この早食いの景品ってもう一つあったんだよ。ほらここ。小さいけど書いてるでしょ》

《…『なお、見事完食したカップルには記念撮影も行っております。この写真は当店の窓に張られますので是非どうぞ』…ですって！？》

《代表は気が付いてるみたいだね。…これができれば優子と吉井君は町内で公認のカップルになるかもしれないよ？》

《そんなの恥ずかしすぎるわよ！！》

《じゃあ吉井君がああ2人のどちらかと一緒にこれ撮っていいの？ そんなことになったら唯でさえ後追いの優子はさらに差をつけられちゃうよ？》

《それは、嫌だけど…》

《じゃあ、もう答えは1つしかないんじゃない？ ほら、背中押してあげるから頑張ろう》

「アキー。もう観念しなさいよ」

「明久君。往生際が悪いです!!」

駄目だ。2人がいる所為で何言ってるか聞こえない。ていうかもうじゃんけんとか決めればいいじゃない。姫路さんと美波のどちらかなんて僕には選べないよ!!

「はいはい。ちょーっとストップして」

と、僕らの間に工藤さんが割り込んできた。

「どうしたんですか?」

「ウチらは今大事の用が」

「それはわかってるけど、2人で勝手に全部決めちゃうのも頂けないと思ってるね」

「……はい?」「」

工藤さんは何を言ってるんだろう…?

思わず2人と言葉がハモる。

すると、今度は工藤さんの代わりに木下さんが頬を真っ赤にして出てきた。

「はい。優子ががんばって」

「…えっと」

「えっと、何? 木下さん」

「……」

妙に体をうねうねさせて拳動不審のお姉さん。

失礼かもしれないけど、その姿がちょっとだけ可愛いと思っってしまった。

異様な沈黙が僕達の周辺を覆っていく。



### 第3話

木下さんの放った言葉は、Fクラスという手狭な空間から音を消失させた。

驚きに目を丸くしている姫路さんと美波。

僕らを放置して談笑していた雄二、秀吉、ムッツリーニや霧島さんも一斉に視線をこっちに向ける。

その中心で、僕と木下さんは何を言わず呆然と佇んでいた。

木下さんはまだ顔を赤く染め上げたまま僕に睨むような視線を向ける。

こういう事に慣れてない僕は、その場で咄嗟に言う言葉が思いつかなかった。

そんな中、工藤さんだけが、みんなと違い笑顔で周囲を見守っていた。

「と、言うことなんだよ。吉井君の相方争奪戦には優子も参加するからね」

唯一、この中で冷静さを失わなかった工藤さんが第一声を告げる。

それで、僕は朝に目覚まし時計で覚醒のような気分でゆっくりと平静を取り戻した。

「え、どうしてなの？ 木下さんが参加する理由が思い当たらないんだけど」

「……何よ。アタシが出たら駄目なの？」

「駄目って言うか。駄目じゃないけど、意外だったからつい……」

真実意外だ。

彼女ってこういういったことには無関心だと思ってたから余計にそう思

う。

もし、この場にFクラスのクラスメイトがまだ残っていたら、僕は間違いないく処刑されているだろう。いろんな意味で須川君の犠牲は無駄じゃなかった。

さっきの言葉が脳裏に蘇り、つい照れくさくなってしまつて木下さんから目を背けた僕の遠くで、雄二達がひそやかに話すのが見えた。

《なあ秀吉。まさか木下姉って、そうなのか？》

《いや、ワシも初耳じゃ。最近の姉上の事はよく知らなかったからの。別段いつもどおりだと思つていたのじゃが》

《……優子は吉井にお弁当を作つてあげたこともある》

《……近頃、明久と木下優子の距離が縮まっている様子があった……。おそらく例の写真騒動が発端と思われる》

《なるほどな》

《あの日を思い出すと体中が震えるのじゃが、何故じゃろう……？》

あの日の秀吉を思い出すと申し訳なさでいっぱいになるのはどうしてだろう……。

っ！？ 隣からどす黒い殺気を感じる！！

「アキー。一体どういうことなのよ！！」

「明久君！！ 木下さんに何したんですか！！」

親の仇を見るような剣幕で僕を威嚇する2人。これって僕の所為なの！？

そしてもう僕の腕があらぬ方向に向かっている気がする！！

「ええ！？ 僕だつてわからないよ！！ だからそんなに僕の肘関節をそつちに曲げないでえ！？」

「お弁当だつて作つてもらつてたしい!!」

「手を繋いで逃げました!!」

「あがががつ!?!」

それにはいろいろ事情があ!?!と言いたいけど、関節が痛くて上手く言葉が出てこない。

誰かこの状況をなんとかしてー!?!?そう叫ぼうとした時、木下さんが一歩。僕らに近づいた。

「島田さん。姫路さん。聞いて」

まだ落ち着きを取り戻していない2人に木下さんが平静な表情で言葉を掛ける。

その隙になんとか美波から脱出した僕は少し2人から距離をとつた。あの場に僕が入るのは、いろいろな意味でまずいと直感が告げている。

「あれは吉井君の要望でもなんでもなくて、…ただアタシがそうしたいからやつただけなの」

「えっ?」

「それは、どういふことですか?」

美波と姫路さんは一瞬ぼかんとした。

3人を中心に、場の空気が、再び入れ替わる。

「この際だから、アタシも腹を割つて言うわ」

「それって……」

「木下さん…もしかして…」

美波と姫路さんもゆっくりと木下さんに向き直り答える。

そこに、いつもの洒落や冗談が挟める余地はなかった。にらみ合いにも似た緊張感が漂う中。2人の前で木下さんは小さく溜息を吐いてから、ハッキリと告げた。

「アタシも、2人と”同じ気持ち”だから…。だから、絶対諦めない」

その言葉に、美波と姫路さんは驚いたような。納得したような。不思議な感情を表した。

彼女は視線を外さず真っ直ぐな瞳で2人を見据える。

木下さんの言葉の真意は僕にはさっぱりわからない。

でも、きつとこの言葉には僕が考えてる以上に深い事情があるんだろう。

「許して欲しいなんて思わない。認めてもらいたいわけでもない。でも、アタシはこの想いにだけは嘘を吐きたくないの」

胸に手を当てながら心中を吐露するように、力強く語る。

僕は、思わず生唾を飲んでしまった。

連続で真っ直ぐに言葉を言い放つ木下さんの姿は、言葉に出来ないほど綺麗に感じた。こういう状況でもなければまともに直視できないぐらいだ。

僕も雄二達もその様子を固唾を呑んで見守るしかなかった。

そして、数秒間の沈黙が教室を覆った後、

「わかりました」

「そっか。そういうことだったんだ…」

2人は小さく納得したように誰にでもなく呟く。

そして、ほぼ同時に木下さんの方に向かい。

彼女の前で自信たっぷりと言った。

「でも、ウチ（私）だって絶対に負けないから」

一言。それだけ言つて2人はまたゆつくりと後退した。

その後、木下さんが背を向けた2人に向かつて頷く。

一連の動作に意味は、やっぱり僕には意味がわからない。

でも、何故だか知らないけど、僕も自然と笑みが浮かんだ。

「ねえ、3人とも」

シュツ、サクツ ドン！！

その瞬間、視認できない勢いで僕の頬を薄皮1枚切り裂きながら何か固い物が通り過ぎ真後ろの壁に鋭く突き刺さった。

何事…？

「え？」

「ちっ、ムツツリーニ。窓を開ける」

「……………合点承知」

「ええっ！！ 何！！ なんだよ今の舌打ちはっ！！ 2人共何し

ようとしてるのっ！！ 何を落とす気っ！！」

「秀吉。俺の携帯を貸す。これで須川に連絡してくれ。異端者を捕

まえたとな」

「了解じゃ」

「何故にっ！！？」

秀吉までっ！？ ってかなんだかみんな怒ってない？

どうしてそんなに僕を射殺す目で見えるんだ…。今日は何もしてないはずなのにっ。

状況はわからないけど、僕の第六感は緊急ブザーを鳴らしっぱなしだ。

つまり、僕の生命の危機っ！！

どう逃げようかと慌てる僕の肩に雄二はボンと優しく手を置いた。

「なんだよっ」

「明久。俺はな」

試召戦争の頃を思い出すようないつになく真剣な雄二の目と言葉。ひよっとして真面目な話なのか？

「お前の幸せが、この世で一番大嫌いなんだ」

「最低だっ！！」

キリつとした顔でなんてこと言いやがるんだ！！

この野郎っ！！　いつか絶対惨たらしく殺してやる！！

ってまずいつ！！　秀吉が須川君に連絡を取ったら異端審問会で僕は間違いなく死刑だ。もはや早食いどころじゃない。

邪魔な雄二を払いのけた後、僕は急いで上履きの片方を脱いで秀吉の持っている携帯に向かって投げる。

「あー、もしもし…」

「ごめん秀吉っ」

「うわっ、なんじゃ！？」

見事雄二の携帯にヒット、よしっ、秀吉が勢い余って携帯を落とすた！！

投げた上履きは放っておいて僕はダッシュで秀吉の落した携帯を拾いあげる。

そして、すぐ投球フォームに入り、さっきムツツリー二が開けた窓

に向かって全力で放り投げる！！

「天まで、飛んでけえーっ！！！」

「おいしいーっ！？ 俺の携帯ーっ！！！」

ひゅーん。という効果音が似合いそうな勢いで雄二の携帯は教室の窓から大空へ飛ばたいていった。ふう、危なかった。

「てめえっ せっかく修理したのにまた壊れたじゃねーかっ！！！」

「雄二が余計なことするから悪いんだろーっ！！！」

「ふざけんなっ やんのかこらあっ！！！」

「上等じゃないかっ 日ごろの恨みを籠めてたっぷりお返ししてやるー！！！」

ドカビキグチャっ！！（僕と雄二が殴りあう音）

「…それいいとして、携帯は拾わなくてよいのかの…、まだ壊れたと決まったわけではないのじゃが…」

「…………… 下は柔らかい地面だから、壊れてない可能性もある」

「まったく、アキも坂本もバカなんだから……」

「それでこそ吉井君じゃない。じゃなきゃ観察処分者なんて名誉は与えられないわ」

「それってすごく不名誉な気がするんですけど……」

「…………… 雄二の携帯なら5秒で見つける自信がある」

「さすが代表っ ラブラブだねえ」

殴りあう僕らの横で何やら楽しそうに談笑しているみんなの姿がある。

その光景を横目で見て、僕はちょっと感慨に耽ってしまった。最初は僕や雄二。秀吉とムツツリー二の4人しかいなかった。

もつと遡れば僕一人だ。それが今や僕らの輪は木下さんも加わって倍以上の9人になっている。

これって案外すごいことなんじゃないか？ 自慢したいぐらいだ。この仲をずっと大事にしたい。僕は心からそう思った。

「っていつかわけで死ぬ雄二っ!!」

「何が っっていうわけだ!! てめえなんかやられるかっ」

勿論。『一部例外』を除いて、だけどね。

大分回り道をしてしまったが、ここで一度本題に戻ろう。

「じゃあ、明久の相方候補は姫路。島田。木下姉だな」

携帯を拾いに行つてすぐ、僕らは黒板の前に並んだ。どうやら壊れはしなかったらしい。……………ちっ

教壇に立った雄二の言葉に3人が静かに頷く。

…我の事ながら3人の女子に取り合いにされる立場になるとは思いもしなかった…。

いろいろ自惚れたいけど、普段の態度からすると誰とも脈なんてないよね…。

木下さんお手製お弁当も、悪い噂を消したお礼みたいだったし。

悲しくなんかっ 悲しくなんかない!!

「どうやって決めるの雄二？」

「うーん。こうなっちゃジャンケンみたいな運勝負だといろいろ納得できないだろ。トランプは今日は持つてきてないし」

「召喚獣勝負じゃと姉上はともかく島田に勝ち目はなからう」

「アタシも姫路さんには勝てる気がしないけどね…」

自分の成績がそのまま強さになる召喚獣の戦いだと確かに突出した点数のない美波は不利だ。

美波は数学が得意科目なんだけど、それでもほかの2人が圧倒的過ぎる。

素の状態の2人を倒せるのはAクラスの工藤さんと霧島さんが保体のムツツリー二ぐらいだろう。

「……運次第じゃなく、吉井とうまく連携がとれるようなゲームがいいと思う」

「じゃあさ。連想ゲームなんてどうかな？」

「……連想ゲーム？」

僕と美波。姫路さん。木下さんが同時に言葉を返した。

「うん。吉井君が黒板に文字を書いてそれが何なのか当てるゲームだよ。これなら相手との相性もばっちりわかりやすいでしょ？」

「いい考えじゃな。それなら確かに文句のいい様はないのう」

「僕はいいけど…」

「……じゃあ問題はどつする？」

「そうだな。俺達が順番に明久に答えを書いた紙を渡す。明久はその答えのヒントを黒板に書いていくって感じでいいんじゃないか？」

「……ヒントの回数は3回がいいと思う」

「それでいいか？参加者の3人」

「私は構いません」

「ウチも大丈夫よ。負けないんだから」  
「うん。いいんじゃない」

連想ゲームin吉井明久

ルールを軽く説明しよう。

まず僕が雄二、ムツツリー二、秀吉、霧島さん、工藤さんのローテーションで順番に紙をもらう。

その紙にはある人物の名前が書いてある。

僕はその人の特徴を黒板に書いていって、それを見た姫路さん。美波。木下さんが答える。

ヒントの回数は3回。それでわからなければ問題は無効になってしまふ。

書くヒントは最初に曲解させてどんどんわかりやすくしていき、回答者に分かりやすく説明すること。

回答者の発言権は問題一問につき一回のみ。早く言えばそれだけ有利だけど間違えたら即アウトだ。

「第一回!!! 吉井明久の連想ゲーム!!!」(雄二のコール)

「『イエーツ!!!』」(僕と秀吉とムツツリー二の合いの手)

卓袱台を3つ横に並べて左から美波、木下さん。姫路さんの順で腰掛ける。

僕は教壇でチョークを持ってオンボロの黒板の前に立った。

「じゃあ雄二。頼んだよ」

「おう。任せとけ」

「絶対負けません!!」

「ウチだつて!!」

「アタシも負けたくない!!」

ペンで雄二が手のひらサイズの小さい紙に何かを書く。  
そして、その紙を見えないように一度握りつぶした後、僕の手のひらに乗せた。

…さあ、何が来る!!

『吉井明久』

「雄二……っ!?!」

いきなり僕かよ!!

「ほら、早く書け。あいつらが答えたくてウズウズしてるぞ」

「くっ……、まあいいよ」

いや、これはある意味ラッキーかもしれない。  
自分のことだからヒントを出すのも容易だ。  
思いのまま自分の特徴を書けばいいだけなんだから、

「何が出たのかしら……?」

「アキの驚きっぷりから見て、よほど意外な人かもね」

2人の言葉を聴きながら僕は黒板に縦書きでヒントを出す。

『超絶イケメン美男子』

「アホかお前は…」

「何でさ!?!」

何処も可笑しなところはないじゃないか!!

回答者の3人がうんうんと唸る。

あれー? すぐく分かりやすく書いたはずなのに…。

「はいっ」

姫路さんが手を上げる。

「久保君ですね!」

「残念。不正解だよ」

「そんなぁ…」

確かにこの学校のイケメンと言えば久保君だけどそうじゃないんだよ姫路さん。

しよぼーんとする姫路さんの隣で2人が助かった、と小さく呟いていた。

これだけではまだ範囲が絞れないか。仕方ない。2つ目のヒントに行こう。

『甲冑の似合う男』

「「はあ？」」

「明久…。お前って奴は」

ますます意味不明とばかりに頭の天辺に？マークを浮べる2人。

なんでそこで頭を抑えるかな雄二は、そっか。あいつは頭が可哀想になつてるからヒントが理解できないんだね。

まったく難儀な友達だよ。

2人には早く答えてもらいたいな。

「吉井君。最後のヒントお願い」

「わかつたよ。…うーん。これ以上に分かりやすい表現か」

そうだねえ…。

『左利き』

「馬鹿だ。本物の馬鹿がここにいる」

「なんだとお！！」

さつきから失礼なことばかり言つて何様なんだコイツは！！

「……………左利きつて、誰？」

「ウチの学校に左利きなんていたっけ？」

「ちよつと、わからないです…」

「…全員不正解だ。…こんなんでわかるわけないだろ」

顔に手を当て呆れかえる雄二。

なんだとっ　と反論しようと思つたら、その前に雄二が僕の持つていた答えの紙切れを奪い去る。

そしてそれを3人に見せた。

「「「……………」」」

どうしてみんなぐうの音も出ないような顔をしているの？

「なんでアタシって、コイツのことを…っ」

木下さんがすぐ落ち込んでいる。

何故だろう、今僕はその場で無様に崩れ落ちてすぐ泣きたい気分になっている…。

今の言葉に僕が悲しむ要素なんてあつたっけ…？

「これがアキなわけじゃないの！！ 大体アキは右利きじゃない！！」

「試召戦争の時に一回だけ左利きになったんだよ！！」

「そんなんがヒントになるわけじゃないのぉーっ！？」

落雷のごとく怒涛に怒鳴る美波。

危ない。今僕が美波の目の前にいたら間違いなく人として大事なものを失う所だった。

確かにちよつと美化しすぎたかもしれない。

美波には次で頑張ってもらおう。

「ムツツリーニ。頼んだよ」

「……………任せておけ」

「次はちゃんとしたヒント出さないよ…？」

「はっはっは、大丈夫だよ美波。僕に任せて」

「次こそ当てて見せます！！」

「……………できた」

「了解。ムッツリー二はなんて書いたのかな…？」

『根本恭二』

お、意外な人が来たよ。

根本恭二。Bクラス代表だ。

卑怯、変態、カンニング常連と、とにかく評判が悪いことで有名な奴だけど、僕たちは何度か根本君とやりあってたから、特徴は書きやすいね。

カキカキ、

『女装』

「はいっ！！ 今度こそアキ！！」

「どうしてそこで僕の名前が出るの！！」

シヨックだよ！！ 美波の検索で女装のトップ記事に僕がいるというのがシヨックだよ！！

「違うんですかっ!?!？」

そして滅茶苦茶驚く姫路さん。まさか姫路さんまでそうなのっ!?!?

「大間違いだよ姫路さん！！ なんで僕が女装で引つかかるの!?!？」

「だってアキ清涼祭とか海行った時に女装したじゃない。コンテス

トにも出たし」

「えっ、そうなの吉井君!？」

「やめてっ!?! 木下さんの前でこれ以上僕の黒歴史を暴かないで!?!」

あれは出たくて出たわけじゃないんだよ!! っっていうか出した

のは美波達じゃないか!!

このままじゃ益々木下さんに残念な人扱いされてしまう…。

くそっ。次のヒントだ。

『卑怯なやつ』

これでさすがに分かるはずだ。

「はい」

「はい木下さんどうぞ」

「根本君じゃない?」

「正解ーっ!?!」

「よしっ」

さすが木下さん。Aクラスは伊達じゃないね。

これで木下さんが一点リード。

あと一回正解すれば確実に勝利だ。

余裕の笑みを浮べる木下さんの隣で姫路さんが畳に手をついて落ち込んでいた。

「うっ、喉元まで出掛かっていたのに…」

「アタシの中の女装って言えば一番印象に残ったのが根本君だったのよね」

「優子は海に行っていないもんね」

なるほど、だからさっきのヒントの時に何も言わなかったんだ。

「次はワシじゃな」

ムツツリー二に変わって秀吉が僕に前にやってくる。

もう名前は書き終えてるみたいだね。

さてさて、秀吉は誰の名前を書いたんだろ。…男の名前だったらちよっとシヨックだな…。

『清水美春』

なるほど、Dクラスの清水さんか。

美波が大好きで偶に僕らの教室にやってくるんだよね。

悪い人じゃないんだけど、お父さん同様暴れたら手がつけられない困ったちゃんだ。

そのおかげで僕は何度か被害を被ってるけど、

とある事件を気に僕は清水さんと対決したことがある、その時の言葉もある所為で僕は彼女があまり嫌いになれない。

でも普段は特徴だらけの人だからヒントを書くのも簡単だね。

『同性愛者（女）』

「美春っ！！」

「はい美波正解！！」

「島田さん早っ！！」

さすが美波。即答だ。

「間違えようが無いわ…。同姓の時点でほとんど確証もてたし」

ほとんど…？ まだこの学校に同性愛者っていたっけ？

「あつ…、私だけまだ一回で正解していません…」

「大丈夫だよ姫路さん。きっと霧島さんなら姫路さんでもわかる簡単な問題を出してくれる思うからね」

「……吉井。これ」

「あ、うん。ありがとう霧島さん。誰だろう…？」

『坂本雄二』

ある意味超分かりやすいよ！！

なんとなく予感はしてたけどまさか本当に書いてくるとは…っ！！  
これなら姫路さんでも簡単だね。

でも最初だけちょっとおふざけを入れようか。

『バカ』

「アキ！！」

ダッ！！（僕が窓に向かってダッシュ）

「ちょ、吉井君何処行くの!？」

「放して工藤さん!! 僕はもうこの世に希望が持てないんだ!!」  
「待つんじゃ明久!! 飛び降りなんて考えるでない!!」

何故バカの最上位も僕なんだよお!! 美波の中の僕ってどうなってるの!？」

秀吉と工藤さんに羽交い絞めされなんとか投身自殺は免れた。

うう…、こんなはずじゃなかったのに、仕方ない。次はちゃんとマジメに書こうか。

姫路さんにも分かりやすくように…、

『如月ハイランドのウェディング体験』

「何いつ!! まさか翔子か!？」

「はい!! 代表」

「残念っ 木下さん不正解っ」

「嘘っ!？」

「坂本君ですね!!」

「はい姫路さん大正解——っ!!」

「やりましたあ!!」

両手を挙げて喜びをアピールする姫路さん。

これでみんな一点だ。予想外の接戦になってきたよ。

「これでみんな一点ですね」

「後一回勝てばアキとパフェを食べられる…!!」

「絶対に負けられない。…慎重に行こう」

みんな思い思いを呟いている。

そんなにあのパフェが食べたいなんて、やっぱり女の子はデザート

に弱いんだねえ。

今度お菓子作りでもやってみようかな？

最後は工藤さんだ。この中では彼女が誰を選ぶのか一番予想つかない。

「んっふっふー。吉井君。ボクが誰を選んだか興味深々だねえ」

「勿論だよ。工藤さんって考えが一番読めないからね」

「褒め言葉して受け取っておくよ。じゃあはい。これね」

そう言つて、工藤さんは楽しそうに後方へ下がっていった。

僕は紙くずを開き中身を確認する。

『島田葉月』

葉月ちゃんっ！？ まさかの学園外じゃないか。

これって、大丈夫なのかな…。

にしても葉月ちゃんの特徴か…、難しいな。そういえば最近もあつたね。

あの時は確か…。

『ノイン』

の風船を持ってたんだ。

「ノイン、ですか？」

「さっき書いてた如月ハイランドのマスコットキャラクターだね。アキが変装してたやつだわ」

「…どこかで聞いたような…」

3人が首を傾げて考えている。  
…書いててなんだけど、これは全員不正解の可能性もあるんじゃないかな…。  
普通出ないでしょこれは…、  
目で工藤さんにそう訴えるとにひひと面白そうに笑った。おのれ確信犯か!!  
これだけでは特定できないので、僕はもう少し分かりやすくヒントを書いた。

『小学5年生』

「葉月ちゃん!!」「葉月!!」「葉月ちゃんです!!」

うおっ、みんな一斉に正解だ!!

「えっ 木下さん葉月のこと知ってるの?」

「ええ…、ちよつといういろあつて、っていつかこれで正解なの?」

「正解なんだけど…、みんな同時に言ったから誰が一番早かったのかわからないよ…」

全員同時に言うとは思わなかった…。

これは引き分けか…?

こういう場合はどうすればいいんだろう。

僕は視線で雄二に問いかけた。

「ムツツリーニ。今の判定は誰が一番早かった?」

雄二がムツツリーニに尋ねる。

すると、ムツツリーニは何処かしらから小型のボイスレコーダーを出し、それを卓袱台に置いてさっきの言葉を再生させた。うーん、やっぱり肉声だとわからないや。

「……………0.3秒の差で、木下優子が一番早かった。続いて姫路瑞希。島田美波」

ムツツリーニが淡々と答えた。

「ということとは…」

僕の早食いのパートナーは、まさか木下さん!?

「嘘…。アタシ?」

「ええええええーっ!??!?」

「決まりじゃな」

「第一回吉井明久の連想ゲームの勝者は木下優子だっ!」

雄二は例のノートに僕の名前の後に木下さんの名を書いた。これでメンバー表は完成だ。

「やったね優子。ボクと一緒にがんばろう!」

「う、うん」

まさに開いた口が塞がらない。といった感じで呆然と工藤さんに抱きしめられる木下さん。

「あうっ、明久君との食べあいつこがあ……………」

「アキとのパフェがあ……………」

うわあ…、姫路さんと美波超落ち込んでる。

ってそんな場合じゃない！！ 僕も予想外だ。

僕の相方は姫路さんか美波だと確信してたのに、ここにきてまさかの革命だった。

これはちよつとやばい。木下さんと同じパフェを食べるなんて…、恥ずかしくて顔から火が出そうだよ！！

「えっと、そういうことだから、よろしくね。吉井君」

「う、うん。こちらこそ…」

ぎこちなく会話してしまう僕たち。

僕も木下さんも頬が赤くなってしまふ。当然と言えば当然だ。目を合わせるのだって恥ずかしいのに。

でも、これならはつきり言って早食いでタダかどうかなんてどうでも良くなってくる。

だって、木下さんと同じパフェを食べあえるなんて夢のようじゃないか！！ もう後悔する要素がない。

それで1000円なんて安いもんだ。今日のことは僕の心のメモリーに永遠に残る最高の思い出になるはずなんだから！！

「よっしゃ！！ じゃあ行くか！！ 目指せ早食い王者！！！！」

「「「おおーっ！！！！」」」

雄二の号令と共に僕たちはようやくFクラスを後にした。

超巨大ジャンボパフェDX早食い。  
メンバーリスト

男子

女子

雄二

翔子

明久

優子

ムッツリーニ

愛子

予備・秀吉

## 第4話

優子SIDE

Fクラスでの騒動が一件落着し、本来の目的だったパフェ早食い大会に行く為、アタシ達は大所帯で学校の校門を抜けた。

今さら気がついたけど、実は結構時間が経ってたのね。もう大分日が落ちかけてる。これだとすべてが終わる頃には夜になっているだろう。

9人もいる輪の中で、アタシが一番最後尾でみんなの後ろについていった。

一番前には坂本君や吉井君が楽しそうに談笑しているのが見えた。何だかんだ言ってもやっぱりあの2人は仲がいい。それが今のアタシには少しだけ羨ましいと感じる。

「あれ、どうしたの優子？ ちょっと元気ない？」

一つ前の列で土屋君と第一次成長期について議論していた愛子がふとアタシに振り向いた。

「なんでもないわ。 そうだ。 愛子に聞いておかないといけないことがあったのよ」

「ボクに？」

「ええ、 アンタ、 最後の問題でわざと葉月ちゃんを選んだでしょ」

少々言葉をきつめにして問を投げかける。

余談だけど、アタシは一度愛子に吉井君がアタシの写真を落とした日のことを少しだけ話した。

勿論全部じゃない。起こった事を大雑把に説明しただけ。

丁度Aクラス前の廊下で吉井君達とすれ違って、その後代表が一足先にFクラスに向かった後のことだ。

最初に聞かれたのがお弁当。アタシとしては気付かれずにやったつもりだったのにFクラスのわけの分からない覆面集団の所為で結局漏洩してしまった。

アタシでは愛子相手に話術だとまず勝てない。

結果、アタシが吉井君のことを……その、少し気にかけていることに気付かれた。

「何のこと？　ボクは吉井君がびっくりするような人を選んだだけだよ」

平然とすっ呆ける我が友達。いい度胸じゃない…。

「ええ、びっくりしたでしょうね。あの場でアタシが葉月ちゃんのことを知ってるのは吉井君と愛子だけだったんだから」

「そうだったけ？」

「そうよ。下手な演技してないではつきり言いなさい。Fクラスはともかく、アタシの目は誤魔化せないわよ」

「…相変わらずすごいものには鋭いなあ。優子って案外探偵とか向いてるんじゃない？」

「謹んで遠慮しておくわ」

言葉を巧みに操って本音を引き出す勝負の場合、まず愛子には勝てない。

けど、気迫で押し相手に一切のいい訳をさせず電撃的に言葉攻めをすればアタシでも勝つことは出来る。

口で勝てないから目で訴えればいいんだ。正直に言わないとどうなるか知らないぞってね。

葉月ちゃんと会った時の話をした直度にまったく同じ名前が問題として本人の口から出る。これで怪しむなって言うほうが無理だ。

小さく溜息を吐いた愛子は、少し歩幅を弛めアタシの横に並んだ。

「別に深い意味はないよ。ボクは代表と優子と一緒に遊びたかっただけなんだから」

「アタシと、…代表？」

「うん。ボクと代表はよくFクラスに遊びに行ってるけど、優子は毎回来なかったでしょ」

それは、秀吉がいるからだ。

学校から模範的な優等生と言われたアタシにはそれに見合う態度と成績を出せないといけない義務がある。

その反動…、とはちょっと違うけど、家にいるときのアタシは客観的に見てもかなりズボラだ。

暑いって理由だけで下着一枚で家中歩き回ったり、ベットに寝転んで乙女小説を読んだり。

そのことを知っているのは今の所一緒に暮らしてる弟の秀吉だけ、だからこそ、アイツがいると素の自分が表出してしまういそうで嫌なんだ。

けど、それもそろそろ矯正していかないといけないわね。この先アタシは否が応にもFクラスに関わっていくんだから。

感慨に耽っているアタシとは裏腹に愛子は楽しそうに言った。

「だからこんな行事でも優子と一緒に来てくれるのが嬉しかったんだよ」

「…よく言うわよ。『来ないと優子の想いを変わりにボクが伝えてきてあげる』なんて立派な脅しかけてくれて」

「にはは、あれで来る優子も優子だよ。まさかそんなに好きになっただなんてボクも思わなかったんだもん」

「なっ、好きってアンタっ!?!」

「今さら赤くなってもいろいろ遅いよ。まあ見ての通り。吉井君を狙う人は多いから、がんばってね」

愛子が鞆を持っていない方の手をアタシの正面に向けて指す。

そこには姫路さんと島田さんに左右を囲まれて楽しそうに笑ってる吉井君がいた。

あの野郎…。ぬけぬけと…、

「……………」

「…嫉妬?」

「うるさい…、どうでもいいでしょ」

「勢い余って吉井君に関節技掛けちゃダメだよ? 美波ちゃんとのダブルプレーなんて、今度こそ彼死んじゃうかもしれないからね」

「2人きりならともかく、公共の場でそんなことしないわよ。アタシのイメージがまた崩れちゃうじゃない」

それとは別に憤怒メーターは着々と溜まっていくけどね、いつ開放されるのかアタシも楽しみだわ…ふふふ、

「んじゃ、アタシもちよつと行って来るわ」

「吉井君のどこ?」

「ええ、吉井君の処遇はともかく、別の女と目の前でいちゃいちゃされるのはやっぱりムカつくし」

「優子も女になったねー。ボクは嬉しいな」

「一ター言多い。…アンタこそ土屋君と仲いいじゃない。ひよつとして付き合ってるの?」

「そ、そんなことはないよ」

普段から余裕ぶってる愛子の仮面が今、ちよつとだけ崩れた。ふーん、…アンタだってアタシと一緒にじゃない。まあ今は追求しないでおいてあげよう。それより吉井君だ。最前列に向かうため、少し歩みを速めると、さっきまでアタシの隣にいた愛子が少し後ろから言葉を投げてきた。

「ねえ、優子。朝食が始まったら吉井君に『はい、あーん』はしてあげるの?」

「…ぶつ!? いきなり何言い出すのよ!」

「一応聞いておこうかと思って、大事な友達の恋なんだから少しでもアドバイスしてあげないと」

「結構よ。それに、朝食いんだから多分そんな暇ないでしょ」

「あつたらやるの?」

「…あつたら、…多分」

否定できない自分がちよつと嫌だった。

明久SIDE

なんだかんだ言ってる間に目的の店に到着した。

「へえ、一階が駐車場で二階がお店なんだね」

「なんだかレストランみたいですね」

「みたい。じゃなくてレストランなんだろ。きっと」

「デザートを専門にあつかうレストランなぞ聞いたこと無いのじゃが」

「……………聞いたことはあった。…でも実物は初めて」

僕達の頭上より上に立つ大きい建物にみんなそれぞれの感想を口にする。

店名は、『エンジェルヒール』？ 変わった名前だね。

窓際を見ると時間の所為か蛍光灯の黄色い光が店内を包み込んでいるのが見える。

「早く入りましょう。今はあんまり込んでないみたいだし」

「まあ今は丁度夕飯時だし、こんな時間にケーキ食べようと思う人は少ないよね」

「そんな時間にアタシ達はこれからパフェを食べようする少数派異端者ってわけよね」

「木下さん。異端者ってそれちょっと違う……………」

最近僕の脳内で異端者って言うといコール異端審問会だからその言葉はちよつと心臓に悪かったりする。

「……………雄二。早く行こう」

「わかったから俺の腕を引っ張るな！？ 待てっておい聞けよ！！」

霧島さんが雄二の腕を（力強く）抱いて先陣をきつた。

相変わらず雄二は愛されてるね。…やっぱりあの時に殺ってしまえばよかった。

みんなもその後が続いて店内に入っていく。  
くっ、…雄二の肅清は一先ず置いていて僕も置いて行かれないために早く行かないと！！

チリンチリン

「いらつしやいませっ！！！」

「……………ぐはあっ！？」

店に入った途端。僕とムツツリー二の目の前が真っ赤になった。目の前の光景に思わず吐血してしまう。

理由は一目瞭然、店員がみんなメイド服を着ているんだ！！何だここは、僕の夢が実体になって現出したのか。

男の店員はいない。店の内装もそこいらのファミレスよりちょっと豪華だし、ここは、ここは…っ！！

「最高じゃないかぁーっ！！！」

「……………（コクコク）っ！！！」

エンジェルだ！！ 確かにここは天使がいるかのような空間だよ！！僕達男の夢をかなえた世界がここにあった。まさに癒<sup>アガルタ</sup>した。理想郷だ！！この店の店長には是非敬意を表したい。

「はっ、はい？」

「ああ、この2人はほっといいていいんで、人数は9人だ」

のた打ち回る僕達を放置して話を進める雄二。

「あ、かしこまりました。お席がいかがされますか？」

「できれば4つ。無ければ待ちますから」

「ムツツリー二君。ここは撮影禁止だつてさ」

「……………何ッ!! ……くっ、無念だ…!!」

「アキー。ちょーっといいかしら?」

「ええっ、ちょっ…まっ美波!! 僕の首に何をするつもりなのお!?」

「か、かしこまりました…少々お待ち下さい」

お辞儀してその場から離れるメイドさん。

僕達は少し変な集団だと思われたかもしれない…。

「店に入って1分で騒ぎすぎだお前ら…」

「そう思うなら美波を止めてよおーっ!!」

「島田さん。あんまりお店で暴れるのは駄目よ。ほかのお客さんに迷惑でしょう?」

「…それもそうね。ちょっつとやりすぎちゃった」

木下さんが美波を注意した。

よかった。やっぱり彼女は常識人だったんだね…。

そして美波。今のちょっつとなんて生易しい部類の技じゃなかったと思う。

「そういうのは人目のつかない場所でやりましょう」

訂正。木下さんに対する評価も考えない直さないといけないかもしれない…。

「…っ!? なんじゃ!! 今背後から悪寒が」

「きつと背後霊とかだよ秀吉。気をつけないと関節技を掛けられて明日から学校に通えなくなっちゃっよ」

「そうじゃな。今は後ろを見ぬことにしよう」

さすが秀吉。勘がいい。

僕たちの後ろには笑顔で殺気を振りまく悪鬼が3人もいるんだから……。

振り向く「死は間違いない。

見回すと人はそれなり程度みたいだ。けど雄二の注文の所為で僕達は少し待たされていた。

テーブル4つ使いたいとか言ってたけど、そんなに要るの？

「雄二。何でテーブル4つも要るの？」

「俺達はこれからこの店で早食いをやるんだ。どうせなら一ペアにつきテーブル一つあったほうがいいだろ。参加しない奴用も兼ねると最低でも4つ要るんだよ」

「なるほど」

「私達は好きなメニューを注文していんですか？」

「ああ、料金はテーブル別にもらう予定だからな」

「……楽しみ」

「だよねえ。どんなパフェが出てくるのカナ？」

そうこうしていること約5分。

僕達はようやく呼ばれ腰を落ち着けることできた。

テーブルは横4列で左からムツツリーニペア、僕達、雄二ペア、そして姫路さん達で並ぶように座っている。

場所的に店の中央部分で通路を区切る壁がある代わりに窓がないからちょっと寂しい感じがする。

僕達男性陣が座っている方向が向かって内向きのイス。女性陣が壁にもたれることが出来るソファだ。

## 配置

ドリンクバー

壁

工藤さん	木下さん	霧島さん	美波達
テーブル	テーブル	テーブル	テーブル
ムッツリーニ	僕	雄二	秀吉

「明久君、木下さんに変なことしたら駄目ですからねっ!!」  
「そうよ。普通に、いつもどおりにしてなさい!!」

雄二のテーブルを跨いだ向こう側で美波と姫路さんが僕に促す。  
それを見ていた木下さんが面白そうな表情で僕に視線を向けた。

「って言われてるけど?」  
「煽らないでよ木下さん…。あの2人はマジメに洒落にならないことがあるんだから」

私もパフェを作って明久君に食べさせてあげます!! なんて姫路さんに言われたら僕は現世にお別れをしなければいけない自体になる。

美波はさっきの件で言わずもがな。  
なるべく今は2人を刺激しないようにしないと…、命に関わるから。

「ここって結構メニューも豊富みたいだね」  
「……………ケーキ、アイス、パフェ、フルーツ、カキ氷。見事にデザート類ばかり。ある意味洗礼されている」

向かって左に座っている工藤さんとムッツリーニがメニューを見て言った。

「確かに、ケーキだけでも、なんだ…？ モンブランやチーズケーキは分かるがカトルカールとかシャルロットってケーキなのか？ 初めて聞く名前が一杯あるぞ」

「……シャルロットは生地の中かにいろいろなフルーツを入れて冷やしたものって聞いた事がある」

「どれも美味しそうですね」

「あー、ウチ帰ったらご飯食べないといけないのに、誘惑に負けそう…」

「ワシもつい頼んでみたくなる品が沢山あるのう」

右側にいるみんなもこのメニューに興味深々のようだ。

僕も見てみると、…うーん。聞いたこと無い品が一杯だ。…そして高い。

普通のケーキが一皿600円って、どんな高級素材つかってるんだ。…でも、逆に考えるとこってデザート以外はドリンクしかない。

何故か『ご飯』だけあったけど、

メニューがメニューなだけにすごい違和感が、なんであるんだろう…

「思わず食べる前に舌鼓を打ってしまいそうね」

「そうだね」

「アタシ達が今から挑戦する巨大パフェってどれの事かしら？」

「えーっと、これじゃないかな。一番後ろのページの奴」

メニュー欄の一番後ろにはデカデカと『巨大パフェ早食いキャンペーン』と書いてあった。

そこに見るからに大きい杯の形をしたパフェカップが載っている。これを食べるんだあ…。想像以上にボリュームありそう。

「こりゃ、こつちも全力で相手をしないとね」

「……頑張る」

「ボク達が頑張って一番を取るから、頑張ろうねムッツリー二君」

「……………(コクン)」

「かなり大きいのね。これを今から食べるんだあ。アタシちょっと自身なくなってきたかも…。カロリー大丈夫かな…」

気合が入っていく一同の中で木下さんが重たい溜息を吐いた。

まあ、確かに女の子にはちょっときつそうだよな。

無理も無い。大きさが大きさだ。僕だって尻込みするぐらいなんだから。

むしろモチベーションが上がってる霧島さんと工藤さんが異様なんじゃないだろうか。

「僕達は自分のペースで食べよう。無理は禁物って言うし、急いでお腹でも壊したら大変だからね」

「アタシはよくても吉井君が駄目なんじゃないの？ お金ないんでしょ。やるからにはアタシも本気をだすわ」

僕を気遣ってくれてるのは木下さんは手でグーを作りやる気を見せた。

勝負事にはどんな物でも全力で、そんなプライドの高さがひしひしと伝わってくる。

それは嬉しいけど、

「確かに完食するのは大事だけど、僕は最初の時ほど早食いに執着はないんだ」

「え、なんで？」

首を傾げる木下さん。Aクラスに乗り込んでまで空腹を満たそうとした時の僕からすれば以外だったのかも。

何かこの場の雰囲気と和ませる言葉は……、

「だって、…木下さんと同じパフェを食べられるなんて、それだけでも飛び上がるぐらい嬉しいから、その為なら1000円程度全然払えるよ」

「なっ、何をいきなり!？」

「あ……」

言ってしまった。

うわぁ!？ 恥ずい!! 超恥ずいよ!!

どうして僕は毎度毎度言葉を選ぶのがヘタクソなんだっ!!

何か木下さんをリラックスできる言葉を選んだつもりだったのに。

僕の方が焦ってるじゃないか!!

なんとか持ち直さないと…っ、けど言葉うまく出てこない。

このままだと食べる前にお互い変な雰囲気になってしまう。

「アタシも……」

「え?」

「ううんっ!？ 何でもないわ!! 絶対完食しましょう。このパ

フェ」

「そ、そうだね」

自分の焦りを誤魔化すように無駄な大声で威勢を張り続ける僕たち。やばい…。最近ちょっと木下さんを意識しすぎかも…、彼女の赤くなった顔を見るだけでそこから視線が外せなくなる。

胸を奥から押し上がってくるかのようなこの想いは、まさかっ!! いやそんな。僕には秀吉っていう将来の伴侶がいるのに、そのお姉さんに浮気みたいな真似はできないよ。

奥から美波と姫路さんが下唇を噛んでこっちを見てるけど、今は怖さより恥ずかしさの勝ってしまい逆に照れてしまっ。どっしよっ…

駄目だ吉井明久。意識を切り替える。そんなんじゃ到底完食なんてできないよ。煩惱退散性欲よ今だけ消え去れ。

「じゃあ注文とるぞ」

雄二が隣から催促する。

「準備はいいかお前ら」

「……うん」

「いつでもいいわよ」

「僕も大丈夫」

「準備万端だよ」

「……いつでも来い」

「かんばつて下さいね明久君」

「へまするんじゃないわよ」

「応援しとるからの」

「よし、すいませーん!!」

雄二が大声でメイドさんと呼んだ。  
それから数秒で可愛いメイドさんが携帯みたいな注文表を持ってくる。

「ご注文をお決まりですか？」

「はい」

「この『超巨大パフェDX』を3つお願いします。やるのはこっちの3ペアで」

そして、今日最大のイベントだった早食い大会の開始がいよいよ始まった。



第4話（後書き）

元ネタはエンジェルモート

## 第5話

注文から数分待った後、唐突に『ドンッ!!』という衝撃がテーブルを襲った。

「な、何っ!?!」

「お待たせ致しました。『超巨大パフェDX』になります」

顔を向けると、メイド服を着たウェイトレスさんが笑顔で大きい杯を両手に持ってきていた。

それを見た僕は思わずあんぐりと間抜けな顔で口を開けた。

……でっか。超でっか……っ!!。

「すげえな。実物だところも迫力があるのか」

「……美味しそう」

「………見てるだけでお腹が膨れてくる」

「食べ応えありそうだねー」

食べ応えあるなんて軽い次元のものじゃないよ工藤さんっ!?

しかし、パツと見はすごいでかいアイスクリームだ。

座ってる僕達の頭上を越える巨大なワイングラスのようなパフェカップの中にはぎゅうぎゅう詰めされたシフォンケーキみたいなものが入ってる。

それがカップの中の実に3分の2を占めていた。ていうか絶対これだけで1ホールぐらいあるよねっ!!

僕達のテーブルに置かれたそれを見て、木下さんが呆然と呟いた。

「すごいフルーツの飾りつけね。これを今から食べるんだ。しかも時間制限付きで」

「…なんかシャンデリアみたいだね」

「ケーキの上に載ってるのは、コーンフレークか？」

「……………カップの縁に苺が敷き詰められている……」

「コーンの上は全部バナナのアイスクリーム、そこにデコレーションがいっぱいあるって感じなんだね」

「何カロリーぐらいあるんでしょうか…？」

「明らかに1日の摂取分を大きく上回っておるのは確実じゃな」

カップから山のように盛り上がったアイスには針山のようにお菓子やフルーツが刺さっていた。

最初にさつきムツツリー二が言った縁を埋めるかのかのような数十個の苺。

その上に周囲を囲むかのようにバナナが8本ほど刺さっている。

さらに上には小さく切ったパイナップル。そしてワッフル。

天井近くでは何本ものチョコポッキーが上を向いて豪快に刺さっていた。

トドメとばかりに一番上にはソフトコーンが鬼の角みたいに反対方向を向いてのっている。

まるで段階分けされた果物のピラミッドだ。

思わず生唾を飲んでしまう。駄目だ。唾を飲んだらお腹が膨れるっ！？

「大きいわね……」

木下さんがパフェの最上段を見て呟いた。

周囲のお客さんもこっちを見て驚ながらヒソヒソと言葉を洩らしている。

気付いたけど、僕達、今すごい注目されているよ……。

「それではルールの説明をします。時間制限は五十分、私の手にあるストップウォッチで測ります。途中トイレなどで退席するのは自由ですが時間延長はありませんのでご注意ください。なお、パフェが崩れたり意図的に倒した場合即失格となります」

これは雄二のノートでも確認したことだ。

「では、準備はよろしいですか？」

僕達の前に小皿とスプーンとフォークが置かれた後、メイドの店員が最後の通告をする。

これに答えれば、もう僕達に逃げ場はない。

「木下さん。大丈夫？」

「…ええ、最初は度肝を抜かれちゃったけど、五十分もあるなら食べきって見せるわ。頑張りましょ吉井君」

「うん。絶対食べきるんだ!!」

両隣の2組に視線を向けると、ゆっくり頷く。それが、開戦の合図だ。

「それではっ!! よーい。スタート!!」

来た!!

思考を目の前のパフェだけに絞り込む。

「木下さんはアイスを先に食べてっ！！ 僕は周りの装飾を片付けていくから！！」  
「わかつたわ」

「先手必勝だ！！」

固形物は消化に時間が掛かるから女の子にはきつい。  
木下さんにはひたすらアイスだけを食べてもらって僕は上に聳え立つソフトコーンを手にとって口の中に放り込んだ。  
口内でガリガリと噛み砕いてすぐに飲み込む。  
くっ、今の中でも結構お腹くるな…。

「だ、大丈夫吉井君っ！？ そんな一遍に」

「なんとか…。中身の無いコーンだったらすぐ食べ切れるよ」

「…なるほど、にしてもこれ結構美味しいわね…」

「確かに、早食いじゃなかったらゆっくり味わいたいね。コーンは後一つ。次はポッキーだ」

味は悪くない。寧ろそこらのアイスより全然美味しい。さすが専門店と言った所か。

でも今は味わってる時間はない。残り時間46分。

雄二達の方を見るとすでに天辺のコーンは無くなり先に下段の苺を丸呑みしているところだった。

クリームが溶けて溢れ失格にならないよう予め縁を確保してるんだな。

理論派の雄二らしいやり方だ。

コーンを咀嚼し終わった後はアイスに刺さっている計十本のポッキーを丸ごと引っこ抜きそれをすべて口に入れた。

一本一本なんてまだるっこしい食べ方はできない。

甘い味覚が口いっぱいに広がる。…うつぶ、…これを食べたならこの

先一週間は甘いもの食べなくてもいける自身があるよ。

木下さんは上からスプーンで着々とアイスを手を平らげていく。僕が横から攻め、木下さんが真上から攻めている感じだ。

「順位的には雄二のペアが一番進んでおるの。次いで明久。ムッツリーニは大分ゆっくりペースじゃ」

「どのチームも男子が果物全般で女子がアイス担当って感じね」

「制限時間は後40分です。まだ誰もペースは落ちていません」

「時間半分ぐらいになってからが本番じゃな」

非参加の秀吉達がわかりやすく解説してくれた。

ありがたい。正直今は余所見をできる状況じゃないからね。

十分経つてもパフェはほとんど減っていない。そりゃそうだ。

僕は一心不乱にポッキーを食べ終えた後、すぐにワッフルに手を伸ばす。

今さっきまでポッキーがあつたアイスのエリアは木下さんがどんどん消化していつてくれた。

口の中が甘つたるくて気持ち悪い…。

「…ワッフルはお腹にちよつときついな。水水」

「あんまり急ぐと咽むちゃうから落ち着いて食べて、まだ焦る時じゃないわよ」

「う、了解です…」

さすが木下さん、僕と違って冷静に全体を見て分析してる。

確かに水は使わないほうがいいかもしれない。

まだバナナ、パイナップル、苺、キウイが待ってるんだ。水分の取り過ぎは返ってお腹が膨れてしまう。

僕はスプーンを手に取り近くのアイスを一口食べた。これでも立派

な水分だ。十分流し込める。

「吉井君。お腹大丈夫？」

「まだまだいけるよ。木下さんこそ無理は禁物だからね」

「ありがとう。アタシだってこんなところでギブアップはしないから」

僕達は目を合わせ小さく微笑んだ。

不思議だ。今、すぐ木下さんと息が合ってる気がするよ。

敵の敵は味方。っていうのにちよっと近い。いや、遠いか。

とにかく、どんなことでもそれを誰かに一緒にやるって言うのは苦しいを楽しいに変えてくれるんだ。

今の僕は、それを身をもって実感できる。  
だから、

「絶対、負けるもんかーっ!!」

全力で、腹に気合を込めた。

残り時間20分。

ようやく外壁のフルーツを全部食べ終えた。そろそろお腹も辛くなってくる…。

木下さんもがんばってアイスを食べてくれたおかげでその総量は3分の1程度まで下がっていた。

少しペースは落ちてるけどまだいける範囲だ。  
もう何十往復したかわからないほど口に入れたスプーンを中ぶらりに持った木下が余所見をする。

「坂本君はやっぱり早いわね。もうフレークに手を伸ばしてる」  
「何ッ！！ 雄二の奴。どこまで大食いなんだ」

雄二のテーブルを見ると、溶けたアイスをフレークに掛けぐぢゅぐぢゅになった状態で食べていた。

なるほど、本来フレークは牛乳を掛けて食べる物だけどそういうやり方もあったんだね。僕も真似しよう。

「ムツツリー二君。まだいけるかい？」  
「……………問題ない」

一方、ムツツリー二のペアは食べる速度は遅いが一番安定している。ゆっくりであるが順調に消化していつてる。見ていて一番安心できるのはあの2人だと思う。

「明久君。そんなに食べてお腹大丈夫なんですか!？」  
「無理だったらギブアップしてもいいんだからね!!」

遠くから姫路さんと美波の声が聞こえる。  
応援してくれてるのだろうか。すごく嬉しい、…けど、  
それが『別に食べれなくていい。寧ろ諦める』と言ってる気がする  
のは僕の気のせい？

「あの2人。言ってくれるじゃない…」

不機嫌そうに顔を顰める木下さん。何か琴線に触れたの？

「…何のこと、うつぶ」

「吉井君。今は島田さんと姫路さんの事は気にしちゃ駄目よ。…え  
ずいてきてるけど平気？」

「た、多分。まだいけるよ」

一応そう言ってるけど、もう大分お腹が膨れてきた。フレークに手  
を伸ばすのが億劫になってくる。

まだ下にはケーキが残ってるのに。止まってる場合じゃない。

横目で見ると、雄二ペアも平気ではないみたいだね。さつきからど  
んどん苦しそうな顔になってきてる。

テンプレだけど、自分が苦しい時は相手だって苦しいんだ。そう思  
えればまだ頑張れる。

フレークを2人であがつくように口に放り込んでいく。

アイスはもうほとんど溶けてきてる。これはもう最後に飲んでしま  
うしかない。

おかげでフレークが柔らかくなって喉に通りやすい。

「翔子。腹は大丈夫か？」

「……うん。私と雄二のためにがんばる」

「…そうか。無理はするなよ」

そんな会話がふと耳に入った。

あの雄二が霧島さんを心配するなんて珍しい。

残り時間後15分。雄二達はケーキに手を出しはじめていた。

ムツリーニは、交代ばんで片方ずつ休憩しながらしっかりとペ  
ースを維持してる。

僕は目の前に集中してむさぶるようにフレークを食べる、まだ無く  
ならないのかよ！…！

「うっ、…ちょっときついかも」

苦しげに顔を歪ませた木下さんが溜息を吐きスプーンを置いた。

…無理も無い。これだけの量を一心に食べてきたんだから。

十分がんばってるよ。

でも、今は休憩させてあげないと、体調にも影響が出るかもしれない。

「駄目だったら休んで、僕ならまだいけるから」

「そんなわけにはいかないわ。…吉井君が頑張ってるのに、アタシがゆっくり休んでるなんて」

「でも」

「もう時間もほとんどないでしょ。なりふりかまってる暇はないわ。もっと気合を入れていくから」

「…わかった。けど辛くなったら我慢せずに休んでね」

「うん」

そう頷いて木下さんは少し微笑む。それでまた少し僕に元気が湧いた。

お互いを励ましあってなんとかスプーンを口に運んでいく。

今一番ペースが落ちているのは僕達だ。

安定を保っていたムツツリーニアペアがどんどん追い上げてくる。

くそっ、やっぱりきつい。

なんとかフレークを完食し、最後のシフォンケーキ。

木下さんは限界のようでも今は完全に手が止まっていた。

無理はさせられない。元々僕の我侭から始まったんだ。

彼女にはすでに感謝の気持ちで一杯なんだから。後は僕が頑張ればいい。

もう誰もが最初に見せた余裕の表情が感じられない。  
それを見ていた姫路さん達も迂闊に言葉が出なくなっている。  
ここで手を抜いたら絶対に食べきれない。

その時、

「これで、最後だぁーっ!!」

隣から雄二の怒声が聞こえた来た。

まさかあの野郎っ!?

「雄二!! まさかもう食べ終えたの!？」

「ああ、一上がりだ。…うぐ、腹がきついぜ…。先に休憩させてもらうわ」

「……お疲れ様。雄二」

ちっ!?! やっぱり一番は雄二かっ!! なんとなく分かってはいたけど。

だらしない体勢で椅子にもたれかかる雄二と上品に口元をハンカチで拭いて一息つく霧島さん。

なんとも余裕そうなペアじゃないか!! 弱点とかないのかあのバカップルめ。

「あっちゃー、やっぱり早いねあの2人は。ボク達も負けてられないよ」

「……………もう少し…っ!! 諦めない」

雄二が食べ終えたことで逆にテンションが上がって食べるペースが上がるムツッリーニと工藤さん。

ムツツリーニは苦しそうだけど工藤さんはまだ少しだけ余裕の表情を保って見せていた。どこにそんな元気があるんだ。

これは、僕達が最下位、もしくは失敗のおそれが出てきた。こっちもペースアップしなきゃ！！

喉から競りあがってくる吐き気を無視して手をカップに直接突っ込む。

そしてケーキを鷲づかみして無理矢理口に入れた。気分が悪くなってくるけど構うものか！！

後八分！！！！

「ごめんね、吉井君だけ無理させて。今からアタシも食べるから」

「え。…大丈夫、なの…、木下さん、無理しちゃ駄目、だよ」

やばい。言葉を喋るのも大変になってきたよ。

木下さんに無理をさせちゃいけないのに…。

「もう少しで終わるんだもん。代表にできたんだからアタシだってやってみせる！！」

意地とばかりに木下さんはフォークを持ってケーキを小皿に移す。溶けたアイスはすべてケーキに吸収されしまった。

代わりに、ケーキが前に食べたコーンフレークみたいにかなりとろけて柔らかくなっていった。

味なんてもうわからない。ただ、妙に口内に残る甘味が鬱陶しい。

「後五分じゃぞ。いけるか明久ムツツリーニ！！」

「もう少しよアキ！！」

「みんな最後までがんばって下さい！！」

秀吉や姫路さん。美波の歓声の音が耳を通りぬける。  
が、そつち目を向けることはしない。そんな時間も暇もない。  
僕と木下さんは一心不乱にケーキを喉に通した。  
ここまでいけばもうトラウマ物だ。もう一生ケーキなんか見たくない。

後四分っ！！！！

「最後よ。吉井君！！」

「ああっ！！」

「ラストスパートだよっ！！」

「……………応…っ！！」

…口が本能的に物を体内に入れることを拒絶してくる。

無視しろ！！

…胸焼けのような息苦しさが体中を蝕んでいく。

関係ない！！

…喉から競りあがる吐き気が脳にまで渡って思考を停止させようとする。

だからどうした！！

…物を掴む自分の手がまるで悪魔の鎌のように見えた。

上等だ！！

…目の前のシフォンケーキがこの世のすべての毒のように見えてくる。

喜んで、食らってやる！！

思考なんていらぬ。

視覚も必要ない。

聴覚なんて意味はない。

嗅覚なんて使わぬ。



てしまう。

「やったぞ明久。ムッツリーニ！！ 全員完食じゃ！！」

「すごいですみんな！！ 明久君！！」

「やったじゃないアキ！！」

「ぐえつ、美波！！ 今くっ付かれると吐き気があつ！？」

「……………終わった、」

「やったねムッツリーニ君！！ ボク達も完食だよ」

「さすが我らがFクラス。そして最高成績者Aクラスコンビだ！！」

「……………みんな。お疲れ様」

店の中で脇目もなく騒ぎまくるみんな。今だけは店側も何も言わな  
いみたいだ。

空になった巨大なワイングラスの形をしたパフェカップが今は優勝  
杯に見える。

ハイテンションになったみんなの姿を頭だけ横にして眺めた。

正直、僕はもう疲れて椅子から動くのもしんどい半病人状態なんだ  
けど、

それでも、最後にまだやるべきことがある。

今すぐ休めという脳の指示を無視して、僕はゆっくり顔を上げた。

目の前に、優しい微笑を浮べた木下さんがいた。

「…さすがね。吉井君」

「ううん。僕だけじゃ絶対駄目だったよ。みんながいたから、木下  
さんがいたからこそまで頑張れたんだ」

「ふふ、相変わらずね。そういう本音を包み隠さずに言うの。こっ  
ちが恥ずかしいわ」

「バカだから、しょうがないよ」

「そうね。ホント、愛<sup>いと</sup>おしいぐらい最高にバカだわ」



第5話（後書き）

次回でラストです^^^

## 第6話（前書き）

次回ラストとか言ってたが、あれは嘘だ！！

## 第6話

早食いは終わって10分ほど休憩をもらった後、僕達は一つのテーブルの前でスタンバっていた。

どうやら、超巨大ジャンボパフェDXを食べたペアには記念としてツーショットで撮影をしてくれるらしい。

1番手、雄二と霧島さん。

「嫌だ!?! 俺は撮りたくないよはあ つ!?!」

「……ピース」

霧島さんと写りたくないと言った雄二の腹に営底を叩き込んで黙らせた霧島さん。やはり手馴れているな。攻撃に迷いが無い。

撮影した写真には頬を上気させた照れ顔の霧島さんとぐったりと頭垂れた雄二が写っていた。

次、工藤さんとムッツリーニ。

「ほらほら、照れてないで前見ないと」

「……俺は照れてなどいない……っ!?!」

「そういうのはちゃんとボクの目を見て言ってくれないかなー?」

ほら、ピース」

そっぱを向いて鼻血が出ないように顔を上に上げているムッツリーニとその頬をちょんちょんと突付いて遊んでる工藤さん。

二人の姿は親友にもライバルにも恋人同士にも見えるから不思議だ。

現像した写真にはやはりそっぽを向いたままのムツツリー二と巨大なワイングラスの形をしたパフェカップを持って笑顔で前を向いた工藤さんが写っていた。

最後、僕、吉井明久と、…木下優子さん。

「…もつと近づかないと駄目かな？」

「じゃないとバランス悪いじゃない…。ほら、アタシは気にしないから、もつとこっちに寄ってよ」

「う、うん。それじゃあ、…失礼します」

「なんで敬語になるのよ…」

「だってこんなの恥ずかしいんだもん！！」

「アタシだって恥ずかしいわよ！！一瞬で終わるから、さあ、撮るわよ」

「うん」

そして明らかに挙動不審な僕と木下さん。

撮影ポーズの所為で今、僕と彼女は完全に密着状態だった。

こ、これは、ちよつと、まずいかも…、肩は当たってるし頬だって1センチ程度しか離れていない。

手を繋いでいる状態なので木下さんのちよつとした動きでも僕の心臓の鼓動は跳ね上がる。

美波とも、姫路さんとも違う。慣れの所為もあるかもしれないけど、彼女といると僕の胸のドキドキが収まらない。

あまりにも鼓動が五月蠅くて木下さんに聞こえないかと心配するくらいだ。

緊張して全身は硬直するし、焦って言葉が噛みそうになる。結果、僕は黙って木下さんとくっつくしかなかった。

…どうして女の子ってこんなにいい匂いがするんだろう…。

「では、はい、ポーズ!」

デジカメを構えたメイドの店員さんの合図で音も無く最後の撮影が終わった。

受け取った写真を見ると、巨大なパフェカップをお互いの指の付き間を埋めるように、俗に言う恋人繋ぎで持っている僕と木下さんがいた。

二人の顔は誰がどう見ても緊張して固くなってしまっただけ頬は赤くなっている。やっぱりこれはいくらなんでも恥ずかしすぎる!?

安易に他人にはお見せできないものだ。

「お疲れ様じゃ。皆」

「アキ! 明日はウチと早食いするわよ!」

「その翌日は私と食べてもらいますからね!」そしてツーショットで写真を撮りましょう!」

「嫌だよ!? もう当分甘いものは見たくないから!」

僕達を労ってくれる秀吉と傍恐ろしいことを言ってくれる美波と姫路さん。

”あのパフェ”を後二回食べるなんて拷問にも等しい所業だ。

パフェを食べがっていた二人には申し訳ないけど、今回だけは僕も遠慮したかった。

「なんだかんだ言っても今日は楽しかったわ。…ありがとうね。吉井君」

「木下さんに楽しんでもらえて僕も嬉しいよ。また明日学校でね」「うん。また明日」

そして、大変だったけど、すごく充実した一日が終わり、僕達は帰

路についた。

例の写真は今僕のサイフの中に入っている。

ある意味これが今日一番の思い出だ。恥ずかしくて緊張してどうすればいいかわからなかったけど、木下さんと二人で写れるなんて最高に嬉しかった。

今だにあの時を思い出すと顔がニヤけてしまう。　　ってこのままじゃ姉さんに不純異性交遊がばれてしまうじゃないか！？早く赤くなつた顔を元に戻さないとまずい。

……この写真は封印しておこう。今の僕には目にも心臓にも悪い。

「ああ…、僕、今日まともに寝られるかな…」

けど、自室や授業中とかに隠れて見るぐらいいいよね。

僕はこの時、自分でも分けが分からないぐらい舞い上がっていた。

これで終われば、ハッピーエンドだったのに、つくづく、神様っていうのは残酷だ…。

その翌日。この三枚の写真は文月学園で校内新聞のトップ記事に堂々と載せられていた……。



「なんでも何も、あの店は如月グループの系列店だよ。ウチの学園の生徒が目立ったことをすれば当然アタシの耳にも入ってくるさね」  
「……………あの店って如月グループのやつだったのっ!？」

そんなの一言も聞いてないんだけどっ!？

「ああ。例の早食いも以前如月ハイランドであったウェディング体験の失敗を取り戻すことが目的だったらしいね。一応ウチの学園の全校生徒に広告が届けられる手筈になっているはずだけど、一部手違いあつて届いていないみたいだね」

なるほど、だから須川君みたいなモテない人間があんなものを持っていたのか…。

まったく召喚獣といい、如月ハイランドのウェディング体験だったり、今度はメイドレストランか。…如月グループの考えていることは常人には理解できない域に達している。

顎に手を当てたまま何かを考えていた雄二は、ふと顔を上げて学園長に視線を向けた。

「それはわかった。だが解せないことがある。確かに同じ如月グループなら俺達が早食いで完食したことも簡単に知れるだろう。学校にとつても店側にとつても相互利益になつていい宣伝になるだろうからな」

「相変わらずこういう頭の回転は速いねお前は」

「だが、その写真が校内で記載されているのはおかしい。何もそこまでする必要なんて無い。あれじゃただ学園の生徒をびっくりさせるだけだろうが」

「おや、よくわかつてるじゃないか」

「…はあ？」



確かにあの校内放送は少しやりすぎな気もする。

でも、何の罪もないAクラスのみなまで巻き添えでお返しされるなんて、それでも学園の長かつ!!

僕達の怒声もまるで涼しげな表情で無視するババア。なんて奴だ。

「アンタ達とはかく、Aクラス連中は満更でもないみたいだけどね」

「そんなわけないじゃないですか!! 自分の仕返しを正当化しないで下さい!!」

「真実は自分の目で確かめなクソガキ共、もう授業が始まるよ。サボったら許さないからね」

「くそっ!!? 最初は鉄人の授業だ。戻らないとまずい」

「ええーっ 今戻ったら確実に殺されちゃうよっ!!」

「あいつらも授業中は襲ってこない。なんとか休憩時間をやり過ぎていくしかねえ」

全身から染み出る冷や汗が止まらない。どうして昨日がんばってパフェ食べたのにその所為で襲われることになるの!! いくらなんでも理不尽すぎる...っ!!

今学園長を殺つても根本的解決にはならないので、「覚えてろよクソババアー!!」と決まり文句を言い放って僕達は学長室を後にした。

その後、差し足抜け足忍び足でFクラスに入ると、暴風のように隠しようの無い殺気が一斉に僕達へ向けられる。怖っ!? このクラス怖っ!?

ムツツリー二は今日は体調不良で欠席らしい。いろんな意味で運のいい奴だ。

1時間目終了



「」

「まさに戦争ね」

「というよりは重犯罪者を捕らえる警察みたいです。すごい連携と綺麗な号令ですけど、みんなこういう時は息ぴったりですね」

「その調子とやる気を体育祭でも出してくれればいいんじゃないかな」  
「」

そして、並々ならぬ苦行のすえ、僕達はなんとか4時間目の授業を迎えることが出来た。

「はあ、一先ず休憩しよう…」

昼休み。息も絶え絶えになりながら、新校舎側の屋上まで逃げた背後を見て僕は追っ手がいないことを確認すると固いコンクリートの上で静かに腰を下ろした。

なんとか逃げ延びたか…。これも雄二の尊い犠牲のおかげだ。

二人で廊下を駆け抜けていた途中、このままでいつか捕まってしまうと感じた僕はその場で雄二に足蹴りをかけた。

それが見事に成功して雄二は転倒。そのまま僕に恨み言を叫びながらFクラスへ連行された。今頃は異端審問会で裁きを受けているだろう。

残念だったよ雄二。君の犠牲は無駄にはしないからね。

「でも、これからどうしよう…。」

虚空に向かつて一人言を呟く。

僕の手には念のため隙を作って持って来ておいたお弁当があった。けど、この殺伐とした状況でゆっくりと食べるなんて到底出来ない。

どこへ行けば助かるかと頭を捻っている、ふいに屋上の鉄扉が金属音を出して開いた。…もう来たのかっ!!

「やばい…、一先ず旧校舎側の屋上につ!？」

ここで捕まるわけには行かない!! なんとか隙を　　っ、

「やっと見つけた　　って何でいきなり戦闘体勢になってるのよ…。」

「え…、木下さん…?」

予想とは打って変った以外な人物に思わずキョトンとする。

屋上に上がってきたのは昨日僕のパートナーと一緒に巨大パフエを食べあつた。

木下優子さんだった。

何やら急いで来たみたいで肩で息を整えている。

「Fクラスが来たのかと思ってつい、それよりどうして木下さんがここに…?」

「アタシは…吉井君を探してたのよ」

「僕?」

「そうよ」

木下さんは険しい表情で僕の質問に首を縦に振った。

なんで今彼女が僕を探そうとするんだろっ…。

そこで僕はあることを思い出した。

そつだ！！ 朝も言ったとおり今回の件は木下さん達にも当然煽りを受けている。

Aクラス内でも良からぬ噂が流れているかもしれない。確実に何か悪影響はあっただろう。

前回、シヨタコンノーパン変態女という大変不名誉な噂を流されて彼女は憤慨していた。

これは、あの時の焼きまわしなのかもしれない。

公園で葉月ちゃんの風船を取ってあげた時、彼女は何て言った？

『ただしっ！！ もっと悪い噂が流れたりしたら、…生かさないわよ？』

…僕はその場ゆっくりと膝をついて頭を固いコンクリートの地面に擦りつけた。

「……なんで戦闘体勢の次は土下座になるのよ」

「せめて、潔く散ろうと…」

この件に彼女は関係ない。怒ってるのは当然だ。

ならば僕は黙って彼女の制裁を受け入れよう。Fクラスのバカ連中に殺されるのはごめんだが、可愛い女の子に殺られるのなら、それはそれで本望だ。

それが木下さんとなれば、悔いはない…。

「あのね。…何を変な勘違いしてるか知らないけど」

土下座している僕の前まで来た木下さんは呆れたように小さく溜息

を吐きながら口を開く。

「アタシは、吉井君を助けに来たんだから」

第7話（前書き）

まだ続く

## 第7話

木下さんが聞いた話によると、新旧校舎と新校舎では僕を捕まえようと異端審問会が徒党を組んで廊下を徘徊しているらしい。

「休み時間になった途端に旧校舎から物凄い怒声が聞こえてきてびっくりしたわ」

「ははは、そういえば召喚獣勝負とかいろいろやってたからね…」

あの音新校舎まで響いてたんだ…。

Fクラスの中だけでも大音量だったからまあ分からないでもないけど、

僕達は一階の空き教室で待機していた。

二階より上は今、異端審問官がうるついている筈だけど、雄二の肅清の所為か人員は少し減っていた。

おかげで僕達は苦もなく一階に降りてこられた。

Fクラス連中はまだ四階と三階に集中していて一階は手薄だ。

おまけにこの教室は鍵も閉められるし、困ったときの安全圏になる。

「ここなら安全だね。はあ…、やっと安息を得られた気がするよ…」

適当な机からイスを引き抜いてそこに腰を下ろした後、安堵の息が口から漏れた。

「相変わらずFクラスは無茶してるわね」

「今回は100%あの学園長の所為だよ…!」

「…どういふことなの?」

静かになった空き教室で僕は木下さんにこれまでのことを説明した。学校で何やら噂されていたこと、Fクラスの教室に入った途端奇襲を受けたこと、校内新聞の記事を見つけ、それを学園長に聞いた。したらあっさりと前の校内放送の仕返しだと認めたこと。

「あの放送の所為だったのね…」

『ババア長×鉄人熱愛発覚!!』放送は木下さんの悪い噂を消すためにやったことだから本人も難しい表情で考えていた。

「巻き込んでごめん。霧島さんや工藤さんは何か言ってた？」

「あの二人は特に何も、代表は寧ろ嬉しそうだったし、愛子も自身満々で会話の餌にしてたわ」

「そうなんだ…」

まあ元々霧島さんは雄二LOVEだし、工藤さんもこの手の方法ではさすがに動揺しないか…。

本当この学校の女子はみんな肝が据わってるよ。

「木下さんは？」

「アタシッ!?!? べ、別になんてことないわよ。こんな程度の噂で同様するほど柔な神経してないわ!?!」

「そ、そう…」

ぷいっと明後日の方向を向きながら豪語する。

そういう割に顔は赤いし口元は若干震えてるけど、保身の為追求はしないでおこう。

話題がなくなると、途端に静かになった。

気持ちが悪く落ちて着くと、今度は木下さんと二人きりという状況に胸が

ドキドキしてくる。

僕はなんだか恥かしくなって彼女から視線を逸らし教室の前方の扉を見た。

「…静かね…」

「うん」

木下さんがポツリと呟いた言葉に僕は相槌を打つ。

僕達の真上ではFFF団が今でも血眼になって僕という獲物を探して右往左往してるだろう。

そう考えると、この静けさは外界から遮断されたような変な雰囲気がある。

そして、これからどうするかを考えていると、

「これじゃあ、まるでアタシと吉井君が逢引してるみたいだよね…」

…木下さんがポツリと呟いた一言に僕は心臓が飛び出すかと思うほど驚いた。

「逢び…っ!?! げっほげっほっ!?!」

「ちよっ!?! 何咽てるのよ。冗談に決まってるでしょ!?!」

「う、うん。だよ。ははは…」

ごめん木下さん。その冗談は僕の心に悪いよ…。

「もうびっくりさせないでよー。僕ドキドキしちゃったじゃないか」

「そ、そう…、ドキドキするんだ…」

「そりゃ木下さんすごく綺麗だもん。僕じゃなくても誰だって嬉しくなるよ」

「…まあ、いいわ」

あれ…、なんか僕選択自問違えたかな…。

次は何を言うべきか頭の中で言葉を取捨選択していると、  
今度は、

ぐ…、

という間抜けな腹の音が木下さんのお腹から鳴った。

「う…」

咄嗟にお腹を押さえる木下さん。でもその行動は寝坊した後遅刻の心配をするぐらい手遅れだよ。

「お昼食べてないの？」

「…ええ、四時間目が終わってからずっと吉井君を探してから、結局食べそびれちゃったわ」

僕を探す為、というフレーズに思わずドキっとするがそれと同時に申し訳ない気持ちになる。

今から学食に行っても席はもう空いてないだろうし、購買は味気ない惣菜パンしか置いてないだろう。

僕が持つてるのはこのお弁当一つだけだし…、  
ってあるじゃないか。

「ねえ木下さん。よかつたらこれ食べてよ」

そう言って、僕はずっと持ち歩いてきたお弁当を差し出した。

「でもこれ吉井君のやつじゃ…」

「僕はいいんだ。でも木下さんが僕を探してご飯食べれなかったなんて、そっちのほうが僕にとっては大事おめこだから」

「…いいの？」

「勿論だよ。…その、前に僕宛にお弁当作ってもらったお返しってことで」

途端に気恥ずかしくなりまた視線を余所に向ける。

「…ああもう僕のバカ！！　こういう時こそ男らしくビシッ！！としなきゃいけないじゃないか！！」

お弁当が入った巾着を渡す瞬間に、彼女の柔らかい指先に僕の手が当たって心拍数が急上昇する。

やばい。何がとは具体的に言えないけど、とにかくやばい！！

巾着を受け取った木下さんは数秒ほどそのままの体勢で硬直していた。

「あ、あのだ…」

そして、今度は急に体をもじもじさせて僕と視線を合わせたり逸らしたりを繰り返す。……その照れた表情が………  
………すごく可愛かったり………。

「な、何？」

「このお弁当なんだけど…」

「遠慮ならいらないよ、僕こつ見えても絶食は得意だから」

嘘ではない。何しろ姉さんが来るまで水と塩と油だけで生きてた人間だ。

今更お弁当の一つや二つ食べなくなつて全然問題ない。

こんなことでも気を使ってくれるなんて、やっぱり木下さんは優し

いな。

どうやったら彼女にお弁当を食べさせて上げられるか悩んでいると、唐突に彼女は口を開き。

「これ、アタシと一緒に食べない……?」

今度こそ、僕は頭に上った血を我慢できず、鼻から鮮血のアーチを描いてぶっ倒れた。

机を一つ引つ張り出してそこに僕と木下さんが向き合う形で椅子に座る。

形だけ見れば、昨日早食いの時のテーブルの配置と一緒に位置だが、机の上にあるのは超巨大ジャンボパフェDXじゃなく、今日僕が作って持ってきたお弁当……。蓋を開き、木下さんは普段僕が使っているお箸を握って今朝少し早起きして作ったから揚げを口の中に入れた。

「吉井君って本当に料理得意だったんだ……」

「ま、まあね……。これでも家では毎日僕がご飯作ってたから……」

もう、この箸は洗わなくていいかもしれない。帰ったら無くさないようラップで包んで大切に金庫に入れて保管しておかなくちゃ

「何唸ってるの…?」

「ちよつと金庫の値段を相談…いやいやっ!? こっちの話!!  
気にしないで」

「???」

「そ、それより、どうかな…僕のお弁当の味は」

「…美味しいわ。女として悔しいくらい…」

「そこまでっ!?!」

僕の料理は木下さんのプライドを一部損ねてしまっほどのものだったのか…。

僕自身レパートリーは多いけど一品一品の質で言えばそこら一般家庭と変わらない程度だと思っただけど、

今どきの女子高生は料理ってあんまりしないんだろうか。

美波は…美味しかったな。姫路さんのは今は考えないおこつ。

味で言えばこの前木下さんが作ってくれたお弁当のほうが僕は万倍美味しかった。

今日作ったのは鳥のから揚げ、無農薬のポテトサラダ、ちよつと奮発して買ったいい卵を使った玉子焼きにインゲンをベーコンで巻いた4つだ。

あとは白いご飯。今回は梅干なし。

木下さんは玉子焼きを箸で上手に半分に切って綺麗な動作で口へと運んだ。

「アタシ、どれくらい食べたらいいの?」

「勿論好きだけ食べていいよ。僕は余り物で十分だし、元々木下さんに上げたものだからね」

「そ、そう…」

最初から僕はもうこのお弁当を食べるつもりはない。  
考えたら当たり前だろう。

木下さんが口をつけた箸で余ったお弁当を僕が食べるなんて、とんでもない背徳行為をしているみたいじゃないか。

思春期の中学生みたいな発想かもしれないけど、僕はそれで構わない。

羞恥と歓喜で身悶えて可哀想な目で見られるよりは、名残惜しいけど、今は我慢しなきゃ。

もはや崩壊寸前の要塞の如き脆い僕のプライドだけど、彼女の前で格好悪い真似はしたくない。

「……………」

僕が思考の海に落ちていると、木下さんは箸で半分になった玉子焼きを摘んだまま固まっていた。

「あれ。もしかして味変だった…?」

「うっん、そうじゃなくて…」

煮え切らない表情のまま首の下ぐらいまで持ってきた箸を宙に浮かせたまま口に運ぼうとしない。

…何か気になることでもあったのかな…。

少し心配になって僕も素手でお弁当箱の中に入っている玉子焼きを一つ摘もうとする。

が、その前に木下さんの持った箸が動いた。

…僕の口元に向かって、

「…あ、あーん」

「  
」

「な、何よ。早く食べなさいよ」

「ごめん木下さん。僕の頬つぺたを掴ってくれないかな。千切れるぐらい思いつきり強く。気絶するぐらい」

「は？」

そうか。これは夢なんだ。

じゃなきゃ木下さんが僕の口元に向けて『あーん』なんてするわけがない。

まったく。なんて都合のいい白昼夢を見ているんだ。

いくら現実でモテないからって、夢で幸せになるうたなんて、

「じゃあ、えいつ」

「にぎぎぎつぎぎいぎぎつ！？ 痛い痛いはいよきのしたさんっ  
！？」

訂正。これは現実だ。

真っ赤になった頬を摩りながら改めて実感した。

「ななななっ！？ 何をしてくれやがってるんですかーっ！？」

「焦りすぎて日本語がおかしくなってるわよ。それに吉井君がやれ  
って言ったんじゃない」

そっちじゃない！！

「い、今、あーんって…」

「…嫌なの？」

「え、えー。…嫌じゃないっていうか、寧ろ最高って叫びたい気分  
なんだけど…、どうして？」

「べ、別に、こういうのを一回ぐらいやってみただけよ…。  
いいでしょそれぐらい!!」

顔を真っ赤にしながら肩を震わせて声を荒げる木下さん。

…女の子ってそういう願望あるんだ…。

将来の夢はお嫁さん。なんてマジメに答える人も世の中にはいるし、  
女子って以外と夢見がち？

「で、嫌なの？」

「喜んで、お受けいたします」

断わる要素が見つからない。

「じゃ、じゃあ行くわよ」

「…っん」

そして、どんどん木下さんの顔が僕に近づいてくる。

駄目だ。腰を引くなっ!?!? 何をびびっているんだ僕はっ!?!?

重度の緊張で足が震える。目の前の光景に頭がいつぱいになって教  
室の外から聞こえる音がやけに遠く感じた。近づいてくれる木下さ  
んの目から視線を外せない。

彼女の箸は徐所に僕の口元まで来て、

「あ、あーん」

「あーん…」

パクッ

…味なんてさっぱりわからない。

強いて言うならちよっと鉄っぽい味が鼻に登っていくのを感じた。

「お、美味しかった…?」

「…美味しいよ」

多分ね。

「そ、そう」

「母さん。僕は今日ほど貴方に感謝した日はありません。僕という存在を生んでくれて本当にありがとう…」

「何に祈ってるのよ……」

『吉井はいたかつ!!』

あーんの場面を何度も頭の中で再生し、心地いい余韻に浸っている途中、

その声に僕達は鞭打ちになったように肩を震わせた。

「もうここまで来たのかつ!!」

「…みたいね。でもここは鍵も閉まってるし大丈夫なはず」

木下さんが冷静に状況を分析する。

そうだ。ここはちゃんと両方の扉に鍵を掛けた。常識的に考えて鍵の掛かった教室にいるわけがないと判断するはずだ。

やつらだつて簡単には入つて来れな。

『む、ここは鍵が掛かっています。どうしますか須川会長』

『うむ。壊せ』

常識なんて言葉Fクラスには通じなかった。

直後、ガンガンッ！！と鈍器で叩いたような打撃音が教室中に響いた。

「やばい。あいつらここに入ってくるつもりだよ！！」

「ど、どうしよう…っ!？」

急いでお弁当を仕舞い脇に抱え込む。

どこか隠れられる場所っ!？と言ってもここは唯の空き教室。設備的には普通の教室となんら変わらない。

「どこかないのっ!？」

「あるのは机とイスと教卓と黒板と、ええい、いつそ窓からっ!？」

「あそこはっ!?!」

咄嗟に木下さんはある方向に向かって指を指す。

あれだっ!?!

言うなり僕達はダッシュで駆け込む。

そして、バンっ!?!と扉をぶち破る音と共に僕らの視界は真っ暗になった。

『む、いない』

『会長。ここに机と二つの椅子が、もしかすると誰かがここでお昼を食べていたのかもしれませんが』

『何ッ!?! ではさっきまでここで誰かがお昼と食べていたと言っことかっ!?!』

『状況からして明らかに密会です。逢引です』

『許せん！！ モテない男達の団結力を見せてやる。行くぞ！！』  
教室で少し籠った感じのする須川君と、これは福村君だな。の声が聞こえた。  
焦って机をそのままにして来てしまったのはミスだった。

「……………ちよ、狭い」

「我慢してよ…っ 今動くが見つかつちゃうからっ」

そして、僕達は掃除用具が入ったロッカーに身を潜め息を殺していた。

咄嗟の判断とはいえ、箒やらモップが入ったロッカーは狭いし臭い。それに僕に密着しながらもぞもぞと動く木下さんの所為でさっきから鼓動が急速稼働しっぱなしだった。

煩惱を何とか追い払い縦に細長く並んだ空気穴から教室を覗く。開けっ放しになった扉から、何人もの異端審問官が廊下を翔けていくのがハッキリ見えた。

「あいつら…、もう一階まで来たのか、雄二の制裁は終わったのか…？」

「ねえ、どうなってるの？」

「Fクラスが一階まで攻めてきたみたいだ…。今すぐ出ると見つかるかもしれない…」

「えー…、まだここにいるの…」

「せめて廊下の様子が詳細に分かればいいんだけど」

偵察や盗聴に長けているムツツリーニは今日はいない。

そつだ。携帯だ！！

美波と姫路さん…、はやめておこう。また別の波乱が起こる気がする…。

雄二はもういない、となれば最有力候補は秀吉だ。  
けど、秀吉は携帯を持っていない。

雄二にかけよう。

雄二も教室に連行されているはずだから、もしかすると誰か変わりに出てくれるかもしれない。一応僕の名前は雄二の携帯にも登録されているはずだから万が一FF団に見つかりと本末転倒なので今回は非通知で掛ける。僕だってわからないように少し声質を変えなと。それで電話に出た向こうの誰かに秀吉に代わってもらおうに言えばいい。

真つ暗のロッカーの密室空間で偶に触れる僕とは違う柔らかい肌に心拍数が跳ね上がるも、めげず開いてる手をズボンのポケットに伸ばす。

「きゃっ!?! どこ触ってるのよ!?!」

「見えない。僕には何も見えないからね!?!」

一体どの部位に触れたのか非常に興味深いが今はやめておこう。  
悪戦苦闘しながらも、なんとか携帯を取り出せた。  
液晶画面の中の電話帳から『坂本雄二』にプッシュし耳に携帯を当てる。

ブルルルルルッ

ガチャ

『もしもし? すまぬが雄二は今電話が出られぬ。代わりにワシ、  
木下秀吉が応対するが、一体どなた様じゃ?』

「もしかして、秀吉?」

『まさか明久か? お主今何処におるのじゃ。雄二が教室で吊るさ

れたまま上半身裸でラクガキ塗れになって気絶しておるので驚いたぞい」

ビンゴ！まさか直接秀吉が出てくれるなんて！！  
そして、さらば雄二。君の事は忘れない…。

「今の声、まさか秀吉っ!?!」

「うん。救援を頼もうかと思って」

「なんじゃ、姉上も一緒なのか」

「そうなんだけど、今異端審問会に追われてるんだ…。助けてくれないかな秀吉」

『む、状況はわからんが、了解じゃ。ワシはどこへ向かえばよいのじゃ?』

「一階に扉が開けっ放しの空き教室があるんだ。そこまで来て、机一つに椅子が二つ置いてあるのが目印だから」

『明久よ、島田と姫路がいる身で姉上と逢引とは…、お主も剛毅じゃな』

「逢引じゃないわよ!!」

「おわあっ!! あ、切れちゃった…」

目に痛いぐらい光っている液晶画面には通話時間1分23秒とだけ映し出されていた。

「あいつ…、あんだけやってもまだ懲りないみたいね…、いい度胸じゃない…」

僕の後ろで呪詛のようにおっかない言を呟く木下さん。

ごめん秀吉…。今度なんか奢るから。

「とりあえず秀吉が来るまでここにいようか…」

「ええ。はあ、お弁当まだ全部食べてなかったのに」  
「お昼休みももうすぐ終わる…。結局僕が食べたのって玉子焼き半切れだけだね」

心はそれでお腹一杯なのは秘密だ。

「やっぱりお腹減ったんじゃない…。今食べれば…。？」  
「ロッカーの中じゃ食べれないよ…。それに体が動かせない、今でもギリギリなんだから、お弁当持った僕の右手動かせないし」  
「……………」  
「あれ？」

急に右手が軽くなった。

「ほら、これで食べられるでしょ」  
「いや、ほらって言われても…。なんで木下さんが僕のお弁当を持ってから揚げを僕の口に入れようとしてるのかって突っ込む箇所が多すぎる！！」  
「気にしないで、ほら、食べなさい」

有無を言わせない勢いで僕の口に柔らかいから揚げが放り込まれた。うん。美味しい。

だけど、場所が場所なだけにちつともロマンチックじゃない。

「なんか妙な気分だ…。嬉しいんだけど湿っばいこの気持ちはなんだろう？」

「アタシはちょっと面白くなってきたけどね。はい次、あーん」  
「あーん」

木下さんに食べさせてもらうことに抵抗が無くなっている自分がい

る。

いいのかなこれで…。

薄暗いロツカーで、そんな単調な作業が数回続いた。

秀吉まだかな…。

「って僕ばかり食べてるけど、これ最初は木下さんにあげたやつじゃないか」

「もうほとんどないけど」

「じゃあ後は全部食べていいよ。僕はお腹いっぱいだから、あ、そうだっ」

ふと天啓が閃いた。

僕ばかり食べさせてもらうのは忍びない。

ここは木下さんにも是非僕から食べさせてあげようではないか。

「ちょっとお弁当貸して」

「何するの？」

「いいからいいから」

適当に誤魔化して木下さんからお弁当をひったくる。

そして少し身じろぎしてスペースを作ってから箸を器用に使ってご飯を少し摘んだ。

「はい木下さん、あーんして」

「ばっ!?!? 何するのよ!?!」

声が外に漏れないか心配になるぐらいの音量で叫んだ。

暗くて見えないけど、きつと顔も赤面してるだろう。

ふふふ、だかもはやそんなことでは僕の鉄の心は響かないぞ。

「だって僕はっかり恥かしい思いするのは割に合わないし、せつかくだから木下さんにも味わってもらいたいんだ」

頑張つて後ずさるうとするけど、残念ながら後ろは唯のロッカーの壁。

逃げ場なんてない。

彼女がわなわなと震える度に、逆に僕の感情は高ぶつて来ていた。

ふ、ふふふふ。      なんか僕、すごくいけないことしてる気分になつてきたよ。

「な、ななな…、本気っ!？」

「本気も本気。はい。あーん」

「……………」

数秒ほど箸が宙を漂つたまま、やがて何かが先端に触れる感触が指先に伝わった。

やった!! 木下さんに食べさせられた!!

達成感に心を躍らせる。

それと同時に、ぎいー…と子気味悪いを立てながら勝手にロッカーの扉が開いた。

「……………」

「…いや、なんとも」

お弁当を片手に持つて箸を木下さんに向けている僕。

そしてその箸の先を口に咥えたまま硬直する木下さん。

ロッカーを開けた主。秀吉はそんな二人を見て、なんとも言えない複雑な表情をしていた。

「斬新な逢引じゃな」

「「違——うっ！——！」

顔から火を吹くほど恥ずかしかった

## 最終話

「まったく、とんでもない目にあつたわ」

「…ごめんなさい」

「何故ワシまで…」

腕の関節をぎしぎし痛ませながら僕と秀吉は地べたで頂垂れていた。まったく、あの関節技は美波にも引きを取らない威力だった。

今時の女子は関節・プロレス・柔道技が必須科目なのか。極められる男子（主に僕）にとってはいい迷惑だ。

ぶつぶつと二人で文句を垂れ流していると、目の前からギロリと猫の眼光のような鋭い視線が突き刺さった。

「何？ 文句あるの？」

「いえいえありません（ぬ）」

このタイミングで苦情なんて言えばイコール地獄への片道切符で一案内されてしまう。

迷いなく跪く僕達を見て、木下さんは疲労の嘆息を漏らした。

「もういい…。それでこれからどうするか決めてるの？」

「ええつと、とりあえず放送室に行こうかと思ってるんだ」

「放送室？」

姉弟の言葉が重なった。

「うん。前にもしたけど、悪い噂はもつと別の噂で消しちゃえば良いんだよ。木下さんの時と一緒に、ワンパターンだけどね」

「ほづ…」

「でもあの時は根も葉もない噂だったけど、今度は写真っていう確かな証拠があるのよ？」

「それにこういった噂は本人が否定すればするほど返って信憑性が増すからのっ」

「そうだね。だから、今回は原因を別の人間に摩り替えようと思う」「何それ？」

「確かに僕と木下さんはパフェと一緒に食べたけど、それを実際に見たのは霧島さんと工藤さん、それに秀吉達だけだ。他には誰も見てない」

「つまり、あの写真は誰かが勝手に捏造した物だと放送を使って誤報を流すということかの」「うん」

校内新聞では載ったけどあれの出所を知っているのは今のところ僕らと学園長だけだ。

だから、これは学園長が面白半分でやったイタズラだと放送で流す。僕がモテないのはFクラスでもすでに周知だからすぐに勘違いしてくれるだろう。

「でも放送室は普段鍵が掛かってるわよ」

「最初はそれだね。時間もほとんどないし、早速動かないと」

「待って、アタシにも考えがある」

「何じゃ？」

「秀吉。今すぐ服を脱ぎなさい」

「「え？」」

急にとんでもないことを言い出した木下さん。

「「どうしてじゃー!？」」

「そ、そうだよー!! 秀吉は女の子なのにこんな所で着替えなんて」

「いや明久。それも可笑しいぞい!!」

「吉井君の発言は今では置いとくとして、早くしなさい。アタシも脱ぐんだから」

「えええーっ!?」

今度こそ見つかる危険性を無視して叫んでしまった。

どうして!?! 何で急に木下姉妹のヌードが始まつてるの!?!

今は携帯のカメラしかない!! 画質が悪いじゃないかそっ!!!

見たら明日から学校来れなくしてやる、という脅しを掛けられ僕はまたロッカーに押し込まれた。

勿論空気穴には何重にもガムテープが張られている。

おかげでとても息苦しかった。

二人のあられもない姿を見れるなら、と希望を抱いてロッカーを開けようと何度か考えたけど、やっぱり怖いので実行には移せなかった。

「はい。出ていいわよ」

と、外から木下さんのお許しが出た。

もう薄暗い鉄の箱はコリコリだ。僕は何か重たい物から解放されたような清清しい気分で扉を開く。

はあ、ようやく美味しい空気を…、

「あれ、何も変わってない?」

改めて目に入った姉妹の姿は、パツと見の外観はまったく変化していない。

何してたんだろう。

強いて言うなら秀吉の胸がちょっと大きく

「まさか…」

「（秀吉）アタシが優子よ」

「（優子）ワシが秀吉じゃ」

一瞬、実は僕はこの瞬間とんでもない映像を見てしまい。それを脳が処理し切れなくて安全の為、健康上害のないものに変換されて見せられているのかと錯覚した。

秀吉が普段とは明らかに違う高い声で優子と言った。

木下さんが風邪を引いた時みたいな喉の低い声で秀吉と言った。

これは、あれだ。

二人はまた入れ替わったんだ…。

「こうしてみると、本当に見分けつかないね」

「双子じゃからな（だからね）」

「言葉までまったく一緒だ」

ご丁寧に髪型まで変えて二人は完璧に成り代わっていた。

親ですら見分けられないんじゃないかってぐらいよく似ている。

がんばってこの二人を見分けられる練習をやるうかと、ふと本気で考えてしまった。

「でもどうしてまた入れ替わったの？」

変装した本来の目的を秀吉（中身は木下さん）の方を向いて尋ねた。

「これから秀吉にはアタシと吉井君の囿になってもらう」

「囿っ!？」

「ええ、秀吉はアタシと吉井君が仲良く話している状況を作っても

らう。その隙にアタシ達は職員室から放送室の鍵をもらって放送室に行く」

「なるほど」

「吉井君の声真似は当然できるわよね？」

「可能じゃが…、本当に大丈夫かのう…」

「アンタはとにかくFクラスの連中を引きつけてくれればいい。後は全部こつちでやるから、それと、前みたいに余計のことはしないこと、いいわね？」

「むっ、了解じゃ」

木下さんの姿をした秀吉はいそいそと教室を出て行った。

改めて思うけど…やっぱり秀吉も普段から女子の制服を着るべきだよ。

その方が絶対可愛いのに。

秀吉に続き少し遅れて僕達も教室を出た。

職員室は一階だから場所も近い。

僕達は物陰や階段の踊り場に身を潜め、慎重に進んでいく。

「そつなのよね」

途中、先行していた木下さん（秀吉）がそんなことを言い出した。

「吉井君はどう思う？」

「…吉井だどっ!?!?」「…」

僕の名前が出た途端、廊下を徘徊していた異端審問官の視線が一斉に秀吉に集中する。

よし、作戦通り!!!

場所的に秀吉の位置は死角になっていて姿は見えない。

一人二役をこなす秀吉はまるで僕が追われていることを露とも知らないかのようにのほほんと談笑していた。

「僕はそれがいいね」

「でしょ!!」

「……秀吉の奴、何を話すつもりかしら……」

「さ、さあ……」

「やっぱり多少お金がかかってもちゃんと結婚式は挙げたいよね」

「もう吉井君ったら、照れるじゃない」

「「なあつ!?!」」

「「「何いいいつ!?!?!?!」」」

未恐ろしいことを校内で振りまいていた!! 　　ってかまださっきのこと尾を引いてたの!?!

秀吉の中の僕達がパラダイムシフトしてるよ!!

絶句する僕、そして羞恥か怒りか、あるいは両方の感情を爆発させる寸前まで顔を赤面させた木下さんが今にも秀吉に突っかかるうと片足を上げ始める。

「何やってるのよあいつー!!」

「待って待ってっ!?!?　ここで出たら作戦がパーになっちゃっうよ!」

今木下さんが出たら、今度は同じ顔が二人出ちゃって余計パニックになるか、学園にドッペルゲンガーの怪談が生まれてしまう!! 　　なんとか僕は体を張って彼女を羽交い絞めして動きを封じる。

言いたいことは一杯あるけど、今はそんな状況じゃない。

が、そんな僕の考えとは裏腹にお姉さんは尚も二階に消えた秀吉を追いかけてようと暴れる。

「アタシにはあつちのほうの問題なのよ!!」

「後でっ、お願いだから後でやってくださいお願いします!!」

「くっ…、覚えてなさいよあのアホ弟め…」

そして必死に懇願してなんとか怒りを納めてもらった、と思う。

秀吉とは、後でじっくりと話し合わないといけないね。

大変な事がもう一つ増えてしまったが、その分Fクラスは怒り心頭中だ。

「…吉井を殺せーっ!!」

「いや、殺すだけじゃまだ生ぬるい!! 死ぬより辛い目に合わせ  
てやれ!!」

「火あぶりだあーっ!!」

「奴の臓器を引きずり出して校庭に飾ってやる!!」

ひいつ!! みんな物騒すぎるよ!!

でも連中の目を引きつけることに成功した。

もう絶対成功させないと僕の命はない。文字通り風前の灯だ。

秀吉を追ってすっかり人がいなくなった一階で僕らは放送室の鍵を  
拝借した。

そしてその足ですぐに放送室の向かい、扉を開け機材をチエックす  
る。

「吉井君。使い方はわかるの?」

「前に雄二が弄ってるのを見たからなんとなくだけど、…こんな感  
じでいいと思う」

試しにマイクを手のひらで叩くとポーンという振動音が響いた。  
これで大丈夫だ。

後はスイッチを入れて誤報を流せばっ！！  
マイクのスイッチを入れ僕は一つ咳払いをする。

『え、えー…、聞こえますかー？』

「吉井の声がするぞ」

「奴め、放送室にいたかつ！？」

廊下からそんな声が聞こえてくる。  
通信は問題なく通っているようだ。

扉は鍵を閉めテールでバリケードを作って固めたので当分破られることないだろう。

気にせず、僕はマイク越しに言葉を繋いでいく。

『みんなにはまず最初に言いたいことがあります』

「何だ何だ？」

『あの写真は偽者です。あれはお茶目な学園長がイタズラ心でやったことで僕はまったく関係ないんです』

「なんだとお！？」

「まあ、確かに吉井が木下姉と一緒にパフェを食べるなんて可笑しいよな」

「でも前はお弁当作ってもらってたぞ」

ちっ、痛いところをつー！！

何とか巻き返さないっ！？

『だからみんなも騙されないで、僕達は学園長にからかわれているんだー！！』

「そうだったのかー！！」

「あのババァー！！！！」

「俺の大事な友達を痛めつけやがって！！ 今度学園長室に爆竹放

り込んでやる!!」

その大事な友達を痛めつけようとしたのは他でもない君達なんだよ？

けど、まだ完全に沈静化はしていない。後一押しか…？

何を言えば良いんだ。

何か、Fクラスが納得して矛を収めてくれる言葉…

『僕は別に木下さんと親しいわけでも仲がいい訳でもないんです。だって僕が彼女に相応しいわけが』

あれ？

そこまで言って、途端に言い様のない嫌悪感を覚えた。

何故かマイクを持った手が震える。口元は引きついて上手く喋れない。

理解できない感情に頭が混乱してしまい、そこで、僕は思わずマイクを切ってしまった。

「…どうしたの？」

急に放送をやめた僕を訝しむ目で見る木下さん。

「なんか、分からないけど急に腹が立って…」

「はい？」

唐突に、分けも分からなく、自分に腹が立ってしまい唇を噛んだ。

過去を振り返る。

昨日、パフェを腹を壊す一歩寸前まで食べたり、悪友に命を狙われたこともあったけど、総合的に感じて、あの日は最高の一日だった。みんなで騒いで、遊んで、ご飯を食べて、これぞ青春って感じの思い出だったんだ。

この出来事を一生、大人になっても忘れたくない。胸に閉まっておきたい。

そう思ってたのに、そんなささやかな思いを、演技とはいえ全部偽ろうとした。

………そっか。

きつと、それが、今の僕には到底許容できないんだ。

それより何より、数少ない交流の木下さんと一緒にいられた時間を否定するのが一番我慢できない。

今でも廊下では「吉井と木下姉じゃ全然つり合わないよな」「優等生と観察処分者だぜ、もう身分とか位が違うよ」とか身勝手なことを言っている。

何も知らない癖に、自分勝手に僕達の間を決め付けてくる連中が、心底ムカついた。

…見返してやりたい。そう、強く思った。

ごめん。やっぱり、嘘はつけないや。

僕は椅子を回転させてじつと僕を見ていた木下さんに向きなおる。

……今からするのは、完全な自己満足だ。実行すれば間違いなく彼女にも矛先が向いてしまう。

だから、まだ、自分勝手な僕だけの判断じゃ決意できない。

「木下さん。ちょっといいかな？」

「…何？」

「昨日、一緒にみんなゲームして、パフェを食べて、一緒に写真撮って、いろいろしたよね。僕すごく楽しかったんだ。みんなでワイ騒いで、木下さんと一緒に遊べて」

「ええ」

「木下さんは…楽しかった？」

聞いておきたかった。彼女がどう思っているのか。

僕は、木下さんの心が知りたかった。同じ気持ちなのか。否なのか。僕の真剣な質問に、木下さんは一瞬だけ呆けた後、まるで出来の悪い教え子を諭すようにまっすぐな視線を僕に向け、口を開く。

「アタシ、昨日もちゃんと言ったはずなんだけど…」

「え…？」

「しょうがないわね。ならもう一回言っておあげる。ちゃんと聞きなさいよ」

そして僕の間を見据え、言った。

「なんだかんだ言っても、昨日はすごく、楽しかったわ」

それで、僕の心は決まった。

「ありがとう。木下さん」

「礼なんていらぬわ。…お互い様でしょ？」

そう言つて、唇を少し弛め、笑顔を僕に向ける。

それで更にやる気が沸いた僕は、気合を入れるため頬を両手を叩き、活を入れた。

すぐにマイクのスイッチを入れて、肺に呼吸を込めた。

…やっつてやろうじゃないか。

全校生徒に向かつて、高らかに宣言してやるつ。

『ごめんなさい。さっきのは全部嘘です』

「……はあ？」「」「」

僕の言葉で、外から明らかに困惑した声が上がった。

当然の反応だ。

そんな周囲の反応は気にせず、次に言う言葉を頭の中でインプットし、気持ちを落ち着かせる為に深呼吸する。

さあ、行くぞ。

すっー、…せーのおっー！！

『僕は昨日木下さんと一緒にパフェを食べたっー！！あの写真は嘘偽りない真実だ！…！』

溜め込んだ酸素を一気に開放してマイクを持ちながら叫んだ。

「……な、何だとおっー？」「」「」

『しかも今日はお弁当を食べ合っこもした！！どうだ！！羨ま

しいかつー!!』

「あの下衆野郎っ!!」

「退学にしてやる!!」

ははは、とつい心の中で笑ってしまつう。

僕に押し寄せる中傷や罵り、それすらも今の僕には心地いい。

言いたいことを自由に言えるのはこんなにも気分がいいんだ。

なんだか木下さんを僕だけが独占にしているみたいになつて、異常に心が躍つた。

野次馬どもの負け惜しみが最高の美酒に感じる。

一気にテンションが上がつて、僕は酔つ払つたおじさんみたいに調子にのつて言葉を言い続ける。

『みんなにはそんなことできないだろうね!! 僕だけができたんだ!!』

いい感じに殺気が僕に集まっている。これが終わつたら、もう僕の命もないだろうな…

けど、だからどうした。

保身と思ひ出、普段なら前者を取るけど、今日だけは特別だ。

僕は、みんなと、…木下さんと一緒にいられた記憶を自分で偽りたなくいんだ。

そのためなら、”たかが”Fクラス、”所詮”学校の男子数十数百人。

今の僕にはモノの敵じゃない!!

『悔しかつたら全員まとめてかかってきやがれーっ!!』

マイクを片手で乱暴に握り締め、肺の奥のさらに奥から空気を溜め込み、ロックミュージシャンみたいに全力で叫んだ。

「上等だぁー！っ！！」

FFF団一（＋）共の言葉が同時に重なり、巨人の雄たけびのようになつた大きな咆哮が、校舎中に響いた。

ふう、と僕は一息ついてマイクの電源を落とす。

グツと伸びをすると、高揚感で全身の力が抜けた感じがする。心の靄が晴れたようにスッキリした気分だ。

「言いすぎよ」

「あいたっ」

木下さんが手刀で僕の頭を叩いた。

「まったく、あれじゃアタシまで被害に合うじゃない…」

ムスツとした表情で余所を向く木下さん。

怒っているのか、照れているのか僕にはわからないけど、彼女の顔は頬から耳まで茹でたタコみたいに赤くなっていた。

きつとこの後Aクラスで質問攻めにあうこと間違いなしだろう。そのことだけはちよつとだけ罪悪感を感じた。

まあ、そこからへんはもうやってしまったので取りかえしようがない。それに…、

「ごめん。でも昨日のことで嘘は付きたくなかったんだ…。僕にとつて昨日は一生残る大事な思い出だから、それを演技であっても自分で否定なんてしたくなかった」

美波の件で清水さんと対決した時にも思った。僕にとっては些細（

今回は些細じゃないけど、寧ろすごく大事）な嘘でも、それで誰かが傷ついてしまうかもしれないことを、  
何、正直者はバカを見る？そんな言葉は知らん。

それが誰も泣かなくていい、傷つかなくていい方法だったなら、全然いいじゃないか。

僕は喜んで自分から進んで正直<sup>バカ</sup>になってやる。

「本当、バカ正直なんだから、呆れて言葉も出ないわ」

「言葉なら出てるじゃない」

「揚げ足を取るな。まったく」

「ははは…」

嘆息する木下さんに僕は小さく笑みを浮べる。

さつきから放送室の扉がガンガンと五月蠅くしょうがない。

「…明日、またお弁当作って来てあげる」

「えっ？」

「だから、万が一にも怪我して欠席なんてするんじゃないわよ。したらアンタの家まで連れ出しに行つてやるから」

「……うん。楽しみだよ」

やった。また木下さんのお弁当が食べられる。

絶体絶命一歩手前な状況でも、それだけで僕の気分は幸せ絶好調だった。

骨が折れようが頭が出血しようが、死んでも明日は学校に行かないといけない。

だから、今はこの五月蠅い連中を黙らせよう。

放送室の扉から少し距離を置いて、僕は両手を顔の前でクロスし、そのまま一直線に突っ走り扉を突き破って廊下に飛び出た。目の前には、数十人の鬱陶しい男子共。けど、もう何も怖いことなんてない。

「僕は、明日も絶対生きて学校に行かないといけないんだあー  
ーっ！！！！！！」

あまりにもFクラスが暴れすぎて、もはや授業どころではなくなっ  
てしまつて西村先生を筆頭に生徒の沈静化が行われていた。  
その所為で五時間目は休講（という名の自習）、まったくいい迷惑  
だ。

「ここにおつたか姉上 うおっ!？」

「何よ秀吉。人の顔を見なりいきなり引いて、早くアタシの制服返  
しなさい」

「そ、それは勿論じゃが、どうしたのじゃ、なんだか今の姉上は「  
何」

「いや、…そんなに嬉しそうな顔をする姉上を見たのは久しぶりだ  
と思つての」

「そう、…確かにそうかもね」



## 最終話（後書き）

ようやく終わりです

3章は今のところまったくかんがえてませんのでいい案ができれば書き始めます。思いつかなかつたら完結します…

## 第1話

「ねえ、偶には秀吉の家に遊びに行かない？」

放課後、暇を持て余した僕は、なんとなくこんなことを言ってしまった。

「んむ？ 突然どうしたのじゃ」

「僕達が誰かの家に遊びに行く時って大抵僕に家だったでしょ。だから久しぶりに秀吉の家でも遊べないかなって」

「そっぴやそうだな。明久の姉さんが帰って来たときにも同じ事言ってたっけ」

僕の言葉に雄二が続くように口を開く。

一人暮らしという都合のいい環境もあってか、普段から学校外で遊ぶ時はほとんど僕の家だった。

行った事がないわけじゃないけど、結構前のことなので秀吉の家もムツツリー二の家も内装などはあんまり覚えてない。

「ワシは別に構わぬが、…何も面白いものはないと思うぞ？ ワシはあまりゲームも持っておらぬからの」

「……………俺達が持って行けばいい」

「うん。僕も家から何か持ってくるからさ。何ならゲームの本体ごと」

「それじゃと初めから明久の家でやるほうが効率がよいとおもっのじゃが…」

ちゅちゅちゅ、秀吉はわかってないな。

同じゲームでもやる場所、状況、時間帯によって面白さが180度

変わったりするもんなんだよ。

それはさながら、プールで食べるカップラーメンの如く。

「まあコイツの言うことはともかく、俺もちょっと興味あるな。演劇の道具とかも見てみたいし」

「……………付き合おう」

「ふむ、なら一度帰ってから改めて集合という形になるかのう」

「僕はそれでいいよ。じゃあ決まりッ!!」

というわけで、今日は秀吉の家で遊ぶことになった。

「美波、姫路さん」

「何よ」

「どうかしましたか?」

僕の呼びかけで今まで勉強してた二人が顔を揃えてやってきた。どうせ遊ぶなら人数も多いほうがいいに決まってる。

「今日秀吉の家で何かして遊ぶことになったんだけど、よかったら二人も一緒に来ない?」

「へえ、木下の家か、珍しいわね」

「待つんじゃないよ。いくらなんでもこの人数ではワシの部屋は手狭になるぞ」

秀吉が慌てて口を挟んだ。

「…うーん。やっぱりこの人数で押しかけたら迷惑になるか…。いい機会だから行って見たかったんだけど、」

「さすがにこの人数じゃなあ…。どうする明久? やっぱり変更するか?」  
と行っても今日はおふくろが家にいるから俺ん家はパ

スだが」

「ムツツリー二は？」

「……………今日は無理。今部屋には仕分け作業が終わっていない商品が溜まっている。主に秀吉と明久の抱き枕」

「君は家で何やってるのっ!？」

秀吉はともかく僕の抱き枕なんて欲しがる人いないよねっ!!

「土屋君。明久君の抱き枕予約していいですか？」

「姫路さんっ!？ 君も何を言ってるのっ!！」

「ウチのも一つお願い!！」

「……………了解。これで明久の抱き枕の予約人数は四人になった」

美波までっ!？ っていうか四人っ!？

後二人は一体どこの誰っ!？

美波と姫路さんぐらいなら……………、僕を抱いて寝てくれるのは、よくないけど、まあいいやって思えてくる。

けど後の二人は、万が一男が買っていたらと思うと気になって夜も眠れなくなってしまうそうだ。

「……………最近は売れ筋が読めない」

「当たり前だよ!! まったく…、で、秀吉の抱き枕はいくらなんだい？」

「明久お主も同じことしてるぞ!!」

「いや。全然違うよ!! 秀吉の商品を買うのは僕の義務であり使命なんだから!!」

「何故そうなるのじゃ!?!？」

ふう、近頃はサイフの紐が弛んでしょうがないよ。

「話が脱線してるぞ。結局どうすんだよ」

おっと、そうだった。

今は今日の遊び場所を考えないといけないんだった。

秀吉の抱き枕については後でひそかに注文しておこう。

「僕の家は今日姉さんがいるから、それでもいいなら構わないけど、ゲームできるか分からないよ。今も一日一時間とか規制されちゃってるし」

まあ、それを素直に守ったことはほとんどないんだけどね。

僕の姉さんは分かってないんだ。

年頃の若者にゲームをするななんて、一日ご飯は米粒一つまで言うてるのに等しい。つまり無理。

姉さんは仕事でよく家を開けてるから、数こそ少なくなったもの前と同じ感覚で僕はゲームライフを満喫できる。

その時、美波と姫路さんがその場で申し訳なさそうに顔の前に手を上げた。

「ごめん、ウチ今日両親が仕事で帰って来ないから家で葉月の面倒を見なくちゃいけないのよ」

「私も、今日はちよつと外せない用事が、すいません明久君」

「あ、そうなんだ…、葉月ちゃんを一人にはできないもんね。こっちこそ無理言っでごめんね」

「ううん、こっちこそごめんね」

そっか。二人が参加できないのはちよつと寂しいけど、事情が事情だから仕方ない。

…そついえば姫路さんの用事って何なんだろう？

「瑞希は何の用事なの？」

僕の代わりに美波が問いかけた。

すると、姫路さんは急にワタワタと手を顔の前で振って挙動不審になった。

顔も少し赤いけど、どうしたんだろ…？

「あ、あのっ！？ 今日はどうしても買いたい本があって…」

「へえ、どんな本なの？ やっぱり文学小説みたいなの？ それとも参考書とか？」

「さ、参考書…、みたいなものです…」

姫路さんが視線を下に向けながら蚊のように小さな声で呟いた。

ほお、参考書が欲しいなんてやっぱり姫路さんは勉強家だなー。

僕が本屋に行く時は九十%漫画しか見ないのに。ちなみに残り十%は料理関係の本。

僕は参考書とか辞書の類は棚を見るだけで頭が痛くなってくるタイプ。

「じゃがそうになるとメンバーは四人じゃな。それならなんとかかなりそうじゃ」

「そうか。…なんだかこの四人だけで遊ぶのもかなり久しぶりな気がするな」

「……………遊ぶ人数が大分増えた」

「うん。最近は霧島さんとか工藤さんとか一緒に行動する増えたからね。勿論美波に姫路さんも」

それが嫌なわけじゃない。寧ろ友達が増えるのは大歓迎だ。

でも、偶には昔みたいに四人で遊ぶのも悪くないかも。

あの頃もいろいろやってからね。…主に僕と雄二が。

「一応家には姉上もおるかもしれんから、もしかすると四人ではなくなるかもしれんがの」

顎に手を当てながら難しい顔で秀吉が言った。

「あ、そっか。秀吉の家なんだから当然お姉さんもいるんだったね」

秀吉の双子のお姉さんの木下優子さん。

僕達との接点はあるまりなかったけど、最近になってAクラスの人と一緒にFクラスによく遊びに来るようになった人だ。

僕個人としても彼女とはいろいろ関わりをもったけど……

思い返せば、秀吉（中身は木下さん）の写真を僕を誤って落としてしまって、それを木下さんに拾われてしまってから、その後のすべてが始まった気がする。

彼女の悪い噂を消すために、放送室を奪って誤情報を全生徒に流した。

偶然知ったパフェ早食い大会での僕のパートナーは美波でも姫路さんでもなくて木下さんになった。

そして、それが原因でFクラスの男子全員を敵に回した。

結果、クラス内での僕の地位は著しく下がってしまったけど、代わりに木下さんお手製のお弁当が二回も食べられた。

それで悔いなんてあるはずがない。できれば、もう一回食べたいな。

木下さんが作ったお弁当は中身こそ始めて作りましたと言わんばかりに崩れていたりしたけど、頑張って作ったのがお弁当を通してわかったから自然と何でも美味しく感じられた。

できればそういうところを姫路さんにも見習って欲しいところだ。

「案外そっちがお前の本命だったりしてな。最近木下姉にゾッコンらしいじゃないか。なあ明久」

雄二が意地の悪い顔をこっちに向けながら口元をニヤつかせて言った。

「ぶっ!? なな何を言ってるのさ雄二!?」

「木下の件でお前、Fクラスの男子全員相手に一人で喧嘩売ったんだろ。いやいやすごいすごい。俺には到底真似できねえわ」

「あれは壮絶じゃったぞ。先生達まで介入する惨事になったからもう」

「……………休んだことが悔やまれる。ビデオに撮っておきたかったのに」

「三人共何言ってるのっ!? あ、あんなのいつものことじゃないか。それと撮影なんて絶対駄目だからね!!」

あんなのものが記録なんてされれば僕は今度こそ羞恥心で死んでしまっ!!

よかった。あの日はムツッリニがお腹壊してくれて本当によかった…。

もう清水さんの時のような小型レコーダーで録音される二の舞はごめんだよ。

なんとか話題を逸らしたいけど、雄二がどんどん調子に乗って捲くし立ててくる。おのれこの野郎!!

「謙遜するなって、全校生徒の前で熱烈に告白したくせに」

「あれは、売り言葉に買い言葉というやつでねっ!! つまり僕は言いたくて言っただけじゃないと」

「ほう、そうじゃったか。ではそのように今度姉上に伝えておこう」  
「それも駄目だよ！！ 具体的には言えないけどそれはやっちゃいけないことだと思うんだ僕は！！」

「……………殺したほど、妬ましいっ！！」

「落ち着くんだムツツリー二、その感情は誤解から生まれた悲しい物なんだよ？」

「じゃあ木下のことはどう思ってるんだよ？」

「どつって……………」

雄二の問いかけに僕は思わず口を噤んでしまった。ここで余計なことを言ってしまうは大変なことになる。

うーん…。けどなんて言えばいいんだ…。素直に友達？

それでもいいけどなんだか僕の中でもややもやしたものが残って腑に落ちない。

もっところ、近いけど遠い感じってないかな…。

これまでにいろいろあって、確かに僕は木下さんのことを異性として意識していたこともある。

でもそれは美波や姫路さん達も同じだし…。ああもう何か良い言葉ないかなーっ！？

気にしてないと言えば嘘になっちゃうし、純粹に憧れている感情っていうものあるわけで…、  
もっところ遠まわし的に

そうだ！！

「僕は木下さんがすごくかっこいいと思うよ！！」

ってバカあ！？ それだと男に対する褒め言葉じゃないか！！  
案の定、三人は意味不明とばかりに表情を歪ませた。

「いや、そこでなんでいきなりかつこいいんだよ。お前の脳内の木下姉に何があったんだ？」

「巡りめぐってそうなってしまったのじゃろう。清涼祭の時にワシにも経験がある」

うんうんと頷きながら可哀想な物を見る目で僕を見る雄二と秀吉。やめて！？ そんな哀れむような目で僕を見ないでえ！？

「……………明久は木下優子が好きなのか？」

「ぶべらひっ！？」

ヒットマンのような鋭い視線でムツツリーニが僕に爆弾を投下してきた。

ちよ、それ直球すぎっ！？ どうして今日に限ってこんなに言い寄られるんだ！？

でも恋愛関係で嘘をつくと返ってややこしい事態にもなりえるし…。

ああ、でもあの時の木下さん可愛かったな…、

僕がお箸向けたら顔真っ赤にしてたし、へへへへ…

「コイツ笑ってやがる…。今度は何妄想してんだ」

ガシッ！！

あの時のことが脳裏でリフレインしてしまって、つい照れくさくなり顔が赤くなってしまうた僕の頭を、唐突に後ろから鷲づかみにされた。

鷲づかみ？

「…アキ、ちよつと体育館裏で話があるんだけど」

「えっ!? ちょ、痛たたたたっ!? あ、頭が割れる!! うお  
おっ!? 持ち上がってる!! 僕美波に片手で頭を鷲づかみされな  
がら持ち上げられてるよ!？」

「…明久君、今後の事で少し大事なお話があります」

「いやいやいや!? 姫路さんこの状況でもつと別にツッコむべき  
箇所があるでしょ!! 具体的に僕の頭とか!! ってなんで  
無視して金属バットなんて構えてるのさ!? 死ぬからね!! い  
くら僕でもそれを頭に受ければこの世と永劫に別れを告げなければ  
いけない自体になっちゃうっ!?」

「行きましょ瑞希」

「はい」

「無視!? 僕の人権生命権生きる権利は尊重されないの!? あ  
っ あーっっっ!?」

そのまま頭を捕まれた状態で僕はズルズルと二人にどこかへ連れて  
行かれてしまった…。

「んで、秀吉、実際のところはどんなんだ？」

お前の姉さんは

明久に好意を抱いてるのか」

「む…、なんとも言い難いのう…、この前は初々と表情で台所に  
たつて珍しくお弁当を作っておったが、少なくとも悪い気はしてな  
いじゃろう」

「それはもう決定的だな」

「………他人の幸福は毒の味。それが異端審問会のならわし」

「ああ、アイツだけ三人の女子に好意が向けられてるなんてムカつ  
いて腸が煮えくり返りそうだ」

「お主らはもつと素直に人の幸せを祝う心を持って方が良いぞ…」

「勘違いするな秀吉。俺にだってそれぐらいある。ただな…。俺は  
あいつの幸せそうな表情を見るのが大嫌いなだけだ」

「……………同意」

「それでよく今まで友達関係でいられたのう…。つくづくワシらは網渡りの関係を歩いてる気がするぞ」

「そんなの今更だろ。…明久も帰って来ないし、俺達もそろそろ帰るか」

「……………準備が整い次第秀吉の家へ向かう」

「了解じゃ」

「ムツツリーニ。ビデオカメラとレコーダーを忘れるな。もしかすると面白いものが取れるかもしれないからな」

「……………御衣」

「ワシは幸先が不安で仕方ないのじゃが…、何も無ければよいが…。ではまた。家で待つとるからの」

「おっ」

「……………また後で」

あの、みんな僕の安否の心配はないの？

## 第1話（後書き）

一週間ぶりぐらいの更新。なんか大分間が空いてしまいました

## 第2話

プリンがない。

アタシは冷蔵庫の前で思わず目を丸くして驚いた。

今日の授業がすべて終わり。特に用事もなかったアタシはそのまま真っ直ぐ帰宅した後、自室で制服から動きやすいタンクトップとブラーツスカートに着替え。居間に下りた。

そして、今日発売だった乙女小説がネット通販で届いていたからそれをソファの上で寝転がりながら読んでいる途中、お腹の虫が空腹を告げた。

実は吉井君にお弁当を作ってあげる為の材料を買うため、二度ほどスーパーに通った時に買っておいた。丸長プリン3個入り140円（2割引き）

うち二つはすでにアタシが食べてしまった。

せつかなので賞味期限も危ないし残り1つも食べてしまおう。

そう思い冷蔵庫を開けて冒頭に戻る。

「あれ？」

ひょっとしてアタシは夜中に寝ぼけて食べてしまったのかな？

両親は基本的にアタシの買ったものには手をつけないし…、

アタシも食べた記憶はない。いや、寝ぼけていたなら当たり前だけど。

それにしても腑に落ちない、と冷蔵庫の前で首をかしげて考え込んでいると、ふとあるものが目に入った。

ゴミ箱。

「……………」

一応、アタシの記憶が正しければ、今日はゴミ収集日のはず……。つまり、アタシが寝ぼけて食べてしまったのなら、もつすでにこの中にはないはず……。だかもしあつたら……、

「 秀吉か」

またか、あの野郎。

我が愚弟、木下秀吉。

演劇大好きっ子でアタシと容姿が瓜二つの双子の弟。最近、アタシはあいつの所為でシヨタコンノーパン同性愛者&女装男子好みの変態認定されるし、前のFクラスの騒動の時は結婚式伝々でアタシに散々赤っ恥を搔かせてくれた奴。

まあ、もつと大変なことがその後あつただけ……、恥かしいかしいのであまり振り返りたくない。

もし、このゴミ箱の中にプリンに入れ物が捨ててあつたら……、どうしてやるつか……。

そろそろ関節の1本や2本増やしてあげるべきなのかもしれない。

「いや、まだ秀吉が食べたと決まったわけじゃない。何でもかんでもあいつの所為にするのも早計ね……」

一旦自分の中で芽生えた殺意を振り払い意識を目の前のゴミ箱に向けた。

この中に答えはある……………。



何事？ 本気で言ってるの？

「秀吉い？ アンタ今朝にプリン食べたでしょ」

「プリン？ おお、確かに食べたぞ。賞味期限は今日までだったの  
でな。捨てるのも勿体無かろうと思って」

「それはアタシが今日食べる為に取っておいたプリンよ！！」

「何と！？ そうじゃったのか！！」

「そうじゃったのか じゃない！！ せつかく残しておいたのに

…、どうしてくれるのよ！！」

「いや、その、……済まぬ」

目の伏せて頂垂れる秀吉。

「さて、…今日は何本逝つとく？」

「いやそんな日常的に関節技を受けてるみたいって言われてもっ！？  
もっと別の安全な妥協案はないのかのう！？」

「そう…、顔面の形状を変えたいの。見上げた根性じゃない。そう  
よね…。アンタが違う顔になれば吉井君に変な勘違いされることも  
なくなるんだよね。いい提案ね。実に平和的だわ」

「ワシは何も言つとらんぞ！？ しかも今の言葉に平和的な要素は  
まったく入っておらんし！！ プリン食べて悪かった。心から申し  
訳ないと思っておるからどうか御慈悲をっ！！」

神に祈るように跪いて懇願する秀吉。…自分とそっくりな顔が目に  
涙貯めて人前で頭を垂れるのを見てのって複雑な気分だ。

一応反省はしてるみたいだし。まあ、あまりとやかく言うのもやめ  
よう。

こいつを絞めても食べられたプリンが口から出てくるわけでもない  
し、いや、それはそれで嫌だけど。

無然とした表情のまま、アタシはしょんぼりしている秀吉に向けて

言い放つ。

「買って来なさい」

「は？」

「アンタが食べたプリン。責任もってアンタが買って来なさい。丸長プリン3個入りのやつ。コンビニでも売ってたはずだから、今から行って買って来なさい」

「今からじゃとっ!?!」

「何? 文句あるの?」

「いやいや、文句も何もそもそもワシが食べたのは1つだけじゃし!?! それに今日はもうすぐ明

「ごちゃごちゃうるさい!! つべこべ言わずに買ってこーいっ!」

「はいっ ただいまっ!!!」

アタシの怒声に秀吉は脱兎の如く家を出て行った。

はあ、…なんかどつと疲れた気がする…。

秀吉が行って再び静かになった居間で、またアタシはソファに寝転んでゴロゴロしていた。

リモコンを使いテレビをつけてみても、この時間はあんまり面白い番組もやってない。

今から自室に戻って自習するような気分でもない。

というわけで、結局アタシはまた乙女小説を読みふけていた。

途中から放りっぱなしだったし、早く続きを見ないと、

それから30分ぐらい経った。

まだ秀吉は帰って来ない。

一体何処まで買いに行ったのかしら…。

乙女小説も読み終わり、やる事が無くなってしまいソファの上で天井から居間を照らしているLEDをぼうっと見上げていると、

ピンポン！！

家のインターホンが来客を告げた。

誰だろう？

重たくなった体に鞭を打って立ち上がる。優等生の仮面を被ることも忘れない。

このドアホンはカラー液晶でこっちが応答すると壁についてあるモニターから勝手に外の子機周辺の様子が映し出される。

親機を手に取りモニターに目を向けると、……………そこには今アタシが意識してやまない人が写っていた。

『えっと…、僕秀吉君の友達で吉井明久って言うんですけど、秀吉君はいますか？』

思わず親機を床に叩きつけそうになった。

「よ、吉井君っ！？」

『え？　もしかして木下さん？』

モニターの向こう側にいる吉井君が意外そうな顔をする。

驚いてるのはアタシの方よ！！　なんで吉井君がここにいるの！？

どうしてここに来てるのっ!?

親機を持っている手が震える。唐突な出来事に頭がついていってない。

だがずっとだんまりしていると不信に思われる。なんとか気持ちを落ちつかせ応答しないと。

「ど、どうして吉井君が？」

『今日雄二やムツツリーニも誘って秀吉の家で遊ぶことになったんだ。お姉さん。秀吉いる？』

「……………」

『木下さん…………？』

なんだ。秀吉か。

そうだよね。あの吉井君が意味もなくいきなり訪問なんかしてくるわけないし…………。

あ…………、なんか今すぐくがっかりしてるかも…………。

「秀吉なら今買出しに行つてていないわ」

『本当っ!?! どうして今から買出しなんか…………』

ごめん。アタシが行けて命令したの。

「…とりあえず上がって」

『いいの?』

「家の前で客を待ちぼうけさせるわけにはいかないでしょ。今鍵開けるから」

赤外線で玄関のロックを外す。

直後、ガチャ、という開錠された音が耳に届いた。

『あ、開いた。ありがとう。おじゃまします』

モニターの中に写っていた吉井君が画面外に消えて子機の電源が落ちる。

きつと今は玄関で靴を脱いでいるころだろう。

アタシも吉井君を向かえに

そう思っ居間の扉を開けようとすると、ついさっきまで読みふけていた乙女小説が目に入った。  
やばいつ！！！

ダダダダダダ！！

「あ、木下さん。秀吉の部屋って」

「ちょっとここで待ってなさい！！　いい？　一歩でも動いたら即追い出すからね！！」

「ええっ！？　何故急に！！」

「いいから！！　今少し部屋が散らかってるの。だから片付けるまで待ってなさい！！」

「それなら僕も手伝おうか？　こっ見えて掃除なら得意なんだ」

片肘を上げ得意げな表情で言う吉井君。

その気持ちは嬉しい。でもごめんなさい。

今だけは心を鬼にしなくちゃいけないの。

「……………下着を直そうと思ったんだけど、それでも手伝うの？」

柔らかい微笑みの中に沢山の殺意を込めて吉井君に言い放つ。

「はっ！！　自分はここで待機しています！！」

ピシッ！と背筋を伸ばし顔を赤くしながら吉井君は即答した。  
……敬礼までせんていい。

「ごめんね。すぐに済むから」

「うん。……あっ」

「どうしかした？」

「ううん。……木下さんの私服って今まで見たことなかったからなんか新鮮で……制服もいいけどやっぱり私服でも綺麗だね」

「っ！？」と、とりあえずここで待つてること！！　いいわね！！」

返事は聞かず脱兎の如き勢いで居間へ戻る。

扉を閉め、アタシは扉を背にもたれかかり小さく溜息を吐いた。

何よ何よ何よ！！　あんな無垢な表情で褒め言葉を言うなんて反則じゃない……。

「は、早く隠さないって」

テーブルの上に無造作に置いてあった乙女小説数冊を手に取り自室へ持って行く。

いつもの隠し場所にそれを隠し、アタシは立ち止まってしばしその場で乙女小説の表紙を見た。

……やっぱり、いつかバラさなきゃいけないのかな……。

学校のアタシは常に優等生という仮面を被り誰からも認められる生徒でありつづける。

でも、その反面家にいるアタシは下着姿であちこち歩き回ったり寝転がりながら乙女小説読んだりとかなりズボラだ。それはアタシの演技をしていた秀吉が証明している。

吉井君には、優等生であるアタシしか見せていない。

もし、家でのアタシの素顔を見たら、吉井君はなんて言うだろう

う…？

「はあ、憂鬱だわ」

今の自分の状況に後悔はないけど、この板ばさみのような気持ちはいかんともしがたい。

もう少し、あとちょっとだけ、吉井君との距離を縮められたら、その時にもう一度考えよう。

それで、もしなんらかの偶然が重なってこのことが吉井君に知れたら、その時は包み隠さず話す。

…気にしてるからってわざわざ自分からカミングアウトすることでもないしね。

自室の扉を閉め階段を下りながら考える。

「そういえば、今ってアタシと吉井君の二人しかないのよね…」

両親のいない家で男を連れ込んで（語弊あり）2人きり……。

ぼっ！！と一瞬で顔が茹で上がった。

ち、違うわよ！？ 別に変は意味とかそんなんじゃないんだからね

！！

「待たせてごめんね。入っていいわよ」

「うん」

気持ちを落ち着かせ、玄関に待たせてあった吉井君の下へ向かい居間へ案内する。

…それにしても秀吉やつ遅いわね。一体どこで油売ってるのかしら。さすがに本人が不在の部屋に案内するわけにもいかないのとおりあえずここでゆっくりしてもらおう。

「へえ…」

居間へ上がった吉井君は何故かしきりに台所へ顔を向けていた。

「台所がどうかした？」

「えっ！？ ううん！！なんでもないよ！！」

「？」

「そ、それにしても雄二達遅いなー！！ 秀吉も帰って来ないし」

顔を赤くして拳動不審な態度を取っていた吉井君は背中に背負っていたリュックサックを床に下ろした。

「…まあいいけど、お茶入れてくるわね」

「ありがとう」

台所へ足を運び食器棚からコップを二つ取り冷蔵庫を開けてお茶の入った容器を取り出しコップに注ぐ。

それをお盆に載せて居間に戻ると吉井君が両手にケースを持って悩んでいた。

「何してるの？」

「今日みんなでやるゲームを持って来たんだけど…、今のうちにどれやるか選んでおこうと思って」

ゲームか…。アタシあんまりやったことないな。

偶に秀吉が携帯ゲームをやっているのを横から見ると、うらやましい。

アタシが知ってるゲームっていうのはトランプとかUNOとかすぐくるとか、

もっとアナログなものしかやったことがない。

秀吉も時間を忘れて熱中してる時あるし、やっぱり男の子ってこういうデジタルゲームが好きなんだ。

お盆をテーブルの上に置いてソフトを見せてもらう。

野球、テニス、サッカー、バトミントン、卓球、そのほかいろいろパーティゲーム。

一体いくつ持って来てるの…。パッと見で10本以上ある。これ全部やる気なの？

「ふーん、いろいろあるのね」

「木下さんはゲームしないの？」

「しないわね。今まで興味なかったし、それに一本一本が高いじゃない」

「確かに」

今の吉井君の一言には、何か伝えようのない重みがあった気がした。

「木下さんもゲームやってみない？」

「アタシが？」

「うん。いきなりRPGとかシューティングとは格ゲーは無理でもスポーツ系のやつならすぐ慣れると思うからさ。はまると面白いよ」

吉井君が業界用語みたいな言葉をペラペラ言ってるがあまり理解できない。

頭にハテナマークを浮べるアタシの傍で吉井君はリユックからまた  
一つソフトを取り出した。

「これなんてどう？」

そう言ってケースの表面をアタシに向ける。

『熱血・Pining・Pong』

## 第2話（後書き）

元ネタは『それが僕らの日常』単行本2巻の木下家の日常

### 第3話

「あの二人ゲームを始めたぞ。…ムツツリー二。ちゃんと撮れてるか？」

「……………問題ない。盗聴から盗撮まで完璧に準備している。抜け目はない」

「よし、お前はそのまま監視を続行してくれ。秀吉。お前の部屋つてテレビないのか？ ビデオの配線を繋いでテレビ越しに見たいんだが」

「生憎と今は諸事情で置いてないのじゃ。それにここで音を出せば下の明久と姉上に見つかってしまうじゃろう…」

「……………（すっ）」（イヤホン）

「…いや、そういう問題ではないと思うぞ。ムツツリー二…。そもそも何故ワシらはワシの部屋でこそ隠れて明久達を監視しておるのじゃ？」

「面白そうだろ？ あの二人が一緒にいる場面は滅多にないからな。それにお互い変に意識しあってるし。もしかしたらここで告白…なんてことも起こる事もあるかもしれないぞ」

「……………抜け駆けは万死に値する。…突入の条件は？」

「1時間きっかりで何も起きなければ普通に玄関から入ったように見せかけて入る。…だがもし、あいつらに不穏な動きが見られたらその時は遠慮するな。堂々と邪魔してやれ。撮影も忘れるなよ」

「……………了解」

「極悪じゃの…、ワシとしては家族として姉上の恋路を応援してやりたいのじゃが…」

「姉のほうに恨みはない。それに関しては多少罪悪感はあるが…、これも明久の弱みを握る為。そして俺達が楽しむためだ。ここは甘んじて感受してもらおう」

「唯我独尊の極みじゃな…。つくづく友達思いな連中じゃ…。そ

れにしても、島田や姫路に加えて、姉上まで籠絡するとは、明久。罪な男じゃ」

「お前は違うのか？」

「雄二…、お主だけは、きちんとワシを男と認識してくれていると信じておったのじゃが」

「わかってるさ。だが時々明久に対するお前の態度が怪しいんだよ」

「……………」

「そこで黙るなよ！！」

「…………… 明久、殺す…っ！！」

「いやいや！？ これは違うぞ！！ 明久のことは男友達として大切に思っておるから、好きか嫌いという二者択一でどう答えるべきが考えあぐねていただけで」

「まあ、それはまた今度でいい。今はこっちに集中するぞ」

「できれば未来永劫しないで欲しいがのう…、プリン、温くなっ  
てしまいそうじゃ」

邪魔なテーブルを一旦余所へ退かして僕は（家から持ってきた）ゲーム機本体をテレビに繋いだ。

そして電源入れコントローラーを握ると『熱血・Ping-pong』と小気味いいタイトルコールが響いて、テレビ画面にゲームの選択画面が現れた。

勝負するのは体感ゲームと言われる実際に体を動かして遊ぶゲームだ。内容は卓球。…正直言って負ける気は微塵も起きないんだけど。

「これどうやって動かせばいいの？」

木下さんがテレビの前に立ち片手でリモコン型のコントローラーを持って、それを鑑定するみたいに顔の前まで持ってきて言った。

「このコントローラーは赤外線で繋がってるからこれを振ると画面の中でも動くんだよ。こうやって」

僕が手に持ったコントローラーを適当にぐるぐる回す。

すると、テレビ画面の中の小さなアイコンが、それに合わせてぐるぐると回転した。

おー！！、と木下さんが驚きの言葉を洩らす。

なんか…、僕が先生みたいに説明してるみたいで、全身がむず痒いなあ。

操作を方法を軽く教えた（といってもリモコンを振るだけなんだけど）…その後、僕は『二人でプレイ』を選択しゲームを開始する。

『レディ Ready スタート Start!』

サーブ権は木下さんから。画面内で動くボール合わせてリモコンを振る。

「行くわよ。そりゃ！！」

ぶんっ！！

スカっ

PLAYER 1 (僕)

VS

PLAYER 2 (木下さん)

1点

0点

「ええええ!? 何でっ!?!」

「ははは……」

見事サーブを空ぶつた木下さんが驚愕の表情を浮べた。

うーん。初めてだから無理もないか。…やっぱりこういうのは慣れが重要だよな。

僕の先制点なので今度はサーブ権が僕に代わる。お手本になるようリモコンを軽く振ると、ボールは小気味いい音を立てて木下さん側のコートへ飛んでいった。

「今度こそ、えいっ!!!」

…ズバン!!

「え?」

木下さんは右から左に向かってなぎ払うようにリモコンを振りかぶった。ちよっ!?! それ振りすぎだから!!

当然、打たれたボールは僕のコートはおろか、見えなくなるぐらい場外の遠い彼方へ飛び去っていった。

「わかんないわよーっ!!!」

「お、落ち着いて木下さん!! えっとね」

「

くくレクチャー中くく

というわけで、改めて仕切りなおしだ。

点数はさつきと同じ。

手加減も考えたけど、口にした途端『加減なんかしたら許さないからね』と凄まれてしまった。

そういえば、スポーツにしる勉強にしる、良い成績を残す人は負けず嫌いな事が多い。木下さんは普段から勝気な性格をしてるからそれがよくわかるけど、案外姫路さんや霧島さんも物静かな性格に反して負けず嫌いなのもしれない。そんな考えがふと脳裏に思い浮かんだ。

勿論、普段から雄二達と全力でやってる以上、本気なんて出したら勝負にならない。

これがもし『姫路さんと料理権を賭けた真剣勝負』というなら僕は一切の加減なく全力で相手を打ち倒すけど、今回はあくまで楽しむための遊びなのでのんびりやろう。何事も一方的は面白くないからね。

「次こそ負けないからね」

リモコンをギュッと握った木下さんが画面に集中しながら口を開く。別に僕が勝った訳じゃないけど、野暮なことは言いまい。

何度か練習した木下さんのサーブは的確にコースを狙い打ってきた。上手い。

「それっ」

それをひゅっと振りボールを返す。

すると、今度は僕のいるコースとは反対の方向に向かってボールが飛び込んできた。  
ネットギリギリの威力も高い鋭い玉だ。木下さんは上達が早い。  
何度か打っては打ち返しのそんなつばぜりあいを続けていく。

「あつ」

だけど、途中、僕は勢い余ってボールを高く上げてしまった。これは絶好のスマッシュチャンスだ。

「取った!!」

さっきとはいざ知らず、見違えるほど上達した木下さんがそれを見逃すはずがない。

木下さんがラケットを大きく振りかぶる。

そして、ビシュッと音と共にボールはかなりの速さで僕のコートへ飛び込んできた。

威力もコースも申し分ない木下さんのスマッシュ。これを返すのは難しい。

それを、

「えいつ」

僕は鋭い打球でコートへ返した。

「……………え？」

さっきのスマッシュで得点を確信していたのか、木下さんはこちらの打球には反応せず、棒立ちになっていた。

画面の中のボールがコートの上で『コン、コン……』と何度かバウンドし、僕の得点が一つ増えた。

「よ、吉井君……上手すぎない……?」

驚きの表情のまま、僕に問いかける木下さん。いや、そりゃあ……ね。

「このゲーム、僕も雄二達と随分やりこんでたもんで……」  
「んなつ!?!」

最初は僕も雄二もスマッシュが入れば得点になったんだけど、段々お互いムキになって、勝負を繰り返すうちに相手のコントローラーの振り方や動きを予測してある程度返せるようになっていた。今や普通のスマッシュ程度では僕らにはあまり脅威ではないといえる。

「や、やっぱりちょっと加減したほうがいいよね……。ついつつも調子でやつちゃって」

「……くうっ、絶対負けないんだから……。っ!」

しまった!!! どうやら僕は木下さんの闘争本能に火を点けてしまったらしい……。その後、僕が点数を取る度にどんどん木下さんのボルテージは高まっていった。

……といっても、結局はこうなるわけで……。

PLAYER 1 (僕) VS PLAYER 2 (木下さん)

10点

0点

「ぐぬぬぬぬ……っ！！！！」

憎憎しげにコントローラーを握り締めながら唸る木下さん。

「何で1点も取れないの!？」

「初めてやったんだからしかたないよ。寧ろここまでうまいのがすごいと思うぐらいなんだから」

僕は素直に賞賛した。

冗談でもなんでもなく、木下さんは目紛るしい勢いで成長していった。

すでにずっと遊んできた僕と普通に打ち合いが出来るぐらいだ。僕が苦勞して積み上げてきた技術を一瞬で習得していつてる。ある意味僕のほうが悔しい。

が、それでも木下さんが納得がいかなそうに唇を噛んでいた。

そうこうしているうちに次の試合が始まった。後1点先取すれば僕の勝ちだ。

「今度こ………そっ！！」

負けじとラケットを振りかぶりボールを僕のコートへ飛ばしてくる。………なんか不思議な気分だ。普段は学力で僕はFで木下さんはAなのに、今だけはその順位が逆転している気がする。………嬉しくはないけど。

打って…、打ち返され…、打って…、打ち返され…、打って…、打ち返され…、

そんな攻防の最中、

「これなら、どっっ！！！！」

木下さんが宙に舞い上がったボールを勢いよく打ちスマッシュを放つ。

コースは僕のいる位置の反対側、これはきつい…。

「くっ…」

つい体をごと動かしてボールを追う僕。

その時、……いきなり足が横に捻って激痛が一気に頭の天辺まで登ってきた。

痛みに思わず表情が歪む。

「痛っ!? ……うわあっ!?」

急に体のバランスが斜めに崩れた。視界が一気に回転する。

転ぶ!? ……そう自覚するのに1秒かかった。

なんとか持ち直したけど、激痛と勢いで思うように体をコントロールできない。

このままじゃまずい!? ……と僕は咄嗟に何かで体を支えようと近くのものに手を伸ばして。

「ちよっ!? ……何っ!? ……きゃああっ!」

掴んでしまった木下さんの肩と一緒に柔らかい床の上に倒れてしまった……。これじゃ唯の二次災害じゃないか!!

ぐああっ!? ……やってしまった!? ……ある意味自分の才能にびっくりだよコンチクショウ!!

倒れた所為でテレビ画面は見えないけど、『コン、…コン』と玉の跳ねる音が横から聞こえる。どうやら1点取られてしまったみたい

だ。　　ってそんなことはどうでもいいよ!!  
いくら焦っていたとはいえ、よりにもよって木下さんを掴んでしま  
うなんて…。何やってるんだ僕は……。

「痛つつ、　　っ!?　　木下さん大丈夫……ほおあっ!?!?」  
「あ痛ったあー。なんなのよまったく……、……え?」

思わず鼻血が噴出しそうになるのを必死で堪えた。一瞬で僕の脳の  
許容量がオーバーする光景が目の前にあった。

やばい!?、体勢的には仰向けになつた木下さんの上に僕が押し掛  
かっている感じになつてしまった!!

つまり密着。ふおおっ!!　　なんかいろいろ当たってるんですけど  
!?　　どうりで床にしてはぶにぶにしてて柔らかいなーと思つたよ  
!!

僕の下で抜け出そうと、もぞもぞと動く木下さんに連動して僕の体  
が木下さんの体のあちこちに当たる。ぐあっ!?　　理性がっ…、僕  
のベルリンの壁が崩壊する!!　　これはまずい!!  
足が痛いから、なんとか別の方法でこの場から離れようと手の平を  
床に乗せ、腕の力で顔だけ先に上げて　　。

「「……あ」」

…　　なんか、…滅茶苦茶近くに木下さんの顔があつた。

距離的に3センチあるかないかぐらいの位置。

……　　目が合つてしまう。

その瞬間、僕達は、ボツ!!　　と茹でたタコみたいに顔が真っ赤に  
染め上がった。

「なっ!?　　なななななっ!?　　何の真似!?　　アタシに何する気  
よ……」

「わわわっ!? これは偶然発生した不幸な事故であって!? 決して他意があつたわけじゃないんです!! 今すぐ起きますのでしばしお待ちを!!」

予期せぬ出来事に頭がショートしてしまい、うまい言葉が口から出てこない。

急いで立ち上がろうとするけど、木下さんと密着しているという事実に緊張してる所為で手足が小鹿みたいにふるふる震えてバランスを保てない。

おまけに、ついさつき感じた足の痛みが再び頭の天辺まで登ってきて、僕はまたバランスを崩し、木下さんの上で両手を床につけ土下座しているような形になった。

……これ、見る人が見れば僕が木下さんを押し倒して襲っているように見えなくもないよね。

「い、いつまでそうしてる気……っ」

羞恥心で顔を真っ赤にした木下さんが下から見え上げてくる。僕だつてしたくてしてるわけじゃないのに!?

「い、ごめん……!? すぐに離れるから、……すぐに……」

今も僕の心臓は早鐘のように鼓動を刻んでいる。これは恥ずかしくないよ……っ

ともあれ早くこの状況を打破しないと僕の中の野獣が目覚まして暴れてしまう!!

もう痛みなんて知ったことかと無視して無理矢理立ち上がろうとする。

「……吉井君?」

下からまっすぐこつちを見る木下さんが僕の眼前に広がった。

……………思わず生唾を飲む。

……………こんな状況で言うのもあれなんだけど、やっぱり秀吉とい  
い木下さんといい顔が凄く綺麗だな…。

床に無造作に広がったミディアム程度の長さの髪に耳まで赤くなっ  
ている小さい顔。

困惑した瞳にふるふると振るえる唇は、できればずっと見ていたい  
ぐらい魅力的に見えた。

「い、いや!! 何でもないよ!!」

「そ、そう…。ならいいけど……………」

あまりに綺麗なので思わず見惚れてしまいました。なんて本人の前  
で言えるわけがないよね…。

と、取りあえず早く起きよう……………。これ以上は僕の理性が持たな  
い…。

パシャ!!

「パシャ？」

え？ なんの音？

「よお明久。なんか面白そうなことしてるじゃねえか…」

いつのまにか僕らの傍には口の端を吊り上げた雄二とやれやれとい  
った感じの秀吉。熱心にカメラを両手に持って構え僕達を撮影して  
いるムツツリーニがいた。

なんだ。やっと来たんだ……。随分遅かったじゃないか。

……………え？

「「うわああああー……………つ!?」」

慌てて飛び引く僕と木下さん。何!? どうして雄二達が僕らの目の前にいるの!?

「何故雄二がここに!?!」

「何故も何も、元々俺達は秀吉の家で遊ぶ約束してたじゃねえか。

木下姉といちやいちゃするのに忙しくて忘れてたのか?」

「い、いちやいちゃなんてしてないわよ!! あれは唯の事故で!  
!」

チヨイチヨイ。

「ん? なにムツツリーニ」

「……………(ちらっ)」

「? 何この映像」

ムツツリーニに手渡されたカメラの液晶画面には、さっき(事故で)押し倒してしまった僕と下で顔を真っ赤にした木下さんが写っていた。ってちよつとおおっ!?!

さっきの『パシヤ』ってこれかあ!!

「なんてものを撮ってくれてるんだ!! これが学校に知れ渡ったら、また僕は異端審問会に追われるハメになるじゃないか!!」

もう男子生徒何十人も相手に一人で喧嘩するのは嫌だよ!!

「　　っていつかアンタ達いつからいたのよ。　秀吉もいつ帰って来てたの?」

「か、帰ったのは随分前なのじゃが…、いろいろあつての」

「お前らがあんまりピンク色の空間作るもんだからこっちは出るに  
出られなかったんだ。ま、おかげで面白いものが見れたがな」  
「なあ!?!」

嘘だ。あの雄二がその程度のことです躊躇するはずがない。

これは間違いなく。　僕を監視してたな!!

僕が視線でそう訴えかけると、案の定あいつは挑発的な表情で返してきた。

……いい度胸じゃないか。ここが僕か雄二の家ならずで凶器片手に乱闘が始まってるるところだ。

あいつめ、この前の昼休みに見捨てた仕返しのもりか…!!　今度は僕を肅清するつもりだな!!

でも、そうはさせない!!

「……………異端審問会は人の幸せを許さない。抜け駆けは死刑」

「よし、取引しようじゃないかムツツリーニ」

「……………何?」

「…実は、…この間手に入れた秘蔵の工口本が5冊ほど姉さんには  
れないように保管してるんだ」

「……………5冊っ!?! ……それで…?」

「それをすべて君にプレゼントしよう。だから今日撮った写真を全部僕に譲って欲しいんだ。無事僕が明日生きていたら、秘蔵の工口本は全部君に進呈するよ」

「……………(コクコク!!)了承した!!」

ふっ、やった。相互利益は商売の基本だよね。  
これでさらに僕の木下さんフォトアルバムに新たなページが追加された。

…最近のムツツリー二はムツツリでも何でもないただのスケベに思えてくるよ。

「くっ…、覚えてなさいよ秀吉…っ!!」

「何故ワシなのじゃ!？」

向こうでもどうやら話をついたらしい。尊い犠牲を払って。

その後、雄二とゲームで真剣勝負したり秀吉の演劇用の服装を借りて着て撮影会になったり（なんかメイド服とかチャイナ服ばかりだった。秀吉と木下さんのコスプレ写真は予約済み）日が落ちるまで僕達は遊びつくした。  
そして帰る時間になる。

「今日は楽しかったぞ。また来てくれ」

「もうあんなことはコリゴリだけどね…」

玄関先まで秀吉と木下さんの2人が見送ってくれた。

「俺も中々新鮮で楽しかったぞ。じゃあまた明日学校でな」

「……………貴重な資料提供感謝する。今日はいいい日だった」

そう言い残し雄二とムツツリー二は僕達から踵を返して帰路へ向かった。

「明久はまだ帰らないのかの?」

「うん？ そっじゃないよ。……よし」  
「??？」

雄二とムッツリーニの背中が夜の闇に完全に消えた後、僕はおもむろに携帯をポケットから取り出す。そしてある人物にメールを送った。

from 霧島さん

【実は今日、雄二が霧島さんに内緒で木下優子さんと楽しそうに遊んでたよ】

「送信つと」

5秒で【ありがとう。吉井】という返信がくる。ふう、これで雄二の命運は決まったな……。あいつを貶めるのとはとても気分がいい。

「何をやっておるのじゃ……」  
「代表……」

傍でメールを見ていた2人が呆れ顔をする。僕はやられた借りは必ず返す男だ。

「アンタ達ってよく友達でいられるわね。例の覆面集団といい。Fクラスの感性ってよくわからないわ」  
「大丈夫だよ。僕も偶に分からなくなるから」

強いて言うなら、Fクラスの男子は（僕を除いて）他人の不幸が大

好きなんだ。

### 第3話（後書き）

ある意味一番苦勞（11月6日現状で）して書いた回

もう少しで資格試験があるので一週間ちょっと更新が停滞するかも  
しれません。今作品を見てくれている方には大変申し訳ないですが  
ご了承願います

## 第4話

雄二とムッツリーニを誘って秀吉の家で遊んだ日の翌日。

僕らは放課後。Fクラスの教室で美波や姫路さん、Aクラスの三人も交えて昨日の出来事を話していた。

秀吉の家に行くと、何故か家には木下さんしかいなくて僕ら2人で卓球ゲームをやったこと。

実は雄二、ムッツリーニ、秀吉の三人はとっくに来ていて僕達を監視して楽しんでいたこと。

その後、雄二と真剣勝負をしたり、秀吉の演劇用に使う衣装を拝借してみんなで着てみたり……と。

……ゲームのプレイ中、僕が木下さんを押し倒してしまったことは言っていない。っていうか言える筈がない……。

そんな変態行動を自分からカミングアウトしてしまえば、僕は今度こそ異端審問会と姫路さんと美波に物理的手段で葬られる……。

ムッツリーニはエロ本で買収しているので問題ない。秀吉とお姉さんも話題には出さなかった。

一番懸念していたの雄二だけど、僕の予想とは裏腹に、雄二もこの事に一切触れなかったのは以外と言えば以外だった。

「とまあ、そんなことがあったんだよ。な、明久」

「うん。特に僕と雄二の勝負は盛り上がったよね」

雄二の言葉に僕は相槌を打って答える。

Fクラスは授業が終わった早々にクラスメイトが帰ったため、教室にいるのは僕達だけだ。

「ていうか2人共ゲーム上手すぎ……。一体何時間やったらゲームで

あそこまで機敏に動けるのよ」

昨日の出来事が脳裏に浮かんだのか。木下さんはどこか遠い目をしてそう言った。

「明久は食費を削つてでもゲームをする男じゃからの」

「……………ゲームに人生を賭けてる」

「いやあ。…ははは」

「アキ…。褒められてないわよ…」

あれ？

「でもそんな吉井君と正面切つて戦える坂本君もすごいってことだね。やっぱり坂本君もゲーマー？」と工藤さん。

「いや、俺はゲームは好きだが明久ほどのめりこんでる訳じゃないぞ」

「じゃあどうしてですか？」

「そりゃあ勿論、ここを使つてだ」

そう言つて、雄二は自分のこめかみを人差し指でツンツンと突付く。なんかまた雄二に馬鹿にされた気がするんだけど…。

「良くも悪くも明久の戦術は直線的だからな。コントローラーや体の動きを見れば、後は少しのゲーム経験ですぐ同じ土俵に立てるさ。実際木下姉がそうだった。ま、それでもあんまり頭を使わないゲームではすこぶる強いのは事実だけだな」

「褒めてるのが貶してるのかどっちなんだよ…」

でも思い返すと、確かに木下さんは僕が少し教えただけで驚く勢いで上達した。

あれは単純に木下さんの才能なんだと思ってたけど、単に僕の操作が読みやすかっただけ？

……ちよつとだけ自分の技術に自身がなくなつて来た…。僕の数少ない得意分野なのにつ！？

「はあ、……これはまた修行を積まないといけないかもしれないな…。」

「そのやる気を勉強でも見せれば成績も上がるでしょうに…」と美波。

勉強 勉強  
それはそれ、これはこれ。

「でも最近は玲さんの影響もあつて、あまりゲームは買つてないんですよね？」

「まあね…。そのおかげで前より健康的な食生活を送れてるけど、新作ゲームが中々買えなくて……。」

「玲さん？ 一体誰のこと？」

木下さんが首を傾げて言った。

「そういえば姉上は玲殿のことはまったく面識がなかったのう。玲殿というのは明久の姉君のことじゃ。」

お姉さんのほうに振り向いて思い出したように言う秀吉。

それで僕もハツとした。そっか。この中だと木下さんだけ姉さんと会つた事ないんだっけ？

一応工藤さんと霧島さんは一緒に海に行った時に挨拶してるから姉さんの事を知らないのは木下さんだけなんだ。

なんだかんだ言つて、木下さんとよく話すようになったのは最近だし、無理もないか。

「へえ、吉井君にお姉さんがいるっていうのは聞いたことあったけど、そうなんだ。……ひよっとして代表と愛子も知ってるの？」

霧島さんと工藤さんの2人を交互に見回して問いかける。

その質問に、2人はコクリと頷いた。

「……海に行った時に知り合った」

「中々個性的で面白い人だったよ。ボクも将来はあんな人になりたいな」

「……………そ」

木下さんにしては珍しいそっけない返事、

それからムスツとした表情で口元を尖らせて「……………なんかアタシだけ置いてけぼりになってるみたいじゃない……………」とかなんとか呟いたような気がしたけど、声が小さくてよく聞き取れなかった。

あと工藤さん。お願いだから姉さんを将来の目標にするのは止してほしい。

あの人は確かに傍目で見れば知的で礼儀正しい理想の女性に見えるかもしれないけど、その裏では常に弟の唇を本気で狙ってくる途方もなく型破りな人間なんだよ？

もし僕の前に姉さんみたいな人がもう一人現れたら、僕は後世を平穩に生きていく自身が持てない……………。

ホント、ウチの姉さんは”勉強しか”できないんだから。『個性的』というのは『変』の同義語だと僕は思う。

僕より近くで木下さんの呟きを聞いていた工藤さんは、一瞬だけ目を丸くした後、今度はニツコリ笑顔になって木下さんの肩を優しく叩いた。

「まあまあ、遅れた分はこれからゆっくり取り戻せばいいんだよ。だからそんな拗ねないの」

「べっ、別に拗ねてなんかないわよ!？」

木下さんは頬を真っ赤にして否定する。

それを『あーはいはい』と工藤さんはどうでもよさそうに適当に流した。

「それならば、今日は明久の家で何かするのはどうじゃ？」

人差し指をピンと上げ、秀吉が言った。

「僕の家？」

「うむ、昨日はワシらの家に来たのじゃし、姉上の初訪問も兼ねてどうかと思つての。駄目かの？」

「うん、全然構わないよ。どうせ明日は休みだしね。そうだよ。かつたら夕飯も食べていく？」

「えっ!？ 吉井君の家で!？」

「うん。…嫌かな？」

「い、嫌じゃないわよ!! ただ、…えっと……………」

…………… (初めて上がる家で、その上ご馳走になるなんて、恥ずかしいじゃない…) 「

「????？」

木下さんは頬の冷めてきた熱を再沸騰させてまた小声でぶつぶつと何かを呟き始めた。

ちよつと挙動不審気味だけど、まあ、嫌じゃないようだし、深く気にしないでおこう。

「そういうことなら、俺も一枚噛ませてもらうぞ」

すっかり僕の家で遊ぶムードになった雰囲気の中に雄二が入ってくる。

「料理なら俺とムツツリー二の出番だろ。と、まだ決めるのは早いな。ムツツリー二はどうするんだ？」

「……………勿論。参加する。台所は任せろ」

「……………雄二が行くなら、私も行く」

「じゃあボクも行くかな」

「わ、私だつて行きますからね!!」

「ウチも行く!! アキと木下姉妹を三人だけにすると危なっかしくて放つておけないもんね!!」

「前の連想ゲームの時といい美波の中の僕ってどれだけ救いようがない変態になつてるの!？」

「あと姉妹ではなく姉弟なのじゃが、当然のように誰も聞いておらん……………」

秀吉が何か言つてたけど、僕の耳にはまったく入ってこなかった。

雄二。ムツツリー二。霧島さん。工藤さん。姫路さん。美波。そして秀吉とお姉さん。

いつもメンバーが全員参加か。……………これは本格的にやらないといけないね。

こうなると下手に手間のかかる料理よりも鍋とかにしたほうがいいかもしれない。人数が人数だし。姉さんも入れると10人になるからね。

そこら辺を雄二とムツツリー二に相談しないと。

「夕飯の件なんだけど、あんまりレパトリーを増やしすぎてテーブルが溢れかえるのもあれだし鍋物にしようと思っただけど、そのほうが気分的にも盛り上がるだろうし。どうかな？」

「まあこの人数じゃ仕方ないな」

「……………異議なし」

「あつ、それならさ、たこ焼きにしない？」

「「たこ焼き？」」

工藤さんの唐突な提案に全員が反芻した。

「うん。昨日テレビで大阪の有名なお店の宣伝をやってたんだけど、その時に出たたこ焼きが美味しそうだったんだよ。お鍋と一緒にたこ焼きなら人数が多くてもあまり手間暇も掛からないしどうかな？」

嬉しそうに笑顔で語る工藤さん。ふむ。たこ焼きか…。確かにいい案かもしれない。

作るのにあまり材料もいらないうし、丁度家には長い間使っていないたこ焼き鉄板が残ってる。

問題は生地を使う卵や薄力粉とタコとかの具材だけど、これは帰りにでも買って帰ればなんとかなるだろう。

……工藤さんの言葉に影響されたのか僕の脳内で焼きたてのたこ焼きのイメージが浮かび上がった。  
じゅるっ

はっ！？ つい涎がでてしまった！？

「いいのう。想像するとワシもなんだかたこ焼きが食べたくなってきたぞい」

「たこ焼きか、そっぴや最近作ってないな。せっかくだし久々にやってみるか」

「うん。僕も賛成。家にプレートもあるから具材があれば僕の家でも作れるよ」

「じゃあ決まりね。材料の卵と薄力粉、あと生姜とか天かすぐらいならウチの家からでも持ってきてくれるから、後は」

「タコはボクが持つてくるよ。一応発案者だからね」

「牛乳やチーズを入れると美味しくなると聞いた事があります。私持つていきますね。あとナトリウムや硝酸など」

「……最後のはいいいから!?!?!?!」

僕と雄二と秀吉とムツツリー二が慌てて同時に姫路さんの言葉を遮った。

………危ない。このまま姫路さんの行いを見過ごしていたら、危うく楽しめたこ焼きパーティが死屍累々の追悼式になるところだった。

……相変わらず姫路さんの料理に関する思考は僕の理解の範疇を大きく飛び交えているよ。

今日だけは絶対に姫路さん。あと姉さんを台所には立たせないようにしないと……!?!?

「アタシや秀吉は何も持つてきたらいいの?」

「必要なものは大体そろってるから、特には何も。強いて言うなら、姉さんに面と向かって向き合う心の準備……かな」

「……なにそれ?」

「姉上も対面してみればわかるのじゃ。そういえば明久よ。お主の姉君は確か不純異性交遊を禁止しておったじやろう。家に姉上を招いても大丈夫なのか?」

「うーん。多分大丈夫だと思うよ。最近の姉さんはそこら辺も結構寛大になってきてるし」

この前まで僕が異性と手を繋ぐことさえ禁止していたけど、それが返って僕に悪い影響を与えていたと考えたのか、前ほど異性がどうのこうのとは言ってこなくなつた。

まあ何かあつてはそれは9割9分8里が僕への（精神的な）折檻だし。後の2里は肉体的な拷問。

姫路さんが来た時だつて姉さんは僕以外には素直に歓迎していた。姫路さんや秀吉を男とか失礼な発言をしたりはしたけど……、海の時みたいに泊まりならともかく、家でご飯を食べるぐらいなら姉さんだつて許してくれるはず……だよな？

そこらへんは家族として信じるしかない。……今日は玄関に下着とか干してませんように……。

「そうか。それは困るな。明久。お前の姉さんには今日は絶対に異性と触れ合うのは禁止にしようと言つてくれ。俺の命に関わる」

あはは、雄二がなんか言つてるけど僕にはまったく聞こえません。

「……雄二。余計なこと言わない」

「ちよつと待て翔子！？ 別にお前の名前は言つてない！！」

つてお前そのロープは何処から持ってきたんだ！？ やめる！！

俺を縛り上げるなあ！？

「……夫の暴走を止めるのは妻の義務」

「俺はまだ独身だぁー！？」

芋虫のようにぐるぐる巻きにされた雄二は放つておいて話を進めよう。

「集合時間とかはどうするの？」

工藤さんも雄二は無視して僕に問いかけた。

「特に決めなくてもいいんじゃないかな。あんまり暗くなる前に来てくれればいいよ。一応任せた材料の件もあるから遅くなる場合だ

け連絡をくれればそれでいいと思う」

「……………了解」

「オツケー。なるべく早く行くよ」

「そうなるの特に準備のないワシらはこのまま明久と一緒に行っても構わんじやろう。それで良いかの姉上？」

「え、ええ…。大丈夫よ」

お姉さんは表情を固くしたまま頷いて言った。

ひよっとして初めて行く家で緊張してるのかな？

「…ねえ瑞希。ウチ達って最近影薄くなってない？」

「…ですよ。パフエの時も私達は蚊帳の外でしたし、木下君の家にも行けなかつたですし、なんだか明久君に存在を忘れられちゃったよって複雑な気分です……………」

「なんとしても今日のたこ焼きパーティーで挽回するのよ。木下さんばっかりにリードはさせられないわ!!」

「はい!! 頑張りましょう美波ちゃん!!」

遠くで何やら2人で密談をしていた美波と姫路さんはお互いに握りこぶしを作り力強い気迫で何かを決意していた。

……………何故だろう。それを見た後から僕の背筋の鳥肌が止まらない。

……………どうか。何も起こりませんように

#### 第4話（後書き）

最近を書く 眠たくなる 寝る 書く 眠たくなる 寝る 書く  
眠たくなる 寝るの悪循環が続いた所為で上手く筆が進まなかった

…。

最近ちょっと文才が落ちているような（もともと低いですけど）気がして冷や汗書きながら書いています（・・i）

## 第5話

僕の家で現地集合という形で一度解散した後、僕は秀吉とお姉さんと共に校門を出て帰路に向かって進んでいた。

工藤さんとムツツリー二は先導して美波と姫路さんを連れて買出し担当。

本当は僕が買出しをやりたいかったんだけど、まあムツツリー二がいるなら問題は起きないだろう。

雄二は縄で縛られたまま霧島さんに連行されていった。どこに連れて行かれたのかは知らないけど、別にどうでもいいよね。

途中、木下さんと携帯の電話番号とメールアドレスを交換して、体育祭の件などで談笑している間に僕のマンションに到着。

玄関先まで来た。

多分姉さんが家にいると思うけど……、鍵を開け、扉を薄く開くと、玄関には姉さんの靴が綺麗に揃えて置いてある。やっぱり家にいるみたいだ。

「姉さんいるね。じゃ、ここからは心を強く持ってね。ちょっとでも油断すると頭から丸呑みされちゃうから」

「うむ。……姉上。なんだかさつきからソワソワしておるが平気なのう?」

「な、なんのことよつ。アタシは優等生なんだから、挨拶ぐらい出来て当然でしょう!! ……大丈夫よアタシ、ちゃんと頭の中でシミュレーションしてきたんだから……」

「? 取りあえず開けるよ?」

ガチャ。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさいアキ君」

パタパタと足音を立てて姉さんが玄関前にやってくる。

格好は……、下はスラックスで上はカッターシャツとブルゾン……、よかった。普通の格好みたいだ。

「あら」

姉さんが秀吉とお姉さんを交互に見て、頬を手を当てながら首をかしげた。

「お久しゅうじゃ。姉上殿」

「はい。お久しぶりですね秀吉君。今日は遊びにいらしたのですか。どうぞゆっくりしてってください」

続いて、姉さんは木下さんに視線を向ける。

「あつ！？ あのアタシは」

「……おかしいですね。今日はお酒は飲んでいないはずなのですが……、アキ君。姉さんには秀吉君が二人に見えているのですが」

「いやいや酔って幻覚が見えるとかそんなんじゃないから！？ ちやんと現実ここに立ってるよ！！」

「……………（ひくっ）」

姉さんの言葉に木下さんの優等生スマイルが少し崩れた。

はわわ……、出てきて1分でいきなり常識はずれなことといって来たよこの人！？

思わず僕は嘆息し、少し前に出てお姉さんを紹介した。

「この人は木下優子さんって言って秀吉の双子のお姉さんなんだ。確かに見た目はすっごい似てるから勘違いしそうだけど、歴とした別人だからね」

前に入れ替わった時に素で気付かなかった僕が言うのもあれだけど。

「そうだったのですか。これは失礼いたしました。改めまして初めまして、私はアキ君の姉の吉井玲と言います。よろしく御願ひしますね。優子さん」

「は、はい。ご丁寧に、こちらこそよろしく御願ひします……」

少し固い感じで木下さんは姉さんに向かってお辞儀をする。

「それにしても」

と、姉さんはまた2人を観察するような目で見回し

「秀吉君もそうですが、最近は可愛い」『男の子』」が多いのですね」

そんなことをのたまってきた。

ちよっ!?! 木下さんの前でそれはある意味禁句だよ!! というか今僕きちんとお姉さんって言ったのに!!

ほら、破天荒な姉さんの前でも諦めずに頑張つて笑顔を作ってる木下さんの表情がどんどん崩れて来てるじゃないか!!

気のせいか手をグーにしてギギギと擬音が鳴りそうなほど力を入れてるし!!

「前回に引き続き何初対面で失礼な言ってるの姉さん!? 2人共ちゃんとした女の子だよ!?!」

「いやワシは男であつとるぞー！」

「そうでしたか。これは失礼しました」

「……………吉井君の言つてた言葉の意味がようやく分かった気がするわ。予想外すぎてどう反応していいかわからない……………」

表情に陰りを見せた木下さんはそんなことを言いながら姉さんに見えないよう小さく溜息を吐いた。

……………なんていうか。…ごめんなさい。

玄関前でいつまでも立ち話をするわけにもいかないので、僕達はリビングに移動した。

今日は家でたこ焼きパーティをすることを姉さんに伝えた後、台所へ足を運び冷蔵庫を空けて材料を確認する。

小麦粉や卵はまだ余裕がある。…でも肝心のタコがまったくなかったのは予想外だった。パエリア用のやつがまだ余つてると思ったんだけど……………。

鰹節かつおぶしとてんかすは少し残つてるから、人数的にあとはムツツリーニの方の材料に任せるしかない。

その後、戸棚の奥から長い間封印していたたこ焼き鉄板を取り出して中身を確認する。……………うわっ、随分ほつたらかしにしてたから埃が溜まつてる……………。

これも後で洗わないといけないな。

そんなことを考えていると、ふとリビングの方から姉さんの声が聞こえて来た。

『なるほど、前にアキ君と大きいパフェを食べたのは優子さんだったのですね。アキ君は『木下さん』としか言わなかったのので、つきり秀吉君のことだと思っていきましたが…』

そういう姉さんの表情には若干の殺意と悪意が見え隠れしていた。あれは絶対怒ってる！！

『アタシは吉井……、明久君とは最近まであまり親しくなくて話しもしなかったの、ちよつと他人行儀なもの仕方ないかと…』  
『そうですね。ウチのアキ君はバカでエッチで甲斐性ですつとことつこいの歩くわいせつ物ですから、いろいろご迷惑も掛けてしまっただしょう』

『い、いえそんな………』

「ちよつとお！？ あんまり木下さんの前で僕の評価を著しく下げるような言動は謹んでくれないかな!？」

台所からリビングに向かって叫ぶ。

いくらなんでもその言い方はあんまりじゃないかな!？ これが他人だったら苛めと言われてもおかしくないレベルだよ!？ いや他人どころか身内でも十分な虐待だ!!

「何ですかアキ君。家で大声を上げるなんて非常識ですよ」

「大声小声以前に言動そのものがそもそも非常識な人に常識を問われたくないよ!？」

駄目だ。あの姉さんを放っておいたら今度はどんな辱めを受けるかわかったもんじゃない。

すぐにプレートを洗おうと思ったけど、一旦中止だ。

付けかけたエプロンを片付け、お茶を人数分用意して僕もリビング

で腰を下ろす。

それと同時に、隣に座っていた木下さんが僕に向かってひそひそと耳打ちしてきた。

《聞いてはいたけど、吉井君のお姉さんって、…なんだかいろいろ変わってるわね》

《言わないで…、僕も10年以上前から十分理解してるから、一応言っておくとこれでも前よりは少しマシになったんだよ？》

《……ホント、いろんな意味で愛されてるわね》

嬉しくない。

「そういえば、アキ君。昨日姉さんが用意した体操服とブルマをどこへ置いたか知りませんか？ あれがないと今日は組み体操ごっこができませんね」

やっぱり 姉さんは僕が突然女の子を連れてきたから怒ってるんだ。

さてはまた僕を自殺に追い込む魂胆か！？

「は、ははは、何言ってるのさ姉さん。それじゃまるで僕が常日頃から姉さんと体操服来て組み体操してるみたいじゃないか」

「何を言ってるのですか。昨日だってあんなに激しく」

「違うよ木下さん！！ 僕は普段から姉さんとそんなことするような奇抜な間柄じゃないからね！！ 御願いだから僕を信じて！！」

「…あーはいはい。大体わかったわよ吉井君の家庭環境は…。アンタもいろいろ大変ね」

よかった。木下さんが理解ある人で本当によかった！！

「やれやれ、姉というのはどこも難儀なものじゃのう。ワシのとこ」

は精神面より肉体面が特に」

「何か言った秀吉？（ニコ）」

「い、いや、何でもないので……」

再び優等生スマイルを取り戻したお姉さんが笑顔で秀吉を睨んだ。

その視線に秀吉は冷や汗を掻きながら目を逸らす。

……向こうも向こうで、複雑な事情があるみたいだねえ。

優子 side

たこ焼きを焼く機械のプレートを洗うとかで吉井君は再び台所へ引  
つ込んでいった。

アタシも手伝おうと思ったけど、吉井君に『木下さんはお客さんな  
んだから、ゆっくりしてて』と言われ丁重にお断りされてしまった。  
…手持ち無沙汰になったアタシは座ったままなんとなく周囲を見回  
す。

吉井君の住んでるマンションは……、家族で暮らすことを想定して  
いたのか。一人暮らしだったと聞いて想像したものよりかは遥かに  
広かった。

お姉さんが来るまでずっとここに一人で住んでたんだと思うと、羨  
ましい反面、少し寂しくも思えた。

「こんなに沢山の友達に恵まれて…、アキ君は幸せ者ですね」

アタシと秀吉に目を向け、吉井君のお姉さん……、玲さんは小さく微笑みながらポツリと呟いた。

「ワシや雄二達は明久とは1年からの付き合いじゃが、生まれてこの方、あのような面白い人物にあったことはなかったぞい。寧ろ明久と出会えて僥倖だったのはワシらのほうじゃ」

「そう言っつて貰えれば、姉としても鼻が高いです」

……ホントこの人。マジメな時とふざけてる時のギャップが凄いわね。

普段からこうなら多分アタシも素直に尊敬できる人物だと思うのに、吉井家の血筋はいろいろ残念な部分がある。

そして何より玲さんは、……体格が凄い。……主に胸。何あれ？ Eカップ以上じゃないの。

まるでグラビア雑誌に載っているような完璧なボディスタイル。アタシと同じ女の体とは思えないわ……。

あの胸を少しでいいからアタシにも分けて欲しい。まったく世の中は不公平だ。

「どうして玲さんはこっちに帰って来たんですか？」

せつかくだからこの機会に吉井家の事情を少しでも知っておこうと思っつて玲さんに問を投げる。

「優子さんはアキ君の成績を知っていますか？」

「え？ 一応は……、実際に見たことはありませんけど……」  
「……そうですか」

そう言っつと、玲さんは立ち上がり何処かへ消えていった。

数分ほどすると、玲さんは手にA4サイズのプリントのようなものを持ちながら戻ってきてさっきと同じ位置で腰を下ろす。

「これを見てください」

そして、それを卓上に置いた。

…これは、テストの解答用紙？

英語 Fクラス 出席番号\*\*\*\* 吉井明久

45点

「……一人暮らし。してもいいと思いますか？」

「駄目ですね」

即答。

『はっ！？ ……なんだか僕のプライバシーが衆目に晒されている気がする！！』

台所で吉井君が何かのテレパシーをキャッチしていた。

……ていつか。秀吉もそうだけど、どうやったらこんな点数取れるのよ……。

普通の学校ならいざ知らず。上限なしの文月学園の学力テストでこれはひどい。模試で例えるなら問答無用の1桁台だ。

一日5分でも勉強すればこれ以上の点数を取れるでしょうに……。

「そついう事情もあって、私は急遽日本へ帰国してきたのです」

少し疲れたような顔で嘆息しながら玲さんは言った。

「……むう、他人事に見えんから恐ろしいのう……」

「そう思うならアンタも演劇にばかり夢中になってないで少しは勉強なさい。……アタシもなんとなく他人ごとに思えなくなってきたわ」

まさかこの人と同じ想いを抱くとは思わなかった。

「私はアキ君が一人暮らしをするときに2つの条件を出しました。

1つは『ゲームは一日三十分まで』。二つ目は『不純異性交遊は全面禁止』。けれど、今までのアキ君はどれ一つとして守れてはいませんでした。こうなれば姉さんが近くでアキ君の様子をじっくり観察し、今後の生活習慣を見直すしかありません。とそう考えたのです」

言ってることは至極立派に見えるけど、内容はわりとチープね。でも、納得はできた。……一部を除いて

「そういえば、姉上殿はどうして明久の異性との関わりを妨げるのじゃっ？」

それはアタシも一番気になっていたところだ。

心の中で秀吉ナイスとメールを送った。

「簡単な話です。……普段から情けない上に生活力もなくブサイクなああの弟を相手にしてくれるような女性は姉さんや母さんぐらいいかないませんから」

淡々と語る玲さん。理解した。

この人はきつと世界で一番吉井君を愛しているわ。でも不思議。ちつとも悔しくない。

それ以前に実に弟に対してなんて言い草だ。アタシでも秀吉を他人に話す時はここまで言ったことはない。

「だから、あの子は決して異性の目に魅力的に写ることはありません。そんなアキ君に近づいてくるのは、きつとアキ君を騙そうとする悪い人です。だから私は弟が騙されて悲しい想いをしないように、心配して不純異性交友を禁止しました」

長々と告げた。秀吉は傍でそこまで言うか…と口には出さないが表情に出ていた。

多分、玲さんは純粋に吉井君のことが心配でこういうことを言ったんだと思う。そこに不純な悪意は一遍もないだろう。それは玲さんの表情からも見て取れる。

玲さんは心から吉井君のことが大好きなんだ。…それが姉弟としてか一人の異性としてかは怪しいけど、

……だからこそ、アタシは玲さんの言葉に素直に頷くことは出来なかった。

「そんなこと、ないと思います」

「姉上？」

「……優子さん？」

確かに吉井君は人一倍お人好しだし普段から坂本君達に騙されたりしてる。

いろんな意味で玲さんの不安で的中してるだろう。

でも、吉井君は決してそれだけじゃない。……アタシはそれを知ってるはずだから

だから、アタシは玲さんに反論する。

「吉井君は普段から鈍感で頭は悪くて異性に対する配慮もなくてお調子者で後先考えないバカですけど、……でも、吉井君はそれだけじゃないです。……吉井君は誰かのために怒れたり、見ず知らずの人でも一生懸命になれたり、嬉しい時は一緒に笑ってくれて困った時は最後まで一緒に悩んでくれる。……吉井君は、そんな『努力では手に入らないもの』を沢山持っていると思います。そういう純粋すぎる思いに心が惹かれる人だっています」

アタシみたいに。と言いかけて慌てて口を噤んだ。

アタシってば吉井君の実のお姉さんの前で何言ってるのよ!?

「ご、ごめんなさい!! 場も弁えないで勝手にペラペラ……」

頭を下げる。

ああもう何熱くなっちゃってるのよアタシ!! これじゃ最高に気まずいじゃない!!

これからみんな楽しんでやろうとしてるのにいきなり水を注す行為をしてしまった。

はあ……、やっぱりアタシだけ帰ったほうがいいかな……。今でこれじゃ幸先が不安で仕方がない。

「優子さん。顔を上げてください」

申し訳なさで一杯だったけど、

そう言った玲さんの声色は、何故か母親のような温かみを感じられた。

「…はい」

言われたと通りに下げた頭を上げる。  
改めて見る玲さんの顔には、さつきとは別の柔らかい微笑みが浮かんでいた。

「すみません。先ほどの言葉は撤回しますね。……確かにアキ君にだっていいところは沢山あります」

「え？」

「……本当に、アキ君は幸せ者ですね。ここまで想ってくれる人がいてくれるなんて」

「あ！？ えつとそれは！？」

そう言われ、アタシは唐突に照れくさくなって瞳を泳がせてしまった。

う…、恥ずかしいとかそういう問題じゃない！？ ……なんというか。もうこのまま家まで全力疾走した気分！！

「優子さん。これからもアキ君のこと、よろしくおねがいます」

さつきとは逆に、今度は玲さんがペコリと頭を下げた。

「いえ！？ その……………はい」

頷いちゃった…。うわぁ羞恥で身悶えてしまいそう！？

「よかったのう姉上。ワシは応援しとるぞ」

「あれ？ 皆何の話してたの？」

エプロン姿の吉井君がこっちにやってくる。

「な、なんでもないわよ！？ それよりやっぱり何か手伝おうこと

ない！？ 手持ち無沙汰になっちゃって」

「そう？ じゃあ……、取りあえず今洗い終えたプレートを拭いてもらっていいかな？」

「うん。それぐらいお安い御用よ！！ 早く行きましょう！！」

「あ、うん。……姉さん。木下さんに何したの？」

「心外ですアキ君。姉さん”は”何もしていませんよ」

言いながら、玲さんはアタシの目を見て小さくウィンクした。

……これは、よかったのかな……？

## 第6話

「アキー。来たわよー」

インターホン越しに、そんな美波の声が聞こえてきた。あれから大体1時間半ぐらいだ。

「いらっしやい。待ってたよ」

ドアを開けて出迎える。するとそこには、制服姿のいつものメンバーと霧島さんと工藤さんの全員の姿があった。

「遠慮せずが上がつてよ。リビングに秀吉とお姉さんもいるから」

「そうか。そういうことなら、遠慮なく。おじやまします」

「「「おじやまします」」」

僕は通りやすいように身体を避けて通路を作る。全員が入り終わった後は後ろ手で玄関に鍵を掛けてから僕もリビングへ向かった。

「ようこそいらっしやいました。今日はゆっくりしていつてくださ  
い」

中に入ると、微笑を浮べた姉さんがみんなを歓迎していた。

美波達は口々に挨拶すると、それぞれテーブルの前で腰を下ろしたり台所や部屋を観察したりしていた。

……うーん、流石にこの人数だとちよつと手狭だね。

「みんな待っておったぞ」

「おう。……あれ？ 秀吉。お前の姉貴はどうしたんだ？」

「姉上なら、ほれ、あそこじゃ」

さつきまで姉さんとのんびりお茶を飲んでいた秀吉が台所へ向かって指を指す。

その先には、制服の上から猫柄のエプロン（僕の予備のやつ）をつけて手に小さめの包丁を持ち真剣な表情でりんごの皮むきをしている木下さんがいた。

「……………っ！……！（パシャパシャパシャ）」

「わぁ優子。すっごいエプロン似合っているよ！！ もう花嫁修業なんて積極的だねー」と工藤さんがからかい混じりに言う。

「う、うるさいわね。…今ちょっと集中してるんだから……………」

工藤さんの方は向かず。木下さんは目の前のりんごだけを凝視している。

ちなみにこのりんご。僕も一緒になって剥いてただけで、すでに10分ほど前から切り終わっていたりする。

なんかこう…、悪戦苦闘しながらも一生懸命ゆっくりと皮を切っていく姿を見ると、僕が始めて料理した時のことを思い出して微笑ましくなってくるんだよね。

木下さんはそんな余裕の表情が気に食わないみたいだけど。それとムツッリーニ。今撮ったその写真全部買うからね。視線でそう訴える。

「……………（コクン）了解。荷物はどうする？」

「適当なところへ置いておいていいよ。て、たこ焼きにしては随分量が多いね……………」

ドサツという音を出しながら床に置かれた袋は、何故か中身がパンパンに詰まっていた。……………何買ってきたんだろう。

一応確認しておこうか。

卵2パック

薄力粉1袋

タコ（ぶつ切り）2パック

きざみネギ

イカ

キムチ

お漬物

…すき焼き用の豆腐

…練りわさび

…メロン（切つてある奴）

…ハラムーチョチップス

「……………」

……………あれ？　なんかおかしくない？

明らかにたこ焼きと無関係なものまで入ってるんだけど……………。

「……………工藤さん」

「ん？　何カナ吉井君」

「…この豆腐やメロンは何に使うのかな…？　ひよっとして食後のデザートか何か？」

すき焼き豆腐を使ったデザートって何だよと思いつながら僕は一抹の希望に賭けた。

「それは勿論。たこ焼きに入れる具材の一部だよ」

……………清清しい態度と軽々しい口調で工藤さんは僕の希望を打ち砕

いた。

いやいやいや!? おかしいでしょ!!! 百歩…、いや千歩譲って豆腐はいいとしよう。

けどメロンやハラムーチョって何!? 工藤さんはたこ焼きにどんなイメージを抱いているの!?

最初に袋を開けたときにタコが2パックしかなくてこれで10人分作れるのかなーって疑問には思ったけどさ!? これじゃわさび焼きメロン焼きだよ!!!

僕のたこ焼きの常識が根本から覆されようとしている!?

「吉井君。りんご切り終わったんだけど……、ってどうしてそんな苦悶に顔を歪ませてるのよ…」

「楽しいたこ焼きパーティーのはずがいつのまにか泥沼のロシアンル―レットに変わっていたんだ……」

「はあ?」

百聞は一見にしかず。というわけで木下さんにも袋の中身を見せてあげた。

「……………何これ? まさかこれを全部たこ焼きに入れるの? ……」

中身を見た木下さんは目を丸くして驚愕の表情で質問する。

「……………そう。買出しの時に雄二が決めた」

「雄二!!! 貴様が諸悪の根源か!!!」

本当にコイツは余計なことしかしないな!!!

「落ち着けて、タコ以外にも以外といけるもんだってあるんだぞ」

「ならこのわさびとメロンはなんだよ!! こんなのたこ焼きにしたって明らかにゲテモノ料理になるじゃないか!!」

「それを買ったのは俺じゃねえよ!？」

「じゃあ誰なんだよ!!」

「あ、そのわさびとハラムーチョとキムチを買ったのは私です」

……そう宣言したのは、姫路さんだった。

ことの重大性に気がついた僕は慌てて雄二と秀吉とムツツリー二を困い作戦会議を開く。

《2人共どうして姫路さんに買い物させたの!？》

《会計をしたのは姫路だったから気がつかなかったんだよ!? 俺だって予想外だ!!》

《………面目ない》

《いや、まだ食べられるものだっただけマシじゃろう……、あれならば万が一食べても死にはすまい》

《もうなんか判断基準がおかしくなってるんだけど……》

食べられる条件が生きるか死ぬかってどうよ。

「アンタ達なんの話してるのよ」と美波。

「な、なんでもないよ!! さあ早くたこ焼きを作るー!!」

「……おーっ!!」

精一杯の空元気で虚勢を張る僕達。

姫路さんの必殺料理人ぶりを知っているのは今のところ僕達だけだ。自分の料理が人を殺せるなんてこんなの本人が聞いたらシヨックを受けるだろうし、知らないなら知らないに越したことはない。

さつき秀吉が言ってたけど、今日のはまだ『食べられるレベル』の

料理だから変なことにはならないはずだ……。ならないよね？

さくつと具材を小さく切った後、たこ焼き生地を作ってから僕達は予備テーブルを連結させたりビングのテーブルに集まった。

「中に入れる具材はどうするの？」

「1週目は普通にタコでいいだろ。ゲテモノは別のボールに寄せてあるし」

「…なんかすごいことになってるわね」

ゲテモノ具材が一遍に詰まった銀のボールを見て美波が言葉を洩らす。

あの後、買った分だけでは数が少ないということと急遽冷蔵庫から適当な具材をみんなで選び取りゲテモノたこ焼きの素材を増やした。おかげでボールの中にはルールや秩序といったものはまったく無縁で力オスな状態になっていた。

別にこんなことしなくても普通に食べればいいのに……。、そう言いたいところだけど、まあ、友達同士ならこういうのも悪くないよね。

「ねえアキ。…よかったらなんだけど、ウチにたこ焼きのあのひっくり返すやり方教えてくれないかな？」

隣に座っている美波が突然そんなことを言い出した。

「勿論いいよ。でも急にどうしたの？」

「だって……、ウチが作ってそれをアキに食べさせてあげたいから

……」

「へっ!？」

と、突然なにを言い出すの!？」

「明久君。私も御願ひします。私だって明久君に食べてもらいたいです」

「姫路さんまでっ!？ いや、いや、嬉しいけどみんなだっているんだし気持ちだけ受け取っておくよ……」

「遠慮しないでいいのよアキ」

「そうですね明久君」

「えっ!？ え……っ!？」

両側から詰め寄ってくる美波と姫路さん。その顔はいつもと違ってすごく優しげに微笑んでいた。

何っ!？ 急にこんなことを言い出すなんて2人に何が起こってるんだ!？」

言ってるて恥ずかしくなったのか。僕の前で微妙に頬を赤く染めた2人は……、思わずこっちが照れてしまうほど可愛かった。

「……」

「あ、姉上!？ そんなに強く握り締めたら箸が割れてしまっぞ!」

「アキ君。姉さんの前でセクハラ行為は許しませんよ？」

「ビュービュー。本当に吉井君の周りは面白いねー」

「……（パシヤパシヤ）」

「……雄二。私も」

「わかったわかったから箸の先端を俺に向けるな!! ……」

島田も姫路も今はそのへんにしとけ。さっさと生地を入れるぞ。明久は生姜とてんかすを入れてくれ」  
「あ、うん」

油の通ったプレートに雄二が窪みに向かってたこ焼きの生地を流し込む。ちなみに家のプレートは同時に20個焼けるやつだ。

その後僕が手でパラパラと生姜とてんかすを入れて最後にタコを投入してから雄二がもう一度生地を入れプレートを生地のにした。

そして数分後。程よく焼けたところでみんなが手に竹串を持ってプレートに顔を近づけた。

「この表面の生地を窪みに入れるようにかき集めて、そうそう。それから串を窪みの中に入れて軽く持ち上げるように……」

「む、難しいわね……」

「これを、……こうですね」

姫路さんが担当していたたこ焼きが綺麗に半回転する。たこ焼きはきちんと丸くなっていった。

「上手いよ姫路さん。その調子」

「そ、そうですね……。嬉しいです」

「むむむっ！？　ウチだつて負けないんだから！！」

美波はちよつと強引だったけど、結果的に丸くはなつたみたいだ。

雄二は霧島さん。ムツツリー二は残りのみんなにお手本のようにたこ焼きをひっくり返していく。

そうしているうちにあつという間にすべて焼き終わって、みんなそれぞれ小皿へ写してトッピングを加えて行く。

僕もさっそく一口いただこう。

パクッ

「あつ熱っ!?! はふはふ……。ゴクン……。うん、美味しいね!?!」

「私も美味しいです明久君」

「たこ焼きつてほとんど食べたことなかったけど、中々いけるわね」

「偶にはたこ焼きもいいもんだな」

「……………(こくこく)」

「うーん。これだよこれ。ボクが食べたかったのは」

「中々美味じゃのう」

「…本当、美味しいわね」

「……雄二が作ってくれたたこ焼き。美味しい」

「なんだかとても懐かしい味です。たこ焼きも悪くありませんね」

みんなが口々に感想を洩らす。

口の中に入ったアツアツの生地が丁度いい柔らかさで蕩げなんとも言えない幸せな気分になる。

僕、たこ焼きをこんなに美味しいなんて感じたのはひさしぶりだよ。

「アキ。これあげるから食べて……」

「明久君。私のもどうぞ」

2人は自分の小皿からさつき自分で作ったたこ焼きを僕の小皿に移してきた。

「あ、ありがとう……。でもそれじゃ2人の分がなくなっちゃうよ」

さつきも言ったけど、このタコ焼き機は一回で20個焼ける。つまり今は10人いるから一回焼くごとに1人2個食べられる。

けれどそれを人にあげたりしたら自分は1個しか食べれない。たと

え女子でもそれはちよつと物足りないはずだ。  
そんな僕の考えとは別に、2人は笑顔のまま口を開いた。

「アキの為に作ったんだからいいのよ。ほらほら」

「そうですね。遠慮なくどうぞ」

「そう……だね。そこまで言われて食べないのも失礼だね。うん。  
ありがとう美波。姫路さん」

2人に感謝して僕はありがたきたこ焼きを頂いた。：やっぱり人の  
好意を無碍にするのはよくないよね！！

「急に島田と姫路が積極的になったのう。2人の間に何があったん  
じやろう?」

「……………ふん」

「あらあら、アキ君にも困ったものですね」

「……………雄二。あーん」

「おい馬鹿やめろ!! 俺までそっちの世界に引きずり込むな!?  
もがもが!？」

「ムツツリーニ君も食べ……………ってここで鼻血出されても困るからや  
めとこっか」

「……………助かった……」

p i p i p i p i p i p i p i p i ! ?

「あ、私の携帯ですね、すみませんが少し失礼します」

姉さんが席を立ち携帯を耳に当てながら廊下へ出て行く。こんな時  
間に姉さん宛ての電話なんて珍しい。

「……はい。はい。わかりました」と微かに聞こえてきた姉さんの声  
が数分続いた後、少し申し訳なさそうな面持ちで再びリビングへ戻

ってきた。

「アキ君。申し訳ありませんが少し急用が出来てしまったので姉さんは会社に行つて来ます。皆さんはごゆっくりして行つてくださいなね」

「会社ですか…?」

「そうなんだ。ちょっと残念だけど…、仕事ならしょうがないね」

「はい。……それとアキ君。姉さんがいない間も”女性”に対しての不純な行為は一切許しませんのでそのつもりで」

「うん。わかつてるよ」

僕だつてそこまで心優しい姉だとは思つていない。

それからみんなに一礼した後、姉さんはすぐに家を出て行った。

「さて、…じゃあ本番のロシアンルーレットを始めるか!」

## 第7話

「さて、…じゃあ本番のロシアンルーレットを始めるか!!」

各自それぞれ食材を選び取りそれを生地の詰まったプレートの中に入れる。

極力中身がわからないよう選んでる人意外は全員目を瞑っていた。時計周りで最初は美波。そして最後は僕だ。

姉さんが離脱したので最初と最後、つまり僕と美波だけが食材を3つ入れることになった。

「はい。終わりました。明久君どうぞ」

隣から姫路の合図が聞こえた。

僕は若干緊張した面持ちでゆっくりと目を開けて現実を捉える。

「部屋中を包む”ジューっ!!”と生地の焼ける良い音がするプレートはほぼすべてが生地で包まれて沈んでしまった具材は目で見えない。」

「……これはこれで中々にスリルだ。」

「何せこれから食べる中身がまったくわからないんだから。……なんか一部だけ色の違うのがあるけど……。」

「さて、何を入れてやるのか……?」と息巻いて僕は銀のボールで

手で手繰り寄せる。

せつかなので激辛たこ焼き（タコはないけど）を作ったのであの雄二が泣き叫ぶ表情をみたいとも思うけど、今日はいかんせん人数が多い。

確立9分の1で必ずしも雄二に当たるとは限らないし、万が一姫路さんや木下さんの女子組に当たったら大変だ。

というわけで、ここは無難に”バター””イカ””お餅”と面白みはないけど食べたら案外いけそうな食材をチョイスしプレートの窪みにポチャン…と落とす。

「出来たよ」

「よし、……全員目を開けていいぞ」

雄二の言葉にずっと沈黙を保っていた全員がゆっくりと瞳を開く。

「みんな何を入れたか楽しみだね」

「こづいのも、なんだかわくわくしますね」

さすが、工藤さんと姫路さんはお気楽だ。霧島さんと木下さんは目の前の珍妙な食べ物に興味はあれどそれほど表情に変化はない。

神妙な顔でまだ固まっていけない生地を見つめ……いや睨んでいるのは僕と雄二と秀吉とムツリーニ。

目下、この四人に共通する事柄は一つだろう……。つまり

どれが姫路さんの選んだ具材が入っている奴か。……と。

今日は薬品類はないとはいえ、たこ焼きにわさびやハラムーチョを買ってくるような人だ。

もしかしたら甘味と辛味で奇跡のコラボレーションが発動するかもしれない。警戒に越したことはないだろう。

「……なんか1個だけ滅茶苦茶真っ赤に染まった奴があるんだけど……、これって何…？」

若干を顔を引きつらせながらも”それ”に指を指しながら美波は言った。

「赤いわね……。きつとタバスコとかコチヨジャンとかペッパーソースみたいな激辛のやつじゃない？」と木下さん

「……………おそらく」

「誰だこんなことをする明久は」

「もしも雄二。それって該当者僕しかいないよね？」

「明久君なんですか？」

「違うよ！！ やりたいなーとは思ってたけど今日はみんながいるからやらないよ！！」

「一応やりたいとは思ってたのじゃな……………」

そこは否定しない。

2巡目のたこ焼き（notタコ）がすべて焼け、それを一度すべて大皿に移した。

「自分の入れた奴だけ食べるんじゃないし、これを取る時は必ず目を瞑る事。そして一度手にとったやつは何があっても食べる事。いいな」

雄二の台詞にみんなが無言で頷く。

「……雄二。順番はどうするの？」

「面倒だから全員で一斉にとればいいだろ。じゃないと最後のやつが冷めちまうしな」

「わかりました」

「……………（コクン）」

「別にタコのまま普通に食べれば美味しいのに……………」

「確かにそうじゃが、これはこれで楽しいではないかのう。姉上」

「……………それもそうね」

そして、みんなが目を瞑って竹串にたこ焼き刺し、そのまま一斉に口に運んだ。

「辛っ！？ ハラムーショ辛っ！？ しかも生地になっただくにあつてないし！？」

「これは、バターか。……………不味くはないけど、別段美味くもないな……………」

「ウチは豆腐ね。結構いけるわよ」

「口の中で甘くてもによもによするんですけど、これはなんでしょうか……?」

「瑞希ちゃんのはメロンじゃないかな? ボクはお餅だったよ」

「……キムチは美味しくない……」

「………蒟蒻………味が無い……」

「食パンは中々美味じゃぞ」

「イカってタコとあんまり変わらないわね」

なんだ。初めてゲテモノたこ焼きをするときはどうなること思ったけど、これなら大丈夫そうだね。

そのまま2個目に突入し、わさび(僕)、団子、みかん、トマトなど当たり4割はずれ6割ぐらいのスペースで進んでいった。

僕、……さつきから辛いのはっかりじゃないか。しかも滅茶苦茶辛くて舌がヒリヒリするよ……。

ま、みんなが楽しんでるならこれはこれでいいけど。何だかんだ言っても僕だって楽しんでるし、……だからって別に辛いのが良いってわけじゃないよ?

「で……結局、残っちゃったね……」

「残ったわね」

「残っちゃいましたね」

僕と左右に座っている美波と姫路さんが綴るように口を開く。

ついに残り2つとなった大皿には例の真っ赤なたこ焼き(もはやそう呼ぶのも不穏当だけど)が堂々と真ん中に鎮座していた。

………確立2分の1の真のロシアルーレット。

んで、結局これは誰が作ったんだ……? 何が入ってるんだ……? 今のところ最有力候補は姫路さんなんだけど……、

「？ どうかしましたか？」  
「いや！？ なんでもないよ！！ ははは、これどうしよっか？」  
「そりゃ食べるしかないだろ。何言ってるんだお前」  
「……………誰が？」  
「えっと、…誰だろう…？」  
「ここは公平にジャンケンで負けた2組が食べるといっはどっじゃ  
るっ？」

……………、

「最初はグーっ！！！！！！！！！！」 雄二  
「じゃーんけんっ！！！！！！！！！！」 僕  
「「ポイっ！！！！！！！！」 秀吉とムツツリー二

そして、選ばれた2人の生贄はっ！？

「……………」 「グー」

「がんばるのじゃぞ明久」 パー  
「吉井君もいいけど辛さで悶絶する優子も面白そうだね」 パー  
「……………優子。ファイト」 パー  
「やっぱりこういうときの主役は明久だよな」 パー  
「……………（コクコク）」 パー  
「アキ。木下さんの為にもここは男のアンタが思い切って食べてし  
まいなさい」 パー  
「えっと…、なんだかごめんなさい」 パー

「くっ……！？」

手をグーにした自分が憎らしい！！

……今日ほど僕は自分の悪い予感が外れて欲しいと思った時はない。きっと神様は僕のことか心底大嫌いなんだ……。わかってたけどね……。僕だって神様なんか大嫌いだよ！！

そして、ご機嫌そうな雄二が2つのたこ焼きにそれぞれ竹串を刺す。

「んじゃ。2人は目を瞑ってこの竹串のどっちかを掴むこと。わか  
ってるだろうが、捕った以上は絶対食べよ」

「……わかってるわよ」

「うん」

お互いしかめ面で大皿へ視線を向ける。

……やっぱりここは男である僕が食べるべきだよな。きっと何も  
しなくても僕が食べることになりそうだけど、もしかしたらがある  
かもしれないし。

ちらりと美波の代わりに隣に座った木下さんを横目で観察する。  
すると、彼女も僕に視線を向けていて、ぱったりと目が合った。

唐突なこと思わず恥ずかしくなって顔を逸らす僕に木下さんはジ  
ト目を向けながら、

「…変なこと考えてそうな顔ね」

「別に変なことじゃないけど……、ただ木下さんは女の子なんだか  
らこんな食べたら病気になるっちゃんいそんなものを食べるのは駄目な  
んじゃないかと思って、やっぱり僕が食べ」

「嫌よ」

ええっ！？何で！？

「アタシ、勝負事で勝敗を譲られるのは大嫌いな。アタシにとってそれはどんな痛みより屈辱的だわ」

「勝負じゃないんだけど……」

「揚げ足取るな！！ ふん。アンタに心配されるほど落ちぶれてないわよアタシは。……ほら、口を動かしてないで手を動かさなさいよ」

「う、うん……」

ふいつと木下さんは僕から顔を背ける。

な、なんか今はご機嫌斜めみたいだ……。何かあったのかな……。まさか今回も僕の所為？

……でも今は何を言っても駄目そうだし……。どうか木下さんに当たらないことを祈るしかない。

そして、僕達はお互い瞳を伏せ手を前に向ける。

もはや問題の大皿の場所自体どこかわからない状況で、僕は手で雲を掴むように左右に伸ばし、手の甲にコツンと細い何かが当たるのを感じた。

これだ！！

ガシッと僕は（はずれだと）確信を持って竹串を掴み。福引で当たりを願うように、キッと強く閉じた目をゆっくりと開く。

……串の先に刺さっていたのは、……ホカホカと暖かそうな見た目のなんの変哲もないくすんだ黄色い生地のため焼きたった……。

「……………は？」

あれ？ 展開的にここは僕がゲテモノ引いて泣きながら口に入れて

「不幸だあー！！」とか言う結末じゃないの？

「……………」

隣では木下さんが目を丸くしたまま呆然と自分の手に取った真つ赤な丸い物体を見つめていた。

……………おそらくここにいる全員が思い浮かんであるう予定調和が外れた以外の展開に、バカメンバー＋美波と姫路さんも軽い放心状態になっっていた。

「おーっ！？ 何だかんだ言って絶対吉井君だと思ってたのにこれは番狂わせが来たね」

「……………残念だったね優子。でもルールだから、頑張ってる」

Aクラスの2人が竹串を持ったまま固まってる木下さんにエールを送る。

「明久。それでも男か」

「……………見損なつた」

「ワシは何も言うまい……………」

「あれっ！？ なんで僕が非難されてるの？ これって実力要素皆無の運要素以外何も織り交ざってないはずだよね！？ そして秀吉。その無言はある意味直接暴言を言われるよりひどい！！」

くっ！？ なんだか理不尽だ！！

「……………いいわよ。吉井君の言うとおりアタシの運が悪かったただけなんだから。食べるわ」

「えっ！？ や、やっぱり駄目だよ！！ 女の子にこんなものは

」

「吉井君」

軽い嘆息を吐いた木下さんは鮮やか過ぎるほど赤いたこ焼きを口元まで持つて行きながら僕の方に顔を向いた。

そのまま耳下まで近づいて……、近い!? 近いよ!? やばい鼓動がエマーゼンシー!?

耳元を感じる木下さんの息遣いに全身を硬直していると、

《ごめん。これ、実はアタシが入れたの》

……え?

「……木下……さん……?」

「やっぱり悪いことすると罰って当たるのね……。これからの教訓にしましょう」

「ちよっ!?!?」

焦って僕が止めようとする前に、木下さんはとても人間の食べる物には見えないたこ焼きを一気に口に含んだ。

本当に食べちゃったよ!!

そして、竹串を口に啜えたまま、木下さんは瞬き一つせず動かなくなつた。

「ゆ、優子? なんか顔が硬直したまま真っ赤になつたり真っ青になつたり怒つたり泣いたり百面相になつてるけど大丈夫……?」

「明らかに大丈夫そうな顔じゃないだろ。おい明久水もってこい」

「う、うん!!」

……バタンっ

「き、木下さーん!?」

「ちよっ!? なんか倒れちゃったんだけど!? あれって何が入ったのよ!?」

「……優子!?」

「あ、姉上え!?」

「……応急処置!?」

「いや待てムツツリーニ。この状況で輸血パックは必要ないぞ!!  
ってなんでお前まで鼻血垂れ流してんだよ!! 今度は何を  
見やがった!!」

「……わが生涯に一遍の悔いなし…(ボタン)」

「うわあ!? ムツツリーニ君まで倒れちゃったよ!!」

「えっ!? どうしてムツツリーニが!?」

「アキ!! 早く土屋に輸血パックを!」

カーペットの上にぶつ倒れた木下さんが真っ赤になった顔で小さく  
『み……水』と呟いたのが微かに聞こえた。

…よかった。気絶はしていないみたいだ。

でも辛いだけでここまでになるなんて……、いや、辛いものって  
うのは見た目で勝手に僕達が決めたことで、そもそも前提として辛  
いものとは限らないわけで……

人を気絶する寸前まで追い込むなんて…、そんな珍妙な食材家にあ  
ったっけ……?

結局、あれには何が入っていたんだろう……?

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1225x/>

---

バカとテストと優等生

2011年12月1日00時51分発行